

Update Information:

2026/09/05/ 10:18 PM

◆各話へのクイックリンク

※設定資料を飛ばして、本編を読まれる方は、クイックリンクを使って飛ばすことができます。

[□ 第一話](#)

[□ 第二話](#)

[□ 第三話](#)

[□ 第四話](#)

[□ 第五話](#)

[□ 第六話](#)

[□ 第七話](#)

[□ 第八話](#)

[□ 第九話](#)

[□ 第十話](#)

Copyright@2026 D'S

設定資料

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

夢雄 美侶

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

※前編 第一話 から 第四話 まで

※後編 第五話 から 第十話 まで

工業高校に入学した、超変態女子高校生 夢前 美優の周りで起こる
ドタバタ学園コメディ

二学期になり、さらにエロに目覚める生徒達

体育祭、文化祭と エロの祭典で、彼女達に迫る危機とは

変態、痴女、BL、TL ときどき、シリアス 何でもあるの

まさに、エンターテイメント。

★本作

・「私が工業高校に進学した理由 一学期」

・「私が工業高校に進学した理由 二学期」

・ 前編 第一話から第四話まで

・ 後編 第五話から第十話まで

・ クリスマス特別編（短編）

・「私が工業高校に進学した理由 三学期」

記号

□第○幕 サブタイトル
○場所
▽ト書き

Copyright@2026 D³S

※全話を通しての設定で

登場人物

◎メインキャスト

※シリーズを通してのキャストです

夢前 美優（ゆめさき みう）（十五歳）

身長164センチ

本人は思っていないが、スタイはいい

高校一年生、（増本中学校出身）

成績は普通

ブラスバンド部に「入っており、中学では、

高校ではクラリネットを担当している

人前ではウヴな振りをしているが、内面は超エロエロ

ひとつ ひとよりエロが好き

ふたつ ふふふ とスケベ心

みつつ 見たくてたまらない

よつつ よろけて、わしづかみ

いつつ いかせてなんぼやねん

高谷 智美（たかたに とみ）（十五歳）

身長160センチ

高校一年生

野球部マネージャー

三人の中では背も高くおしやれ

みんなの前では経験済みの振りをしているが、実は経験無し

中学時代は、虐められていた

※智美の過去は二学期編で明かされる

中川 松子（なかがわ まつこ）（十五歳）

身長154センチ

高校一年生（辺富中学校出身）

吉賀に恋する乙女

成績優秀

大学へ進学するためにカメラ屋でバイトをしている

同じ中学校の出身に小島がいる

小村 健一（こむら けんいち）（十五歳）

高校一年生（増本中学校出身）

身長176センチ スタイルもいい

イケメンで、女子にもてる要素をもちながらも、すごく純粋で

世間知らずなところあり。

吉賀 達郎（よしが たつお）（十五歳）

高校一年生

身長 160センチ 体重48キロ 華奢で色白

カリブ海に浮かぶ小国の外交官の息子

海外生活のため、露出など気にならない性格

小村のことが好きである

松村 純（まつむら じゅん）（十五歳）

高校一年生

身長161センチ 体重52キロ

普段は黒縁メガネをかけている

水泳部に所属している

根暗で温和しい性格

実は、服を脱ぐと、見事な筋肉質の肉体を持ち、ボクシング、空手、

などを会得し 喧嘩はかなり強い

※松村の過去は第三部で判明

（補足） 家族構成

■夢前家

郊外の住宅地に住んでいる

二階建ての一軒家 よくある注文住宅
美優、美穂の部屋が二階にある

父 (現時点・無名)

普通のサラリーマン40代

母 (現時点・無名)
コンピュータ関係の仕事をしており、ITに長けている

姉 美穂(みほ) 美優の二歳年上(十七歳)

秀才で成績は常にトップ

※中学までは、それほど成績はよくなく、中学のある出会いから
猛勉強し超難関国立大学に自宅から通っている

そのためか おしゃれに疎くすっぱんで、服もシンプル

小村家

郊外の住宅地に住んでいる

二階建ての一軒家 よくある注文住宅

父 浩太郎(こうたろう)(四十四歳)

ごくごく普通の会社でサラリーマンをしている

しかし、裏では絶大な人気を誇るアダルト小説を書いており
稼いでいる。家族にはまったく知られていない。

母 明日香（こむら あすか）（四十歳）
専業主婦

妹 明日美（こむら あすみ）健一の一つ下（二四歳）

吉賀家

代々カリブ海に浮かぶ小国の外交官をしている

祖父 吉賀 XXX（現時点・無名）
父 吉賀 XXX（現時点・無名）
母 吉賀 遥（はるか）

中川家

祖母（現時点・無名）
日本海の海岸近くに住む
実は大地主

小島家

郊外の住宅地に住んでいる
二階建ての木造建築
小島の部屋二階の和室
隣が姉（優子）の部屋

優子は、二年生で出演

○クラスメイト

2組の生徒は、3年間持ち上がりのため、変更はありません。

★主要人物

☆準主要人物

出席番号

1 足立 (あだち)

2 井口 (いぐち)
バレーボール部
喧嘩ばやい正確をしている

3 池田 (いけだ)
サッカー部
小島の仲間

4 石井 盆太 (いしい ぼんた)
通称 ボンソワール

☆

1
2

小島

智（こじま とも）

身長172センチ 普通体系だが、顔が大きい

ため振り、しかも、怪獣映画に出てきそうな顔

山岳部

二次元萌えキャラ大好き

好きな色は ピンク

しかし。二次元キャラに飽き足らず、カワイイ男の子

吉賀、松村のことも狙っている

1
1

木高

（きだか）

1
0

桂川

（かつらがわ）

9

柿本

（かきもと）

8

尾方

（おがた）

7

太田

（おおた）

6

遠藤

（えんどう）

5

岩山

（いわやま）

二年生編では、姉（優子）がおり、美優の姉と同じ大学に通っている事が判明

★

13

小村 健一（こむら けんいち）

バスケットボール部

14

塩屋 （しおや）

小島の仲間

15

柴山（しばやま）

16

白石 （しらいし）

17

高石 （たかいし）

☆

18

滝本 恵（たきもと めぐみ）

ラグビー部

元々、美優、小村と同じ中学出身

がっちりした体格で、高校ではラグビー部に所属
二部の文化祭で、年上のAV女性に好意を持ち、
クリスマスに関係を持ってしまう。

そしてAV女性が、小村の父親と知り合いであり、

滝本にはバレてしまう

19 谷田 (たにだ)

クラスではイケメンボーイで もてる容姿をしている
いつも中林と連んでいる

20 津世 (つせ)

演芸同好会

21 手柄 (てがら)

22 豊国 (とよくに)

23 中尾 (なかお)

バドミントン部

24 中谷 (なかたに)

25 中野 (なかの)

バスケットボール部
身長が高い

3 5	福山	俊雄 (ふくやまとしお)
3 4	福井	良樹(ふくい ラグビー部 よしき)
3 3	百部	(ひやくべ)
3 2	鼻瀬	(はなせ)
3 1	野村	(のむら)
3 0	沼田	(ぬまた)
2 9	新田	(にった)
2 8	永江	(ながえ)
2 7	中山	(なかやま)
2 6	中林	(なかばやし)

★ 36 松村 純 (まつむら じゅん)

水泳部

★ 37 吉賀 達郎 (よしが たつお)

バスケットボール部

★ 38 高谷 智美 (たかたに ともみ)

野球部マネージャー

★ 39 中川 松子 (なかがわ まつこ)

★ 40 夢前 美優 (ゆめさき みう)

吹奏楽部 クラリネット担当

○教師

竹田 (たけだ) 50代

クラスの担任で、てっぺんハゲがあることから、入学早々から
ザビエルとあだ名を付けられる

見た目と違い、生徒思いの良い先生である

☆ 土呂 (とろ) 40代

保健体育担当

ゲイであり、男子生徒の股間を触るのが生きがい

落合（おちあい）男 五十代

工業化学科の教員

山田（やまだ）女 四十代

工業化学科の教員

■その他 （出数は少ないが、物語上 重要な役）

○一学期に登場

マヌカンの店長（名前は未定）推定四十代

吉賀行きつけのアパレルショップ（ディーゼル）の店長

実際は、ディーゼルの日本支社長も兼ねている

当然、男好きで、吉賀が連れてきた小村にちょっかいを出す

スリムで長身の男性

金髪で指には付け爪

○二学期に登場

川崎 (かわさき)

三年一組 デザイン科 三年では一番のイケメンと言われている
大学受験で、推薦入学をしたく、大倉のいいなりになっている

古屋 豪 (ふるや たけし) 推定三十代

※X接点の古屋と同一人物

小村のバイト先に客として登場
男色家である

須賀 小雪 (すが こゆき) 推定 三十代

美人、AV女優をしている

文化祭で滝本と出会い、付き合うようになる

白井 幸子 (しらい さちこ) ※二学期に出演

智美 中学時代のクラスメートで、智美を虐めていた

○三学期で登場

花北 大悟 (はなきた だいご) ※三学期に出演

露天商で、たこ焼きを焼いている

松村の父を尊敬している

浜田（はまだ）

高校二年生

身長170センチ 体重54キロ 色白で華奢な身体

中学時代は、陸上の長距離をやっていた

美優の一学年上 吹奏楽部 暫定部長

美優と同じでクラリネットを担当している

二宮（にのみや）通称 ニノ

高校二年生

吹奏楽部 トランペット担当

浜田に密かに恋をしている

浜野 智恵（はまの ちえ）

高校三年生

吹奏楽部の元部長を務める

清瀬（きよせ）

高校三年生 浜野と同じ吹奏楽部

背景

学校（主舞台）について

姫磨工業高等学校（ひめまろこうぎようこうとうがっこう）

美優達が通う高校

県立高校であり

一組・デザイン科

二組・工業化学科

三組・電気科

四組・機械科

五組・溶接科

六組・情報処理科

で構成される。

各科ごとに校舎がわかれており、敷地はかなり広い

シャワー室を備えた部活棟があり、二十五メートルの屋外プールを備える

クラブ活動

男子生徒が大半を占めているため、女子はマネージャーとなることが多い

・吹奏楽部

県内一の実力があり数々の大会で優勝している

・バスケットボール部

- ・ラグビー部
- ・サッカー部
- ・テニス部
- ・バドミントン部
- ・山岳部
- ・野球部
- ・陸上部
- ・水泳部
- ・極真空手部
- ・Eスポーツ部
- ・鉄道同好会
- ・クイズ同好会
- ・演芸同好会

○夢前家

若松町

○小村家

○吉賀の住むタワーマンション

新増山（しんますやま レジデンス）
五十階建ての構想マンション 最上階に吉賀が住んでいる

Copyright@2026 D's

目次

目次

設定資料

全体あらすじ

シリーズ構成

記号

全話共通設定

※全話を通しての設定で

◎メインキャスト

(補足) 家族構成

○クラスメイト

○教師

■その他 (出数は少ないが、物語上 重要な役)

○一学期に登場

○二学期に登場

○三学期で登場

背景

学校（主舞台）について	19
クラブ活動	19
目次	21
第一話	34
サブタイトル「二期がはじまるよ」	36
本話について	36
あらすじ	36
登場人物（本話のみ）	36
□第一幕 今日から二期	37
○（朝）夢前家 玄関	37
○通学路	37
○県立姫磨工業高校の校門近く	38
○（朝）一年二組の教室	40
□第二幕 小島 再び	44
○（放課後）部活の時間 プールサイド	44
○プールの機械室	47
第二話	60

サブタイトル「体育祭が始まるよ」.....623

本話について.....61

あらすじ.....61

登場人物（本話のみ）.....61

□ 第一幕 体育祭準備委員会.....62

○ ある日の体育の授業 運動場にて.....62

○（その日の放課後）生徒会室.....63

第二幕 土呂の家での出来事.....65

○（数日後の放課後）生徒会室.....65

○（夜）土呂が住んでいるマンション.....66

○（夜）帰り道.....88

← # インサート # ← 土呂の家.....91

→ # インサート # →91

← # インサート # ← 土呂の家.....92

→ # インサート # →92

（数分後）.....92

○ 美優の家の前.....93

○夢前家 94²⁴

○美優の部屋 94

□第三幕 体育大会 96

○（土曜日）姫磨工業高校の運動場 96

○学校の運動所 前方の本部テントの記録係の席 96

第三話 105

サブタイトル「文化祭の準備をはじめよ」 106

本話について 106

あらすじ 106

登場人物（本話のみ） 106

□ 第一幕 美魔女達の巣窟 107

○（夕方）一年二組の教室 107

←# インサート # ← デザイン科の職員室 112

→# インサート # → 113

←# インサート # ← デザイン科の職員室 113

→# インサート # → 113

←# インサート # ← 大倉が廊下を歩くシーン 114

→ # インサート # →	116
← ERO MODE ← # 吉賀&小村	115
○ (次の日の放課後) 学校の廊下	116
○ デザイン科校舎の二階の突き当たり 第一美術室	117
(美術室の見取り図)	117
→ ERO MODE →	138
□ 第二幕 2回目打ち合わせ	139
○ (翌週の放課後) デザイン科棟へ向かう廊下	139
□ 第三幕 打ち合わせ最終日	155
○ (翌日) 文化祭の日	180
第四話	182
サブタイトル「文化祭がはじまるよ」	183
本話について	183
あらすじ	183
登場人物 (本話のみ)	183
□ 第一幕 今日は文化祭	184
○ (文化祭の朝) 姫磨工業高校 工業化学科の実習棟	184

○一階の実習室の横の準備室	184
○女子更衣室	186
□第二幕 平常時 # 智美 #	191
○工業化学科実習棟 入口付近	191
○一階 実習室	192
□第三幕 # おばちゃん二人 VS 小村 #	194
○工業化学科実習棟 前	194
○おばちゃん二人組のテーブル	196
○実習準備室	201
□第四幕 # おばちゃん二人 VS 松村 #	204
○おばちゃん二人組のテーブル	204
○準備室	206
□第五幕 # 青年 VS 滝本 #	208
○六番テーブルの席	208
○（数時間経過）昼過ぎの 第一実習室	213
□第六幕 # おばちゃん四人組 VS 吉賀 #	216
○第一実習室（今は、喫茶店）	216

○ 第一実習室の扉	219
○ 実習室（今はイメケン喫茶）	222
○ おばちゃん四人組の席	224
□ 第七幕 滝本と小雪の出会い	250
○ 準備室	250
□ 第八幕 ついに吉賀と松子が	263
○ 部活棟のシャワールーム	263
（数分後）	268
○ 第一実習室	268
第五話	272
サブタイトル「ファッションモデルの人生がはじまるよ」	273
あらすじ	273
登場人物（本話のみ）	273
□ 第一幕 ファッションモデル？	274
○ （ある秋の朝）一年二組の教室	274
○ （同）実習室	279
□ 第二幕 スタジオ撮影	286

○（次の土曜日） 某スタジオの入口	286
○撮影場所	290
□第三幕 帰り道	301
○（夕方） 街中 帰り道	301
第六話	305
サブタイトル 「バイトをはじめよ」	306
あらすじ	306
登場人物（本話のみ）	306
□第一幕 バイトをするぞ	307
○（翌日の朝） 一年二組の教室 休憩時間	307
○（同） 美優の席	310
○（同） 古賀の席	311
○（翌日の朝） 一年二組の教室	313
○（昼休み） 学校の校舎の裏	315
□第二幕 バイトの面接	318
○（次の日曜日） バイト先があるとされるマンションの前	318
○エレベーターの中	320

○ マンションの一室	325
○ (隣の部屋) マッサージの練習場	327
○ 某マンションの部屋	334
□ 第三幕	340
○ (数時間後) マンションの一室 待機場	340
□ 第四幕 # おっちゃん VS 吉賀 #	342
○ シャワー室	349
○ 待機所	363
小村 吉賀がソファーに座り話をしている	363
□ 第五幕	366
# 青年 (古屋) VS 小村	366
○ 待機部屋	377
○ 小村と古屋の部屋	377
○ 受付のあるマンションの部屋	391
□ 第六幕 翌週	394
○ (翌週の土曜日) マンションの入口	394
○ (同) 受付のあった部屋の前	396

第七話

サブタイトル 「クリスマス大作戦 滝本 & 小雪 編」

本話について

あらすじ

登場人物（本話のみ）

□ 第一幕 突然の再開

○（クリスマスの数日前の夕方）道

○ 小雪の住んでいるマンション

□ 第二幕 小雪の家でクリスマス

○（同）バスルーム

第八話

サブタイトル 「クリスマス大作戦 美優 & 小村 編」

あらすじ

登場人物（本話のみ）

□ 第一幕 小村からの誘い

○（クリスマスイブ）二年二組の教室

○（夕方）美優の家のリビング

□第二幕 街中	425
○（次の日のクリスマス） 昼間の駅前	425
□第三幕 映画館	427
○映画館の座席	427
□第四幕 帰り道	433
○（夜） 街を歩く美優と小村	433
○美優の家の近くの公園	434
第九話	439
サブタイトル 「クリスマス大作戦 松子 & 吉賀 編」	440
あらすじ	440
登場人物（本話のみ）	440
□第一幕 性なるクリスマス	441
○（クリスマスの昼） 吉賀の家	441
□第二幕 先週の出来事	448
（# 回想 # 先週の昼）	448
○（先週の日曜日の昼） 吉賀の家	448
（# 回想 # 終わり）	455

□第三幕 松子も触発？	456
○（同）リビング	456
○（夕方）吉賀家のマンションの前	458
第十話	461
サブタイトル 「クリスマス大作戦 智美 & 松村 編」	462
あらすじ	462
□第一幕 神聖なるクリスマス	463
○（クリスマスの夕方）商店街 クリスマスの飾りで華やかだ	463
← # インサート # ← 女に言われているところ	469
→ # インサート # →	470
○ラブホ街	470
○ラブホのロビー	473
○ラブホの部屋	474
○ラブホのシャワールーム	478
○ラブホの部屋	478
○（夜）繁華街の道	487
おわり	492

Copyright©2026 D³S

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第一話

夢雄
美侶

Copyright@2026 D³S

サブタイトル「二期がはじまるよ」

本話について

あらすじ

二期になり久々に、松村と小島が学校で再会
久しぶりに会う小島は、松村から搾取を行います

登場人物（本話のみ）

特になし

Copyright@2024 D's

□ 第一幕 今日から二学期

○ (朝) 夢前家 玄関

▽ 美優 玄関で靴を履いている

後ろで母が見守っている

▽ 美優 靴を履き終わり後ろを振り向く

美優母が立っている

「行ってきます」

「いってらっしゃい。車に気をつけるんですよ」

「はい」

▽ 美優 玄関のドアを閉めて外に

○ 通学路

生徒達が通学路を歩いたり、自転車を通っている

(もう、お母さんたら、いつまで子供って思ってるのかしら)

(美優)

美優

母

美優

美優

▽美優 通学路を歩きながら、ハンカチで額の汗を拭く

「まだまだ、暑いわね。汗かいちゃう」

美優

「でも、そんな暑い日だから、楽しみもあるのよね。ウフフ」

○県立姫磨工業高校の校門近く

生徒達が 校門に立っている教師に挨拶をしながら教室のある建屋に向かって歩いている

▽美優 反対側からやってくる 滝本と目が合う

▽滝本 美優に気づき挨拶をする

滝本

「夢前、おはよう」

美優

「おはよ。滝本くん。元気だった」

▽滝本 滝本は素肌の上にカッターシャツを着ているので、汗でワイシャツが濡れ乳首が透けてみえている

(美優)

▽美優 滝本の透けたカッターシャツの胸を見る

(わ！ 滝本くん シャツが透けて、ビーチクがくつきり！
これだから、夏はたまらないわ)

滝本

「おう、部活の毎日だったけどな。夢前も部活がんばってたじゃないか」

美優

「ありがとう。今日から またがんばろうね」

滝本

「じゃ、教室で」

▽滝本 先に校門を抜け、教室に向かう

▽小島 通学してきて、美優の後ろ側から声をかける

小島

「よ！ 変態女」

▽美優 振り向く 小島がいる

小島も汗でカッターシャツが素肌に張り付いているが黒っぽく見える

美優

「何よ！ ローリータ小島！」

(美優)

(げ！ 小島の बीचを見てしまった。なんか黒いよ
乳毛が生えてるいるか。キモお。早く、お口直しを見なくちゃ)

▽美優 他の男子生徒を凝視する

(ナレーション)

(てな、感じで、2学期がスタートです)、

○(朝) 一年二組の教室

松子は自席に座ってスマートフォンを触っている
智美は、まだ来ていない

▽美優 教室に入って自分の席に向かう

「おはよー松子」

「おはよ。美優」

「久しぶりい」

「美優、会いたかったよお」

「なんてね、しょっちゅう ツナグ (こちらの世界で流行っている

美優

松子

美優

松子

美優

S N S の名前）してるから、感動が薄いわよね」

松子

「そう？ ツナーグじゃ、美優のカワイイ声 聞こえないじゃん」

美優

「8 オクターブの歌姫って呼んで」

松子

「美優ったら」

▽智美 教室に入ってきて、美優、松子に近づいてくる

智美

「おっはよう」

松子

「智美、おはよう」

美優

「ともみい。おはっ。相変わらず綺麗だよ」

（美優）

（フィリピンで整形したぐらい綺麗だよ）

智美

「わあ、松子、美優 おひさあ」

▽智美 自分の席に向かう

途中 松村の席を通り過ぎる

智美

▽松村 自席に座って本を読んでいる

「松村君、おはよ」

▽松村 顔をあげる

「お、おはよ」

松村

智美

「松村君 かっこよかったわよ」

▽智美 自席にカバンを置き、美優の席の方に行く

松子

「ねね、今、松村君に何か言ったの？」

智美

「なんでも無いわよ」

松子

「怪しいなあ。海で、結構二人いい線いってたじゃん」

智美

「そっ?」

松子

「またまた」

智美

(美優)

「そういう 松子だって、吉賀君と良い感じだったじゃない」

(私と小村君は、そんな風に見えないのね)

Copyright@2026 DS

□ 第二幕 小島 再び

○（放課後）部活の時間 プールサイド

▽松村 上半身はＴシャツ 下半身は競泳水着姿で、
コースロープを敷いている

▽小島 松村のところにくる

小島 「今日も一人でロープ張りか」

▽松村 小島の方を見る

松村 「一年生は、僕しかないからね」

小島 「そっか。水泳部も人気ないんだな。俺の山岳部でも一緒だよ」

松村 「そうだね。お互い 派手な部ではないよね」

▽松村 Ｔシャツを脱ぐ
胸板の厚い 筋肉質な体が現れる

小島

松村

小島

小島

松村

▽小島 松村の体を見る

「あいかわらず良い体してるよな」

「ありがとう。用がないなら、出ていってくれる」

「いいじゃないか。夏の山岳部は暇なんだよ」

▽松村 ロープを張るためにプールに入る

ロープの先を持ち、引っかける

▽小島 松村を見ている

▽松村 すべてのコースロープの張り、プールサイドに上がってくる

「おつかれ」

▽小島 松村にバスタオルを渡す

▽松村 ゴーグルを外しバスタオルを受けとる

「いつものことだから慣れたよ」

小島

「もう少し 楽しく話しようぜ」

松村

「なんで」

小島

「松村、夏休み 俺に会えなくて寂しかったんじゃないか」

松村

「そんなことないよ」

小島

「なあ、久しぶりに 抜いてやろうか」

松村

「なに、バカなことやってんの」

小島

「俺は いたって真面目だぜ。さあ 行こうぜ」

▽小島 松村の背中を押し、機械室に向かう

松村

「ちょっと、止めてよ」

小島

「いいから、いいから」

▽小島 松村の肩を抱き、プールの機械室へ連れていく

○プールの機械室

▽松村 小島 機械室に入る

小島 扉を閉める

▽小島 松村の背後から抱きつき股間を競泳水着の上から揉む

▽松村 驚く

「ちょっと、何すんの」

「いいから、いいから」

「お願いだから、止めてくれない」

「嫌だね。夏休み、全然できずに ムラムラしてたんだよね。
今日は、二ヶ月分まとめて出してやるよ」

「本当に、やめて」

「何言ってるんだ。もうここは、待ってましたとばかり、固くなってきてる

小島

松村

小島

松村

小島

松村

じゃないか」

「違っって」

「ほら、いつものように、横になれよ」

▽小島 松村を無理矢理、床のコンクリートの上に寝かせる

松村は、肘を後ろについて、上半身を少し起こした状態となる

「お願いだから止めて」

「一回だけ出したら、止めてやるよ」

▽小島 松村の太ももの上に座る

▽松村 股間を手で隠している

「今日は、いいもの持ってきたんだ。ほら、これ、何か判る？」

▽小島 ポケットから小型のバイブレーターを取り出し、スイッチを入れる

”ブ~~~~ン”

小島

「これ、気持ちいいんだぜ」

松村

「止めてよ」

小島

「うるさい、手をどけろ」

▽松村 手を退ける

▽小島は、松村の海パンの上からバイブレーターを当てる

▽松村 ビクつとする

小島

「どうだ、気持ちいいだろう」

▽松村 上を向く

小島

「気持ちいいか」

▽松村 腰が上下に動く

松村

「あ、ダメ」

Copyright©2026 D's

小島

「早く、いけよ」

松村

「あ、だめ、やばい、あ、あ、あう」

▽松村 大きく腰を上げる

▽松村 競泳水着から、シミが滲み出してくる

小島

「早すぎるんだよ。罰としてもう一回な」

松村

「もうやめて」

小島

「嫌だね。黙ってろって」

▽小島 再び、バイブレーターを松村の競泳水着の上から、固くなった陰茎の先に

充てる

松村

「ああああああ」

▽松村 腰を上下に動かし、競泳水着の中の陰茎が、上下に動いているのがわかる。

小島

「めっちゃ、感じてやがるぜ」

松村

「い、いく」

松村

「うっ」

▽松村 競泳水着から、さらさらした、液体が流れ落ちる

小島

「今度は、時間がかかったな。しかも、薄いじゃないか」

小島

「さあ、三回戦いくぜ」

松村

「もう、無理だよ。出ないよ」

小島

「俺さ、夏休みに面白いビデオを見たんだよね。限界を超えると、潮を吹くらしいぞ。見せてくれよ」

松村

「嫌だって」

小島

「いいじゃないか、もう、こんなにグチヨグチヨなんだからさ」

松村

「やめて、やめて」

○機械室のドアが開く音

▽小島 バイブレーターを後ろに隠し、機械室のドアを見る

▽吉賀 機械室に入ってくる

▽小島 機械室に入ってくる吉賀の姿を見る

小島 「なんだお前か？」

▽吉賀 二人に近づく

吉賀 「二人で何をしてるの？」

小島 「何って？松村と ちょっと遊んでただけだけど」

吉賀 「そっなの」

▽吉賀 松村の姿を見る

松村の競泳水着の股間が精液で汚れているのを見る

吉賀

「小島君、そんなことしちゃだめだよ」

小島

「そうかな。松村は すっきりして気持ち良かったって言ってるぜ」

吉賀

「松村君はそんなこと思ってないって」

小島

「なら、代わりにお前に出してもらおうかな」

吉賀

「小島君、いい加減に止めてない。僕も、松村君も嫌がってるの 判らないの」

小島

「はあ？ 何強気になってんの？ お前も、服を脱いで横になれよ」

吉賀

「ねえ、どうして、こんなことするの？」

小島

「いいから、横になれって」

▽小島 吉賀の腕を掴んだ。

▽吉賀 小島の腕をひねり、押さえつける

小島

「痛い、痛い」

小島

▽吉賀 小島を払いのける

「やったな、てめえ」

▽小島 吉賀に殴りかかる

▽吉賀 ひらりと交わし、小島の背中に、肘鉄を入れる

「いてえ」

「もう、僕たちに、こんなことしないでよね」

小島

「お前ら、いい気になるなよな」

▽小島は、機械室から出ていく

○プールの機械室

吉賀と松村の二人がいる

吉賀

「松村君、大丈夫？」

吉賀

松村

吉賀

松村

吉賀

松村

吉賀

松村

吉賀

▽吉賀 寝ている松村の横にしゃがみ顔を覗きこむ

「大丈夫だった」

「吉賀君、君って強いんだね」

「何言ってるの。松村君ほどじゃないけどね」

「え？ なんのこと？」

「僕は、クラスで一番だれが強いのかは知ってるよ」

「なんだい、急に」

「隠してもだめ、僕には分かるよ」

「意味、わかんないや」

「ま、お互い 秘密ってことかな」

▽吉賀 松村の顔を見つめる

吉賀 そのまま目線を下半身に

吉賀

吉賀

松村

吉賀

▽吉賀 松村の競泳水着をめくる

松村の固くなった陰茎が飛び出す

「ああ、こんなになっちゃって」

「まだ、出し切れてなんだね」

▽吉賀 立ち上がり、自分のシャツを脱ぎ上半身裸になる

▽吉賀 ズボンのベルトを締め、チャックを下ろし、ズボンを脱ぎ
ボクサーブリーフだけの姿になる

▽吉賀 松村の上に四つん這いになる

▽吉賀 頭をかがめ 松村の胸を舐め始める

「吉賀君」

▽吉賀 松村の顔に近づける

「シッ！」

吉賀

「感じてる」

▽吉賀 松村の固くなった陰茎を手で握る

吉賀

「びんびん」

▽吉賀 松村の手を取り、ボクサーブリーフの上に誘導

吉賀

「松村君だけ気持ちいいのは ずるいよね」

▽松村 吉賀に答えるように、吉賀の陰茎をボクサーブリーフの上から握る

▽吉賀 ボクサーブリーフの裾から、自分の陰茎をを取り出す

▽松村 吉賀の大きくなった陰茎を手で扱く

吉賀

「あ、あ、あ、気持ちいいよ」

▽吉賀 上半身を起こし、松村の太股の上に座る

▽吉賀 松村の陰茎を扱く

吉賀

松村

吉賀

吉賀

▽松村 吉賀の陰茎を扱う

「もう、だめ、い、いく」

「ぼ、ぼくも」

「あっ」

▽吉賀 体が大きく仰け反る

▽松村 大きく腹がへこむ

(数行後)

▽吉賀 吉賀の陰茎の先から、精液が松村の胸に飛ぶ

▽松村 握っていい吉賀の手に、どろっとした精液が流れる

▽吉賀 松村の胸の上に倒れる

「気持ちよかった」

Copyright@2026 D's

Copyright@2026 D³S

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第二話

夢雄

美侶

サブタイトル「体育祭が始まるよ」

本話について

あらすじ

高校生活での一大イベント？体育祭

体育祭の準備委員として、小村と美優が任命されます。

そして、準備委員のメンバーと土呂の家へ

アジトに入ってしまった小村に迫る危機とは？

登場人物（本話のみ）

□ 第一幕 体育祭準備委員会

○ある日の体育の授業 運動場にて

▽一年二組の生徒 整列している。前に土呂がいる

土呂

「もうすぐ体育祭だが、このクラスの代表を二名決めてくれないか？」

▽生徒 黙っている

土呂

「誰も 立候補しないのか？ そうだな、このクラスには女子が居るから、一名は女子にしよう」

(美優)

(ゲ！ やばっ)

土呂

「おい、女子、誰かやらないか？ そうだな。おい、夢前！ どうだ」

(美優)

(うわわわわ。名前を呼ぶな)

美優

「はい。別にいいですけど」

(美優)

(あ、はずみで答えてしまった)

土呂

「じゃ、一人は夢前に決まりだな。男子は誰がいいかな？」

○（その日の放課後）生徒会室

一年生から三年生　八クラス　四十八名が座っている

一組のデザイン科の三人の女子と、美優　女子は四人だけ

▽美優　小村　生徒会室で座っている

美優

「小村君、体育祭のクラス代表って何するのかしら？」

小村

「多分、ラインを引いたり、テントを張ったりするんじゃないのかな？」

（美優）

（私も小村君のテント張りたいわ）

▽美優　周りのメンバーを見渡す

（美優）

（それにしてもイケメンばかりだなあ。こりゃ土呂の趣味だな）

▽土呂　生徒会室に入って、教壇に立ち、話し始める

土呂

「さて、体育大会だが・・・」

土呂

土呂

▽一同 会議

「では、学年毎の代を決めてもらおう」

▽一同 会議

「では、一年生は、二組の小村と夢前で」

▽一同 拍手

Copyright@2026 D's

第二幕 土呂の家での出来事

○（数日後の放課後）生徒会室

各学年の代表だけとなり6人が座っている
前に、土呂が座っている

▽美優 小村座っている

▽美優 壁にかかった時計をチラ見

（ああ、もう十八時じゃん。体育祭のクラス代表なんてやるんじゃないかった。

土呂

「よし、今日の打ち合わせはここまでにしよう。

みんなは明日、各クラスの代表に伝えておくように」

生徒一同

「はい」

土呂

「随分遅くなったな。時間のあるやつは、俺の家で飯を食っていけ」

三年生

「ありがとうございます」

美優

▽美優 電話をする

「もしもし、お母さん、今日、生徒会の集まりで先生の家でご飯を食べることになったの。少し遅くなるけど心配しないでね」

美優母

「あら、先生の家で食事。ご迷惑じゃないかしら」

美優

「大丈夫みたいよ」

美優母

「先生の家なら安心ね。行儀良くするのよ。遅くなるようだったら、電話して迎えに行くから」

美優

「うん。そうするわ。じゃ」

▽美優 電話を切る

○（夜）土呂が住んでいるマンション

土呂の家は学校の正面に建っているマンションだ。

学校の校門を出て「分もしないうちに土呂の家の玄関についた。

生徒

「お邪魔します」

土呂

「おお、遠慮せずに入れ入れ」

▽生徒 土呂の家に入り リビングで床やソファ―に座る

▽土呂 チラシを三年男子に渡す

土呂

「何するか決めろ」

三年男子 A

「ありがとうございます」

三年男子 A

「夢前さん、決めていいよ」

夢前

「私がですか」

三年男子 B

「レディファーストだからね」

美優

「私は、何でもいいですよ」

三年男子 A

「そんなこと言わず。俺たちも決められないよ」

美優

「わかりました」

Copyright@2026 D's

美優

三年男子A

美優

三年男子A

三年男子A

土呂

▽美優 チラシをうけとり、パラパラみる

「やっぱり、ピザがいいですね」

「ピザね。どれにする」

「ピザの中身は、みなさんで決めてください」

「オッケー。じゃ、二年生で決めてもらう」

▽美優 メニューを二年生男子Aに渡す

▽二年生男子A 二年生男子Bがメニューを見る

「先生 決めたよ」

「よし」

▽土呂 ピザ屋に電話をする

▽土呂 電話を終えると、男子生徒に向かって話す

土呂

「おい、ピザが来るまでに、シャワーでも浴びて来いよ、部屋が汗臭くて、かなわん」

三年男子 A

「シャワーぐ浴びたいけどさ、着替えが無いし」

土呂

「そう言うと思ったぜ。その箱の中をみてみる」

三年男子 B

「なんですか」

▽三年男子 B ダンボールを開ける

ダンボールの中には、袋に入ったままの、ユニフォームが沢山はいつている

▽三年男子 B ユニフォームの入った袋を一つもち、土呂に見せる

三年男子 B

「どうしたんですか？」

土呂

「スポーツショップがサンプルに持ってくるんだ。好きなものを選んでいいぞ」

三年男子 A

「え、いいんですか」

土呂

「むしろ、着てみて 感想を教えてほしいからな」

三年男子 A

「なるほど。そういうことなら遠慮無く」

▽三年男子 B ダンボールの中から選り出す

▽男子 ダンボールからユニフォームの入った袋を取りだし選り始める

三年男子 B

「俺、これにしよう」

二年男子 A

「おれ、一回バスケのユニフォーム来てみたかったんだよな」

二年男子 B

「おれ、ラグビーにでもしてみるか」

二年男子 A

「ラグパンって、ノーパンで穿くんだけ」

二年男子 B

「まじか。さすがに、それは出来ないな」

▽土呂 美優も声をかける

土呂

「夢前は、どうする？女子のユニフォームもあったはずだぞ」

▽三年男子 A 女子用のピンクのユニフォームの入った袋を取り出す

三年男子 A

「夢前さん、これなんてどう？」

土呂

「お、それ、お蝶婦人みたいでいいな」

三年男子 A

「それ何ですか？」

土呂

「すまん。昭和のおっさんの憧れや」

美優

「いえ、私はいいです」

三年男子 A

「じゃ、先にシャワー浴びてくるから、その後二年生な」

二年男子 A

「わかりました」

▽三年男子 シャワーを浴びに風呂場へ行く

○リビング

美優が椅子に座っていると、風呂場から三年男子の声が聞こえる

三年男子 A

「お前の でかいな」

三年男子 B

「お前が、ちっちゃえんだよ」

三年男子 A

「やかましい。俺のは膨張率がいいからいいんだよ」

(美優)

(なに、膨張率って・・・いやだわ・・・)

(数分後)

▽三年男子 リビングに戻ってくる

それぞれユニフォームを着ている

三年男子 A

「じゃ、二年生入ってこいよ」

▽二年男子 風呂場でシャワーを浴びる

(数分後)

▽二年男子 リビングに戻ってくる

それぞれユニフォームを着ている

二年男子 A

「バスパンの下 パンツ 穿いてないからスースーするな」

二年男子 B

「マジ？ちゃんとパンツ穿いてこいよ」

二年男子 A

「パンツ汗臭いから、もう、これでええわ」

三年男子 A

「小村 入ってこいよ」

小村

「はい。入ってきます」

▽小村 シャワーを浴びに風呂場へ行く

(シャワーの湯が 流れる音がする)

(美優)

(ああ、今、小村君の全裸でシャワーを浴びてるのね)

(数分後)

▽小村 リビングに戻ってくる

バスケのユニフォームで

三年男子 A

「小村って、バスケ部だよな」

小村

「はい」

Copyright©2026 D'S

三年男子A

小村

「なんか違うの着ればいいのに」

「いや、俺って、これが一番あつてるので」

▽美優 椅子に座りながら、イケメン五人のユニフォーム姿を視姦

(美優)

(ここは イケメンパラダイスだわ)

▽土呂 キッチン付近で配達がくるのを待ちながら、男子高校生を視姦

(土呂)

(これだから、体育教師はやめられねえな)

○チャイムになる

▽土呂 玄関の方に向かう

(数秒後)

▽土呂 ピザボックスを抱え、リビングに入ってくる

土呂

「来たぞ」

三年男子 A

「やった」

三年男子 B

「腹へった」

▽土呂。ピザボックスを男子生徒の座っている場所に置く

▽男子生徒 箱を開ける

男子生徒

「うまそー」

▽三年男子 A 美優の方を見る

三年男子 A

「夢前さん どれ食べる」

美優

「えっと、一種類ずつ食べたいです」

三年男子 A

「おっけー」

▽三年男子 A ピザを一種類ずつ皿にとり、椅子に座っている美優に渡す

三年男子 A

「はい、夢前さん」

Copyright©2026 D's

美優

▽美優 皿を受けとる

「ありがとうございます」

三年男子B

▽三年男子B ジュースの入った紙コップ美優の前に置く

「飲み物も置いておくね」

美優

「ありがとうございます。みなさん、私に気を遣わないでくださいね」

▽男子生徒 ピザを食べ始める

(数分後)

▽美優 リビング後方のテーブルの椅子に座り ピザを食べている

▽男子生徒 ピザを食べ終わり くつろいでいる

三年男子A

「ああ、食った食った」

男子生徒ら

「ちそうさまです」

Copyright©2026 D's

土呂

「腹 一杯になったか」

三年男子B

「はい。ありがとうございます」

土呂

「夢前も大丈夫か」

美優

「はい。ありがとうございます。ごちそうさまでした」

土呂

「そっか。それは、よかった。体育祭が終わったら、もう一回 やろうな」

三年男子A

「ラッキー」

土呂

「時間も遅いから、少し休憩したら帰れよ」

三年男子B

「はい」

▽二年男子A テレビラックのスモークガラスの向こうにあるものに気づく

スモークガラスの扉を開けて、中のDVDを取り出す

二年男子B

「先生、これ」

▽二年男子B 洋物のアダルトDVDのパッケージを土呂に見せる

土呂

「あちゃ、^くまずいもの見られたな」

(土呂)

(B Lは、寢室に隠していて正解だったな)

(美優)

(まあ、あるあるよね)

▽三年男子A 二年男子Bからパッケージを受けとる

三年男子A

「こんなの見てるんですか」

土呂

「そりゃ、男だったら あるだろ」

三年男子B

「見ていいですか」

土呂

「さすがに、女子がいるんだから ダメだ」

三年男子A

「チエツ」

三年男子B

「ねえ、夢前さんも見てみたくない？」

美優

「いえ、私は結構です。でも、先輩方が見たいとおっしゃるなら、気にせずどうぞ」

三年男子 A

「だってさ先生。見ていいでしょ」

土呂

「うーん。困ったな」

三年男子 B

「ちょっとでいいからさ。最初の五分」

美優

「私、目を瞑ってますから どうぞ」

(美優)

(なんてね。私も洋物 見てみたいんだよね)

土呂

「そこまで言うなら、少しだけだぞ」

三年男子 A

「やったー。見ようぜ」

▽三年男子 B テレビの電源を入れ、DVDをセット

○アダルトビデオ上映会が始まる

▽男子生徒 テレビの前に釘付け

▽美優 後方のテーブル席で、見ている

三年男子A

「やべえ、俺 起ってきた」

三年男子B

「俺も」

▽三年男子B となりに座っている二年男子Aの股間を触る

三年男子B

「お前も、起ってるじゃん」

二年男子A

「そりや、起ちますよ」

(美優)

(小村君も起ってるの。教えて)

○二年男子A テレビのラック下に 別の物を見つけ取り出す

細い棒の先には、楕円形のゴム素材ボールのような物が付いてる

▽二年男子A 手持ち部分のスイッチを入れる

先のゴムボールが激しく振動する

(美優)

(バイブじゃん。土呂、あんなの使ってるの)

二年男子A

「先生 これは何」

土呂

「おい、そんな物まで出すなよ」

三年男子A

「それ、股間に当ててみな」

二年男子A

「ああ、そういうやつか」

三年男子B

「ちょっと 試してみようぜ」

▽三年男子B 二年男子Aからバイブを取る

▽三年男子B 小村の前に移動

▽小村 嫌な予感

三年男子B

「小村 気持ちいいことしてやるから、足を広げて」

小村

「いや、いいです」

三年男子B

「ちょっと、みんなで抑えてくれ」

▽三年男子A 小村の後ろから 体と腕を押さえる

小村

▽二年男子A 小村の右足を広げて押さえる

▽二年男子B 小村の左足を広げて押さえる

「止めてください」

▽美優 三年男子Aの背中が邪魔で、小村の様子が見えない

(美優)
(もう、あいつ邪魔)

三年男子B

「ようし、今すっきりさせてやるからな」

▽三年生B 小村のバスパンの上からバイブを当てる

小村

「止めてください。本当に止めてください」

▽美優 生徒らの背中越しに、小村がジタバタしているのが隙間から見える

美優

「先輩、何してるんですか」

▽三年男子A 美優の方を向く

三年男子A

「男にしか わからない事なんだけど」

三年男子B

「夢前さんも こっちきて 見てみなよ」

▽美優 椅子を達、そばによる

▽三年男子B 小村のバスパンの上から大きくなった陰茎を握り、陰茎の先に
バイブを当てている

▽小村 はにかんだ顔をしている

三年男子B

「ほら、こんなに大きくなってる」

美優

「キャッツ」

▽美優 手を当て目を隠す振り

▽美優 椅子に戻る

三年男子A

「夢前さん どうしたんの」

Copyright@2026 D's

美優

(美優)

二年男子A

三年男子A

三年男子B

小村

三年男子A

三年男子B

「そんななの見せないでください」

(見たい、見たい、見たい)

「先輩、女子にそんなの見せちゃダメですよ」

「そっか」

▽小村 だんだん気持ちよくなってきている

「お、小村 気持ちいいのか」

「違います。止めてくださいって」

「強にしてみろよ」

「オッケー」

▽三年男子B バイブの設定を強に変更

(バイブの音が大きくなる)

小村

「あ、や、やばい。、まじで、やばいです」

美優

「ちょっと、止めてあげてください。嫌がつてるじゃないですか」

(美優)

(一応、言っておかないとね)

(美優)

(クソ三年生 お前の 背中が邪魔なんだよ)

小村

「で、でそう」

(美優)

(ああ、小村君が男の人に犯されてる・・・ゾクゾクする・・・)

土呂

「おい、お前ら、いつまで いるんだ、早く帰れよ」

三年男子A

「だって、小村がいないのが悪いんですよ」

土呂

「どれ」

▽土呂 小村の側に行く

土呂

「こうして握るんだよ」

(土呂)

土呂

▽土呂 バスパンの上から小村の陰茎を握り、亀頭の部分をくつきりとさせる
(めちやくちゃ 勃起してるじゃないか)
「ほら、先にあてろ」

三年男子A

▽三年男子A バイブを小村の亀頭の部分に充てる

「ほら、早く いけよ。俺たち帰れないだろ」

小村

「あ、や、やばい、 で、出る うう」

▽小村 腰を上下に動かす

小村

「あう、で、出そう、出る」

(美優)

(ああああ、小村くんがいくの いっちゃうの)

小村

「あっ」

▽小村 バスパンの中で射精してしまう

バスパンから小村の精液が滲み出てくる

三年生B

「よし、いった」

二年男子A

「わあ臭せえ」

(土呂)

▽土呂 小村の前に座り、バスパンを捲り 中を見る

(おお、結構デカイな)

(美優)

(私も見たいよ)

土呂

「小村、もう一回、シャワー浴びて、新しいのに履き替えてこい」

▽小村 立ち上がり、風呂場へ向かう

バスパンの前は、シミが広がり、染み出た精液が光っていた

(美優)

(最高、小村君のいくときの顔は見れなかったけど、声が聞けたわなんて、慈悲深い声なのかしら。耳から離れられない
もうだめ、興奮が抑えきれないわ)

▽小村 シャワーを浴び、新しいバスパンを穿いて戻ってきた。

○（夜）帰り道

▽小村 自転車を漕いでいる

▽美優 小村 美優は小村の腰を掴み荷台に座っている

「恥ずかしいところ見られちゃったな」

「小村君のせいじゃないわよ」

「しかし、先輩らは恥ずかしさってないんだな」

「男ばっかしの学校だもんね。しょうがないんじゃない」

「俺も三年になったら、平気になるのかな？」

「ええ、小村君はだめよ。あんなのになっちゃ」

「そっだよな」

「もし、そんなことになったら、こうするわよ」

小村
美優
小村
美優
小村
美優
小村
美優

美優

▽美優 小村背中から手を回し、バスパンの上から股間を握る

「あつ。ゴメンナサイ」

▽美優 すぐに股間から手を離す

(美優)

(しまった、やってしまった)

▽小村 腰を掴んでいる美優の手を持ち、自分の股間の上に持っていく

美優

「小村君 どうしたの」

小村

「なんとなく 夢前には握っていて欲しいんだ。嫌か？」

美優

「そんなことないけど」

小村

「じゃこのままで」

美優

「うん」

▽美優 小村のバスパンの上から 陰茎を優しく握る

美優

「ナメクジみたい」

小村

「ナメクジ？」

美優

「そう。ナメクジって触ったことないけど、きっとこんな感じだと思うわ」

小村

「夢前らしい　たとえば」

美優

「小村君と始めて一緒に帰った時もそうだったわ」

小村

「そういうこと、あったよな。あの時の俺、パンツ穿いてなくて」

小村

▽小村　何かに気づいたように叫ぶ

美優

「どうしたの」

小村

「パンツ穿くの忘れてた」

美優

「え、なんで」

Copyright©2026 D's

小村

「シャワー浴びたあと、土呂の家に忘れてきてしまった」

美優

「小村君ったら しょうがないわね」

小村

「明日、先生に言うよ」

美優

「案外、土呂 小村君のパンツを頭から被ってるかも」

←# インサート #← 土呂の家

○土呂の家のリビング

▽土呂 小村の忘れたパンツを顔にかけている

土呂

「男子高生の いい臭いだあ」

→# インサート #→

○自転車に乗っている小村と、後ろに乗っている美優

小村

「まさか」

美優

「そうよね。さすがに生徒のパンツを頭に被るなんてありえないわ」

←# インサート #← 土呂の家

○土呂の家

▽土呂 小村のパンツを頭に被ってる

→# インサート #→

(数分後)

美優

「だんだん大きくなってる。男の人のつて面白いのね」

小村

「人間って不思議な生き物なんだなあ」

美優

「松子は、吉賀君のを触った時に、どう思ったのかしら」

小村

「吉賀のは でかいから、鰻つてとこじやないかな」

(美優)

(吉賀はカリが鰻そのものなんだよ)

美優

「小村君の例えも面白いわ」

(美優)

(小村君 勃起してる)

美優

「なんだが、堅くなってる気がする。不思議」

小村

「なんでなんだろうな」

○美優の家の前

小村

「着いたよ」

(美優)

(え、もう。もっと触っていたかったのに)

▽美優 自転車を降りる

美優

「送ってくれてありがとう。じゃ、また明日、学校で」

小村

「うん、また明日」

▽美優 小村が見えなくなるまで 見送り 見えなくなったので家に入る

美優

○夢前家
「ただいま」

美優
母

「お帰りなさい。ごはんば 大丈夫」

▽美優 階段を上がる

美優

「うん。先生の家で ピザをご馳走になったよ」

美優
母

「ちゃんと お礼 言ってきた」

美優

「もちろんよ」

○美優の部屋

▽美優 部屋に入り、明かりを点け、ドアをしめる

▽美優 ベッドに寝転び 手を見る

美優

「ついに、小村君のを 間接的にでも握ったわ」

Copyright@2026 D³S

□ 第三幕 体育大会

○（土曜日）姫磨工業高校の運動場
体育際の日が訪れた。

さすがに高校生にもなると、父兄の観客は殆どいない。

しかも、生徒の応援席にも、生徒のは殆どいない。

みんな、教室で駄弁っているのだ。

ただ、吹奏楽部は、運営のテントの中で、記録係を行わなくてはならない。

○ 学校の運動所 前方の本部テントの記録係の席

美優

「あああ、吹奏楽部のメリットで、ないじゃん」

部員 A

「そうだよね。吹奏楽部って、めっちゃ損」

同じ吹奏楽部の、洋子と、愚痴を言い合っていた。

一方、美優の教室では、男子生徒がだらだらと、たわいもない会話を楽しんでいた。
退屈相違過ごしている美優の元へ、松子と智美がやってきた。

▽ 松子 智美 美優のいるテントにやってくる

松子

美優

智美

美優

松子

美優

智美

「美優」

「あれ？ どうしたの？」

「教室にいてもつままないもん。」「空いてる？」

▽智美 空いている椅子を指差す

「空いてるよ」

「どう、うちのクラス」

「案外、いい線いってるんじゃないかな」

「まあ、うちのクラスって、運動部多いもんね」

○放送が鳴る

”次は、部活動対抗リレーです。”

放送が流れて、部活の代表が、運動場の中心に集まった。
部活動対抗ということなので、部活のユニフォームの参加だ。

ちなみに、吹奏楽部の美優は、クラリネットを持ったまま、走るのである。

▽美優 机に置いてあった ケースからクラリネットを取り出し組み立てはじめる
「ちよつと行ってくるね」

▽美優 クラリネットを持って、運動場の中心部へ走っていく

○運動場 中央付近

出場する選手たちが集まっている

その中に 水泳部一年生代表の松村もいた

松村は、競泳水着にゴーグルをつけているだけの姿

(数分後)

○運動場

部活動対抗リレーが開始される

▽松村 走っている

▽松村 直線からカーブにさしかかったとき、曲がりきれず転倒する

智美

松子

智美

松子

▽松村　なんとか足を引きずりながら次の走者にバトンを渡

運営テントの中の救護設備にやってくる

救護設備では、生徒会のメンバーの保健委員が、一人できりもりしている

○美優達が居る本部テント

※美優はリレーに出場しているので、松子と智美だけいる
松村が転倒し救護テントに向かうのを見ている

「大変、松村君　大丈夫かしら」

「そうね、足をひきづってるから　心配ね」

「私、ちょっと見てくる」

「そうしてあげて」

▽智美　救護テントに向かう

○救護テント

▽松村　足を引きづりながらやってくる

松村

「すいません。転倒しました」

保健委員

「大変、椅子に座って」

松村

「はい。消毒だけしてもらえれば大丈夫です」

▽松村 椅子に座る

▽智美 松村の側にやってくる

智美

「松村君大丈夫？」

松村

「高谷さん どうして」

智美

「ちょっと、美優が部活対抗に出るって言ってたから見に来てたの。そしたら、松村君が点灯するの見て様子を見にきたのよ」

松村

「そうなんだ。夢前さん、クラリネット持って走るんだもんな。すごいよね」

智美

「そんなことより、松村君 早く手当してもらわないと」

生徒 A

保健委員

智美

保健委員

智美

保健委員

智美

▽保健委員 松村に消毒液を着けようとする

▽生徒 a 転倒して救護室にやってくる

「すいません。手当お願いします」

「ちょっとそこで座ってて待っていてくれる」

▽智美 保健委員に話かける

「あのお、私 手伝いましょうか」

「え」

「クラスメートなんです」

「助かるわ。お願いできるかしら。救急セットは、そこにあるから、必要なものは勝手に取ってくれる」

「はい」

▽保健委員 智美に消毒綿を挟んだ、ピンセットを渡す

智美

松村

智美

松村

智美

松村

智美

▽智美 ピンセットを受けとる

▽保健委員 もう一人のけが人の手当にあたる

「ちょっと、我慢してね」

▽智美 松村の膝に消毒液のついた綿をポンポンとあてる

「痛」

「これぐらい 我慢しなくちゃ」

「ごめん。結構、しみるんだ」

▽智美 膝の消毒が終わり、膝に絆創膏を貼る

「これで いいわ」

「ありがとう」

「ちょっと まだよ」

松村

「どうかした」

智美

「ここも 血が出てるわ」

松村

「本当だ。足しか見てなかったよ」

智美

「ここも手当するわね」

(智美)

▽智美 消毒液の付いた脱脂綿を、松村の胸に当てていく

(何度見ても、松村君の胸って素敵)

松村

「やっぱり、しみるね」

智美

「しょうがないわよ。今日は、部活でプールに入らない方がいいんじゃない」

松村

「そうだね。プールに ばい菌が入ってもいやだから、プールには入らないようするよ」

Copyright@2026 D³S

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第三話

夢雄
美侶

サブタイトル「文化祭の準備をはじめよ」

本話について

あらずじ

体育祭と並んで高校生活のビッグイベント文化祭

文化祭の実行委員は、歴代 デザイン科が努めていたのだが、

今回に限っては、小村と吉賀もメンバーに

小村 吉賀は 工業高校の大奥とも言われる、デザイン科の女子達から
いろいろな事を要求されてしまいます。

登場人物（本話のみ）

第一幕 美魔女達の巢窟

○（夕方）一年二組の教室
ホームルームの時間

さて、体育祭が終わると、続けざまに文化祭だ。
ホームルームの時間、文化祭の出し物についての意見を出し合った。

「ねえ美優、文化祭の出し物って、何がいい？」

「なんでもいいんじゃない？」

「私は、メイド喫茶なんてどうかな？」

「メイド喫茶？」

「私たちって結構イケテルと思うんだけどな」

「その女子、意見があるなら手を上げて」

「私は、メイド喫茶がいいと思います」

智美

美優

智美

松子

智美

中野

智美

生徒A

生徒B

智美

小島

夢前

小島

生徒C

生徒D

生徒E

竹田

生徒G

「メイド喫茶」

「メイドって、誰がするんだよ」

「私達にきまつてるじゃない」

「夢前なら メイドを見て冥土に行くっていいみか」

「ほんまに冥土に行くか」

「こわー」

「まあ、茶店が妥当だよな」

「そっだよな」

「めっちゃくちゃ人を集めて、がっぽり儲けようぜ」

「こらこら、売上は、全部 寄付をする決まりなんだぞ」

「なんだ。やる気なくすな」

竹田

生徒H

智美

小村

生徒I

小村

中野

生徒J

小村

生徒K

中野

「どのクラスが、いくら寄付できたかを競うのもいいじゃないか」

「だよな。それには、何か特長を出さないと」

「だから、メイド喫茶なのよ」

「そうだ、実験室の器具を使った茶店にしない？」

「なに それ」

「たとえば、照明は、アルコールランプ。コップは、ビーカー、
コーヒーのミルクは試験管で出すんだよ」

「それいいな」

「汚くないか？」

「大丈夫だよ。ビーカーの洗浄にかけては、俺らプロじゃないか」

「いいかもしれないな」

「それから、せっかく女子もアイデアを出してくれているんだから、女子には

メイドをやってもらおうよ」

「いいわよ。でも他校からも沢山人がくるのよ。お客は 男とはかぎらないわ。女子だって楽しめるようにするべきじゃない」

「と、言うと」

「半分はメイド喫茶で、もう半分はイケメン喫茶ってどう」

「イケメン喫茶だよ」

「私が言うのもなんだけど、うちのクラスって、他のクラスに比べて、結構イケメンぞろいだと思うのよね」

「三力所に分けて、小島でホラー喫茶にするのもいいんじゃない」

「夢前 それ最高」

「お前ら、好き勝手言うなよ」

（議論中）

智美

中野

智美

生徒B

智美

美優

生徒C

小島

中野

「じゃ、うちのクラスは茶店で申請するね。それと、代表を二名決めなくちゃいけないんだけど」

生徒D

「めんどくせえな」

竹田

「そういうな。いつも デザイン科がやってくれてるんだから」

生徒E

「でも、デザイン科ってことは、おねえ様にかこまれるんじゃないかね？」

生徒F

「おお、それじゃ、俺、なってもいいぞ」

中野

「静に。まじめに考えてくれよ」

生徒G

「マジで考えてるぞ」

生徒E

「じゃ、イケメン喫茶ってことは、ここは、クラス一のイケメン吉賀でいいんじゃないか」

生徒F

「そうだな 吉賀だ、吉賀だ」

中野

「吉賀、どうだ」

吉賀

「僕でよければいいですよ」

中野

「じゃ、もう一人を誰にするかだな」

竹田

「そういえば、大倉先生から、小村と吉賀を指名されてるんだが」

生徒G

「なんで、吉賀と小村なんだよ」

竹田

「ワシは知らんけど、授業中に見てて、二人のセンスがなんとかって言ってたな」

生徒H

「大倉の年増に言われたら、しょうがないよな」

生徒I

「おれ、熟女でも大倉ならいいぜ」

←# インサート #← デザイン科の職員室

▽大倉 くしゃみをする

▽大倉の横に座っている教師

教師A

「大倉先生、風邪ですか？」

大倉

「いえ、別に」

→# インサート #→

〇一年二組の教室

小島

「俺は絶対無理だな」

←# インサート #← デザイン科の職員室

▽大倉 震える

▽大倉の横に座っている教師

教師 A

「大倉先生、震えてますよ」

大倉

「急に寒気が」

→# インサート #→

中野

「小村、どうだい」

Copyright@2026 D's

小村

「吉賀もいることだし。しょうがない。ってやるよ」

中野

「じゃ、一年生代表は、小村と、吉賀で。
じゃ、早速だけど今日の放課後からよろしく」

(ナレーション)

(工業高校には、美優が通う工業化学科以外に、

機械科、電気科、情報処理化、溶接科、そして、デザイン科がある。

その中でも、デザイン科は、女子生徒が圧倒的に多く、ほんの一握りの男子を支配していた。

デザイン科は、女子への配慮からか他の科と違う離れた場所に校舎にあり、校門も、他の科は東門から入るのに、デザイン科だけは、西門を使う。

全校生で行うイベントの時以外は、ほとんど顔を合わすことがない。
まさに、現代の大奥である。

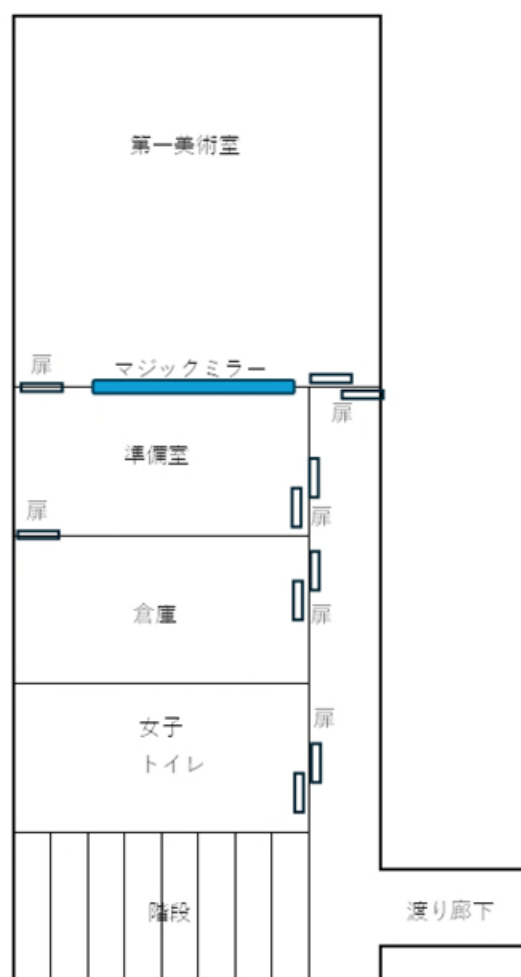
そして、毎年行われる文化祭を取りしきるのは、デザイン科の女教師、
工業高校の女帝 大倉である

←# インサート #← 大倉が廊下を歩くシーン

▽大倉 廊下をさっそうと歩いている

→ # インサート # →

■ デザイン科棟 2階の見取り図



♡ ← E R O M O D E ♡ ←
吉賀 & 小村

○（次の日の放課後）学校の廊下

▽吉賀と小村は、デザイン科に向かって歩いている

「デザイン科に行くの初めてだよな」

「僕も」

「女の子ばかりだろ。ドキドキするよ」

「そうなの。小村君は、女の子が好きなんだ」

「吉賀は、そんなこと思わないのか」

「僕は、こうして小村君と一緒にいるときの方が、ドキドキするよ」

「そうなんだ」

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

○デザイン科校舎の二階の突き当たり 第一美術室

美術室の奥には、壁（一部曇りガラス）で仕切られた準備室がある

（美術室の見取り図）



大倉

大倉

大倉

三年生A（田中）

三年生B（中島）

二年生A（森下）

二年生B（近野）

一年生A（谷口）

▽小村 吉賀 扉を開けて中に入る

大きな作業テーブルを囲んで、一年生、二年生、三年生（全員女子）が座っている

「いらつしゃい、まってたわよ」

女帝 大倉は、三十八歳独身 化粧濃すぎ。

「あなたたちの席は、そこね」

▽小村 吉賀 椅子に座る

「じゃ、自己紹介をしてくれる。三年生からね」

「三年デザイン科の田中です」

「おなじく三年デザイン科の中島です」

「二年デザイン科の森下です」

「おなじく、二年生デザイン科の近野です」

「デザイン科一年生の谷口です」

一年生B（小山）

「デザイン科一年生小山です」

小村

「工業化学科一年生小村です」

吉賀

「同じく吉賀です」

大倉

「今年は、特別に一年生は四人にしてみたの。いつもは、女子生徒六人で構成しているんだけど、男子を入れて、マンネリな文化祭を変えてみたかったのよ」

三年生A（田中）

「さすが、大倉先生」

▽他の生徒 うなずく

（大倉が、代表らに説明している）

「さあ、今日はこれくらいにしましょうか」

大倉
代表生徒ら

「はい」

大倉

「次は来週の放課後なんだけど、小村君と、吉賀君には、頼みたいことがあるの」

小村

「はい、なんでしょうか」

大倉

「ちょっと、奥の準備室から文化祭で使う小道具を取り出したりしてほしいの」

小村

「はい、大丈夫ですよ」

大倉

「ごめんなさいね。ちょっと重くて、いつも女子だけだと大変だったのよ」

（小村）

（なるほど、だから男子も代表に入れたんだ）

小村

「任せてください。な、吉賀」

吉賀

「そうだね」

大倉

「一年間も倉庫に片付けてたから、ホコリまみれなの。」

次は、汚れてもいい服装で来てくれる。体操服でいいわ」

小村

「わかりました」

（吉賀）

（小道具を取り出すなら、半袖よりも長袖、長ズボンの方がいいのに変だな）

大倉

「ありがとう。よろしくね」

○（一週間後）第一美術室

▽吉賀 小村 美術室に入る

小村

「すいません。おそくなりました」

三年生A（田中）

「ちよつと、遅いわよ」

大倉

「ちよつと、あなた達は、校舎が一緒だからいいけど、彼らは 遠いのよ。少しくらい 許してあげてよ」

三年生A（田中）

「はい」

▽吉賀 小村 席に座る

大倉

「じゃ、早速 打ち合わせを開始しましょう
田中さん すすめて」

三年生A（田中）

「じゃ、今日は、最初だから、文化祭までのスケジュールを打ち合わせするわね
その後、倉庫から必要な物を出してきて、壊れていないかを確認よ」

三年生A（田中）

壊れている物があつたら、修理をするか、作り直すかを決めないといけないわね
修理は、一年生の仕事ね」

一年生A（谷口）

「はい」

一年生B（小山）

「はい」

小村

「はい」

大倉

「修理は、デザイン科が担当するから、小村君達 男子は 倉庫から飾り物を
探して取ってきてもらえるかしら」

小村

「わかりました」

大倉

「そうそう、この前言ったけど、倉庫はホコリまみれで汚いから、汚れてもいい
服装になつてね」

小村

「すみません。すっかり忘れていました」

大倉

「あら、そうなの。でも大丈夫、こっちで用意しておいたわ」

▽大倉 机の下から、紫色のランパン（陸上部のユニフォーム）を取り出す

大倉

「これに着替えてくれる」

小村

「それですか」

大倉

「そうよ。去年、陸上部を退部した子が置いていったんだけど、まだ綺麗よ」

小村

「はい」

大倉

「制服が汚れちゃいけないでしょ。早く、これに着替えて」

▽大倉 紫のランパン二枚を、小村と吉賀の前に差し出す

▽小村 ランパンを受取り、一枚を吉賀に渡す

▽吉賀 ランパンを受取、広げてみる

インナーが切り取られていて、裾がスカスカしている

吉賀

「これ、インナーがないんですけど」

大倉

「あら、本当だわ。もう、いけない先輩ね。でも、気にしないで、見てないから」

小村

「上は、どうするんですか」

大倉

「暑くなるから いいでしょ」

三年生（田中）

「そんなの裸に決まってるじゃない」

三年生（中島）

「そうよ。男子なんだから、恥ずかしくないでしょ」

小村

「わかりました」

大倉

「わかったのなら、さっさと着替えて。時間ないんだから」

▽小村 吉賀の方を見る

小村

「あっちで、着替えようぜ」

吉賀

「うん」

▽小村 吉賀 美術室の端の方に行き、着替える

戻って来たときは、二人とも紫のランニングパンツのみを身につけた状態

小村

「終わりました」

▽大倉 小村 吉賀のランニングパンツ一枚だけの姿を見る

インナーが切り取られたランニングパンツは、陰茎をホールドすることなく
下向きに垂れ下がっているのが判る

大倉

「二人ともスタイルいいわね」

小村

「ありがとうございます」

三年生B（中島）

「ええ、とってもいいわよ。二人とも、三年生の間では評判いいのよ」

小村

「え、本当ですか」

二年生A（森下）

「二年生の女子にも人気よ」

小村

「そうなんですネ。ちょっと、うれしいです」

吉賀

「小村君、デレデレしすぎ」

三年生A（田中）

「あら、吉賀君だって、そうよ。カワイイ顔してるのに、もっこりが大きいって」

大倉

「こら、どこ見てるの」

三年生A（田中

「はい」

大倉

「じゃ、谷口さんと、小山さん、倉庫に案内してあげて」

一年生A（谷口）

「はい」

▽一年生A（谷口） 小村、吉賀の方を向く

一年生A（谷口）

「じゃ、ついてきて」

小村

「はい」

▽小村 吉賀 一年生A（谷口） 一年生A（小山）について、美術室から出る

（数分後）

▽小村 吉賀 何度も準備室から美術室へ小物を運びに往復する

小村

「これで最後だ」

吉賀

「そうみたいだね」

▽小村 吉賀 美術室に戻ってくる

▽小村 吉賀 椅子に座る

目の前にオレンジジュースが置いてある

小村

「いやー汗かいちゃった」

大倉

「ごくろうさま。大変だったでしょう」

小村

「いえ、全然平気です」

大倉

「ジュースを入れたら、飲んで休憩してて」

小村

「はい、ありがとうございます」

大倉

▽小村 吉賀 ジュースを飲む

「谷口さん、修理の方はどう」

一年生A（谷口）

「はい、どこも壊れてません」

Copyright©2020 D's

大倉

「よかった。じゃ、そのまま使えそうね」

三年生A（田中）

「スケジュールの方もオッケーです」

大倉

「ありがとう。順調にすすんでいるようね。こっちも順調のようだし」

▽小村 体を揺らして、今にも眠りそうな顔をしている

吉賀

「小村君 どうしたの」

小村

「ちょっと 疲れたのかな」

大倉

「あら、大丈夫？ ちょっと重たい物を運びすぎて疲れたのかしら
吉賀君の方は、大丈夫」

吉賀

「はい、だい、じょう」

▽小村 机に頭を着けて寝てしまう

▽吉賀 同じく、机に頭を着けてねてしまう

大倉

「全て、順調ね。さあ、みんな 手伝って。吉賀君は、そっちの机に寝かせましょう」

（数分後）

▽大倉 机の上で寝ている 小村を揺さぶる

「そろそろ 起きて」

大倉

▽小村 目を覚ます

机の上で、大の字に寝かされて、両手、両足が 机の脚に縛られている

▽三年生A（田中） 寝ている吉賀の顔に、自分の顔を近づける

三年生A

「吉賀君 そろそろ起きようか」

▽吉賀 目を覚ます

小村と少し離れた机の上で、大の字に寝かされて、両手、両足が机の脚に縛られている

▽小村 手足の自由が利かないので、顔を左右上下に向け、手足の状態を確認

小村

「え、何なんですか」

大倉

「うちの文化祭の恒例の儀式なの。あなたも楽しむといいわ」

小村

「どういうことですか」

大倉

「毎年、一年生男子を使って、芸術を楽しむのよ。でも、今年のデザイン科の男子はは不作なのよね。で、工業化学科にあなた達が居たわけ」

小村

「意味がわからないんですけど」

大倉

「芸術を楽しむのは私達。あなたたちは、道具にすぎないわ」

小村

「何をするんですか。ほどいてください」

大倉

「だめよ」

三年生B（中島）

▽三年生B（中島） ランニングパンツの上から吉賀の股間を揉んでいる

三年生A（田中）

「小村君、おしゃべりはダメよ。ほら、吉賀君は、温和しくしてくれてるんだから」

「ちょっと、中島 フライングよ」

小村

▽三年生A（田中） ランニングパンツの上から小村の股間を揉み出す

「や、やめてください」

三年生B（中島）

「どう、吉賀君 気持ちいい」

三年生B（中島）

「もうこんなになって」

▽吉賀 インナーの付いていないランニングパンツでは、固くなった陰茎が

垂直に天井を向いてそそり立っている

▽三年生B（中島） ランニングパンツの上から、陰茎を握り、扱いている

吉賀

「あ、あっ」

三年生B（中島）

「もっと 声を出していいのよ」

二年生B（近野）

「先輩、ずるいです。私も 吉賀君の揉んでみたい」

三年生B（中島）

「じゃ、どうぞ」

二年生B（近野）

▽二年生B（近野） ランニングパンツの上から股間を揉みはじめる
「なんて、固くて太いの」

▽二年生B（近野） 吉賀のランニングパンツの上から固くなった陰茎を
ギュッと握る

吉賀

「あ、だ、だめ」

▽三年生A（田中） ランニングパンツの上から小村の陰茎を扱きだす

三年生A（田中）

「こっちも、大きくなってるわよ」

小村

「やめてください」

三年生A（田中）

「えー こんなに大きくなってるのに。出して小さくした方が方がいいわよ」

小村

「まじで、止めてください」

▽三年生A（田中） 小村の陰茎を激しく扱う

▽小村 扱かれる手のリズムに合わせて腰をふる

小村

「あっ あっ あっ あっ」

三年生 A (田中)

「口で言っても、ここは正直ね」

二年生 A (森下)

「そろそろ、私にもやらせてください」

三年生 A (田中)

「もうちょっと、ちょっとまってね」

▽小村 紫のランニングパンツに、少しシミが出来た。

小村の我慢汁を出してしまったようだ

三年生 A (田中)

「小村君も気持ちよさそうね。じゃ、変わりましょう」

二年生 A (森下)

「ありがとうございます」

▽二年生 A (森下) ランニングパンツの上から小村の陰茎を掴む

二年生 A (森下)

「太いわ」

三年生 A (田中)

「でしょ」

小村

二年生 A (森下)

▽二年生 A (森下) 小村の陰茎を扱きだす
「あ、あう、や、やめて、出ちゃいます」
「え、もう 出るの はやーい」

▽二年生 A (森下) 扱き続ける

小村

「あ、やばい、まじで、あ うっ」

▽小村 ランニングパンツを穿いたまま、射精

ランニングパンツの表面から、粘液が滲み出てくる

二年生 A (森下)

「もう、いっちゃたの」

▽三年生 A (田中) 手で、小村のランニングパンツのウェストバンドを掴み
持ち上げる

三年生 A (田中)

「ほら、こんなに出してるわよ」

▽一年生 A (谷口) のぞき込む

一年生 A（谷口）

「先輩、すごいです。初めてみました」

三年生 A（田中）

「男子って 面白いでしょ」

一年生 A（谷口）

「はい」

○吉賀の周り

▽三年生 B（中島） ランニングパンツの上から吉賀の陰茎を扱っている

▽吉賀 目を瞑り、黙って扱かれているのを耐えている

三年生 B（中島）

「あっちは、終わったようね。こっちもペースを上げるとするわ」

二年生 B（近野）

「そろそろ、私もいいですか」

三年生 B（中島）

「あら、ごめんなさい。代わるわね」

二年生 B（近野）

「吉賀君、私が気持ち良くいかせてあげるわね」

▽二年生 B（近野） 吉賀のランニングパンツの裾から手を入れ、直に陰茎を握る

三年生B（中島）

「あら、大胆ね」

二年生B（近野）

「ふふふ。早くいってもらいたいもの。なんて太くて熱いのかしら」

▽二年生B（近野）

吉賀の陰茎を扱きだす

吉賀のランニングパンツの中が大きく揺れている

吉賀

「あつ。いく、いく」

▽二年生B（近野）

吉賀のランニングパンツから素早く手を取りだし、

ランニングパンツの上から陰茎を握りしめる

▽吉賀

握られたランニングパンツの先から、粘液がドロツと出て、

二年生B（近野）の手の上を流れる

▽二年生B（近野）

ゆっくりと陰茎を搾り出すように上下に動かす

上に動かす度に、吉賀のランニングパンツの先から粘液が流れ出る

三年生B（中島）

「こっちも、完了よ」

▽大倉 ランニングパンツの上から小村の陰茎を握りゆっくりと扱く

グチュグチュと音を立てる

大倉

「ああ、いい音だわ。こっちは どうかしら」

▽大倉 吉賀の方に行き、吉賀のランニングパンツの裾から手を入れて
陰茎を握りゆっくりと扱く

大倉

「このネバネバ感も素敵ね」

▽大倉 吉賀のランニングパンツから手を取り出し、自分の指についた、
吉賀の精液を臭う

大倉

「臭いも素敵」

▽大倉 小村の方に行く

▽大倉 小村の胸に、手に着いた吉賀の精液を塗り出す

大倉

「ほら、吉賀君が出したものよ。素敵でしょ」

小村

「もう、やめてください」

大倉

「そうね。今日は、これくらいにしましょう」

♡ → E R O M O D E ♡ →

○（打ち合わせが終わって）デザイン科棟から、工業化学科棟に続く廊下
小村と、吉賀が制服を着て歩いている

小村

「吉賀、大丈夫か」

吉賀

「うん。なんとか」

小村

「どうする」

吉賀

「どうだって言われても」

Copyright@2026 D's

□第二幕 2回目打ち合わせ

○（翌週の放課後）デザイン科棟へ向かう廊下

▽吉賀 小村が、歩いて美術室へ向かっている

「大丈夫かな」

「何が」

「ほら、また、射精さされそうだな」

「さすがに、もう 無いんじゃないかな」

「そうだといいいけど」

「そうになったら、そうなったで しょうがないよ」

「吉賀は、強いよな」

○美術室

小村 吉賀 小村 吉賀 小村 吉賀 小村

▽吉賀 小村 席に座っている

▽大倉 美術室に入ってくる

メンバーが揃っているのを見る

大倉

「じゃ、始めましょうか」

三年生A（田中）

「では、今日は体育館で行われる出し物のスケジュールの確認からしましょう」

一同

「はい」

会議は、滞りなく進んでいく

（一時間経過）

三年生A（田中）

「じゃ、今日の会議は、これで終わり。先生、何かありますか」

大倉

「そうね。文化祭とは関係ないんだけど、デザイン科で使う新しい装置が入ったの
ちよっと試してもらえるかしら。時間がないのだったらいいのよ」

三年生B（中島）

「私、大丈夫です」

二年生 A（森下）

「私も 大丈夫です」

二年生 B（近野）

「私も」

一年生 A（谷口）

「私も」

大倉

「ごめんなさい。この装置は、二年生からしか使わないから、
一年生は帰ってちょうだい」

一年生 B（谷口）

「わかりました」

▽一年生 A（谷口） 一年生 B（小山） 美術室から出て行くとする

▽小村 吉賀 立ち上がり

小村

「それでは、僕らも」

大倉

「あなたたちは、居てほしいの。デザイン科がどんなことしてるか
知ってほしいのよ。無理には引き留めないけどね」

小村

「わかりました。僕も、少し 興味あったんです」

大倉

「そう、興味あるの。先生もだわ」

▽一年生A（谷口） 一年生B（小山） 美術室から出て行ってしまった

▽大倉 教卓の後ろに行き、装置を取ってくる

小さな台座の上に、丸いテーブルが載っている
その横に、モーターなどの機械がついていた

三年生B（中島）

「先生 これは」

大倉

「最新型の ろくろ よ」

三年生B（中島）

「ろくろなんですか」

大倉

「ええ、そうよ。手元のスイッチで、早さを自在に変えられるの」

三年生A（田中）

「でも、それだけでは、今までも大してかわらないような気がするのですが」

大倉

「ここを見て」

▽大倉 さらに、箱からパーツを取り出す円柱の部品だ

大倉

「ここに乗せて、こっやって固定するのよ」

三年生A（田中）

「先生、これって まさか」

大倉

「さすが、田中さん。気が付くのが早いわ。じゃ、早速試してみましょう」

▽大倉 小村に近づいてくる

大倉

「さっき、興味あるって言ったわよね」

小村

「はい」

大倉

「じゃ、服を抜いて、机の上に寝てくれる」

小村

「え、なんで」

大倉

「あら、じゃ、またオレンジジュースを飲んでもらおうかしら」

小村

「どうして、そんなことするんですか」

大倉

「私たち 暇なのよ」

小村

「それだけで」

大倉

「そうよ。あなたたち 男は、私たちを 喜ばすために生まれてきたの。もっとも、あなたたち、二人が イケメンだからってのもあるわ イケメンに生まれたからには、諦めなさい」

三年生B（中島）

「そうよ。不細工だったら、こんなことしてもらえないわよ。ありがたく、私たちの洗礼をうけなさい」

吉賀

「小村君、もう、この人達に 何を言っても無駄だよ。僕は、もういいよ。この人たちの言うこときくよ」

大倉

「さすが、吉賀君。特別に、あなたからしてあげるわ」

▽吉賀 学生服を脱ぎ出す

大倉

「私たち、取りあえずレディだから、レディの前でさらけ出すのは止めてくれる 田中、いつものパンツを持ってきて」

▽三年生A（田中） 引き出しを開け、インナーが切り取られたランパンを 取り出し、二人に渡す

三年生 A（田中）

「これに 履き替えてくれる」

▽小村 吉賀 美術室の端にいき、制服を脱ぎ、シャツも脱ぎ、
インナーが切り取られて紫のランパンだけの姿になる

▽小村 吉賀 大倉と女子の前に戻ってくる

小村

「これでいいですか」

三年生 A（田中）

「うん。素敵だわ」

大倉

「じゃ、今から、陶芸大会よ。まずは、吉賀君からね」

三年生 A（田中）

「じゃ、机の上に寝てくれるかしら」

▽吉賀 だまって机の上に上がろうとする

小村

「吉賀、待って」

吉賀

「どうしたの」

小村

「吉賀、俺がする」

大倉

「あら、どうしたかしら」

小村

「俺に してもらえますか」

大倉

「どっちが先でもいいわよ」

小村

「吉賀の分も、俺でやってください」

吉賀

「何言ってるの」

大倉

「素敵な友情ね。いいわよ。あなたの友情に免じて、今日は あなただけにするわ」

小村

「よかったな。吉賀」

吉賀

「小村君」

大倉

「でも、いいこと。途中で逃げたり、邪魔をしたらだめよ。その時は、吉賀君にも実験に協力してもらうわ」

小村

「わかりました。いいよな、吉賀」

吉賀

「僕は、構わないけど。小村君、大丈夫」

小村

「大丈夫だよ。命を取られる訳じゃないんだから。ちょっと気持ち良くなるだけだよ」

▽小村 机の上に寝転ぶ

大倉

「装置を付けるには、堅さが足りないわね」

▽大倉 小村のランパンの裾から手を入れ、陰茎を握ると 扱きだした

さっきの約束があるので、小村は抵抗しない

小村

「あつ、あつ」

大倉

「さすが、若いわね。反応も早いわ」

吉賀

「あ、あつ、や、やばい」

大倉

「ちょっと まだよ。しょうがないわね。
ちよつと、たこ糸持ってきて」

▽三年生 A（田中） 引き出しを開けて、たこ糸とハサミを取り出し

大谷の側に置く

大倉

「あら、ハサミも、気が利くわね」

大倉

▽大倉 ランパンの裾から手を出し、ランパンの上から小村の陰茎を扱いている
「これで、十分ね」

大倉

▽大倉 小村の陰茎の根元部分を、ランパンの上からたこ糸で縛った

「これでいいわ」

▽大倉 装置を小村の股間の上に置き、穴から小村のランパンで包まれた
そり立った陰茎を通す。

▽大倉 円柱系の器具を、陰茎に被せた

の先から、小村の穿いている紫のランパンの先が見えている

三年生A（田中）

「包茎だけど、キノコが大きいのね」

大倉

「じゃ、いくわよ」

小村

小村

大倉

大倉

▽大倉 スイッチを入れる

円柱が回転し始める

「あ、あ、や、や、やばい」

「うっ」

▽小村 体が大きく仰け反る

小村の穿いている紫のランパンの先が、僅かにシミができた

▽小村 大きく深呼吸をしている

「今度は、こっちのアタッチメントを試しましょう」

▽大倉 円柱形の器具を、小村の陰茎から取り出す

小村の陰茎は根元をたこ糸で結ばれているので、ランパンの中にソーセージが入ったかのようにになっている

「今度のは、さらに感じるわよ」

▽大倉 次の器具を、小村のランパンの上から装着した

柔らかい素材でできた、円柱形の器具だ

透明な素材で、中が良く見える

▽大倉 スイッチを入れる

小村

「あああ、あああ」

▽大倉 器具の上に両手を添える

大倉

「ちから加減は、どう。これだと、私も あなたの物を感じられるのよ」

大倉

「ああ、興奮しているのは、手の平に伝わるわ」

小村

「あ、で、でる」

▽小村 両足をヒーンと延ばす

大倉

「もう、いっちゃったのかしら」

三年生A (田中)

「早すぎるよ」

三年生B (中島)

「ちょっと、罰として、もう一回よ」

大倉

「そうね。最後は、全員参加よ」

▽大倉 器具を外すと、ランパン越しに小村の陰茎を握り、扱きだす

小村

「あ、あう、もう、もう、出ないですよ」

大倉

「二年生、交互に扱いて」

▽大倉 手を離し、代わりに二年生に扱くように指示をする

二年生A（森下）

「はい」

▽二年生A（森下） 小村の陰茎をランパン越しに扱きだす

▽三年生A（田中） 小村の左乳首の周りを舐めながら、もう片方の手で

右乳首を刺激する

▽三年生B（中島） 小村のヘソの周りを舌尖で舐め始め、ランパンの裾から

睾丸を優しく揉む

小村

「あ、あ、もう、もうだめ。で、でる」

小村

「うーーーーっ」

大倉

小村

大倉

小村

大倉

小村

大倉

▽小村 体が大きく仰け反る

「満足したかしら」

「い、痛いです。紐をほどいてください」

「お願いって言わなきゃ」

「お願いします。紐をほどいてください」

「そうそう。私、素直な子が好きなの」

▽大倉 小村の陰茎の根元を縛っている たこ糸の端を引っ張るとスルスルと
ほどけた。と同時に、紫のランパンから みるみる粘液が染み出し、
股間の周りは、ビチヨビチヨな状態になり、裾からも ふともも伝いに
精液が流れてきた

「もう、いいですか」

「まだ、最後に一つあるのよ」

小村

▽大倉 小村のランパンの裾から手を入れ、陰茎を直に握り、激しく扱きだす
「い、いたい。や、止めて」

▽大倉 激しく扱いている

小村のランパンが激しく動いている

小村

「あ、マジで、マジで、漏れちゃう」

小村

「あ」

▽小村 潮（小便を漏らす）を吹いてしまい、紫のランパンが、みるみる濡れて、

裾からも小便が垂れ、机を伝い床に流れる

三年生A（田中）

「わ、潮拭いたわ」

三年生B（中島）

「すごい、こんなの初めてみた」

大倉

「ふふふ。気持ちよかったですよ」

▽小村 無言

大倉

「さあ、片付けて帰りましょう。あなた達は、自分の出した物を、ちゃんと拭いておいてね」

▽二年生A（森下） 二年生B（近野） 片付け始める

▽大倉 美術室を出ようとする際、中に向かって

大倉

「次は、最後の会議だから、お二人さん、楽しみにしておいてね」

▽大倉 美術室から出ていった。

□第三幕 打ち合わせ最終日

○（翌週の放課後）美術室入口

▽吉賀 小村 美術準備室の扉をあける

「いらっしやい」

「待ってたわよ」

三年生A（田中）
大倉

「さあ、入って入って」

▽吉賀 小村 が中に入ると、みんなとは離れた場所の机に 知らない
男子生徒（デザイン科 三年生川崎）が座っていた

▽小村 知らない男子生徒が気になって、チラチラ見してしまう

大倉

「小村君、今は気にしなくていいから」

（しばらく 打ち合わせを行っている）

大倉

「さあ、今日の打ち合わせは これくらいにしましょう」

小村

▽小村 小声で、隣の吉賀に
「今日は、何もなさそうだ」

吉賀

「この前の帰りに、何かしそうな前触れがあったんだけどね」

▽大倉 小村と吉賀のコソコソ話が聞こえる

大倉

「小村君、吉賀君、どうかした」

小村

「いえ、別に」

大倉

「これで文化祭の打ち合わせも終わりね」

▽小村 安堵した顔

大倉

「そうそう、私たちは終わりだけど、なにか、用がある人がいるのよ」

▽大倉 離れた席にいる、男子生徒に声をかける

大倉

「川崎君、ちょっとこっちへ来て」

大倉

大倉

川崎

大倉

小村

吉賀

大倉

▽川崎 立ち上がり、みんなの居る場所にやってくる

身長は、一八〇センチ イケメンで小村よりも背が高いスリムな高校生

「もっと 近くへ」

▽川崎 大倉のそばにやってくる

「三年生の川崎君。かっこいいでしょ。二人に挨拶をして」

「デザイン科、三年生の、川崎です」

「ほら、あなたたちも」

▽大倉 小村と吉賀に挨拶を促す

「工業化学科 一年生の小村です」

「おなじく、吉賀です」

「私たちは、用がないんだけど、この川崎君が、どうしても二人に頼みたいことがあるらしいわ」

大倉

▽川崎 うつむいている

「ねえ、川崎君、二人に、お願いがあるのよね」

▽川崎 黙っている

三年生A（田中）

「早く、言いなさいよ」

吉賀

「川崎さん、お願いって何ですか」

川崎

「せ、セック、、、ス」

三年生B（中島）

「聞こえないわね」

川崎

「ぼ、僕とセックスしてください」

三年生A（田中）

「いやー、男同士で、セックスですって」

三年生B（中島）

「変態よ。変態」

吉賀

「川崎さん、どうして」

Copyright@2026 D's

川崎

「理由は・・・」

大倉

「あら、川崎君 約束が違うわよ」

川崎

▽川崎 大倉の顔を見て、すぐに吉賀の顔を見る

「なんでもない。君と したいだけなんだ」

大倉

「あら、大変なことになったわね。どうする お二人さん」

小村

「セックスって、俺、わからないですよ」

吉賀

「悪いけど、僕も」

川崎

▽川崎 土下座をする

「お願いだ。頼むから セックスをしてくれ。でないと、でないと」

吉賀

▽吉賀 川崎の前にしゃがむ

「何か、理由があるんだね」

吉賀

▽川崎 土下座の姿勢で、うなづく

「わかった」

▽吉賀 大倉の方を見る

吉賀

「僕が、します。なので、小村君は いいでしょ」

大倉

「なんのことかしら。したいって言ってるのは、川崎君の方よでも、私なら、吉賀君だけでもいいと思うわ」

三年生 A (田中)

「そうね。その代わり、二人分の役を吉賀君がしてくれるなら、川崎君も満足するんじゃないかしら」

吉賀

「わかりました。川崎君、僕で よかったらセックスするよ」

▽川崎 顔をあげて、吉賀の顔を見る

川崎

「ありがとう」

▽川崎 大倉の顔を見る

川崎

「約束ですよ」

大倉

「なんのことが判らないけど、了解したわ」

吉賀

「さあ立って下さい」

▽川崎 立ち上がる

吉賀

「どこで すればいいんですか」

大倉

「そうね。てっ取り早く、ここでいいじゃないかしら」

吉賀

「わかりました。でも、見られていたら、できません。出ていってもえませんか」

大倉

「いいわよ。みんな 終わるまで、隣の準備室にいきましょう」

▽大倉を含む 女子四人が 隣の準備室の方に入っていく

▽大倉 小村が まだ残っていることに気づく

大倉

小村

吉賀

大倉

「小村君も邪魔しちゃ悪いから、こつちで、待ってましょ」

「吉賀、ごめん。俺、見れないや」

「うん。わかってるって。終わるまで待ってて」

▽小村 準備室に入る

▽準備室の扉が閉まる

○準備室

大倉と、女子生徒六人、小村がいる

「さあ、うまくいったわね。さあ板をどけて」

▽一年生A（谷口） 年生B（小山）が、壁に立てかけてある ベニヤ板をどける

美術室が丸見えになる

ミラーがラスになっており、美術室からは見えないが、準備室からは美術室の中が良く見えるようになってる

▽小村 準備室から美術室が丸見えなことに驚く

小村

大倉

小村

大倉

小村

大倉

▽小村 マジックミラーの前に立ち

「え、これは、どういうことですか」

「だって、待ってるだけって退屈でしょ」

「だからって」

▽大倉、三年生A（田中）、三年生B（中島）小村に近づく

「小村君には、退屈させないわよ」

▽大倉 小村の股間を学生ズボンの上から揉み出す

「や、やめてください」

▽三年生A（田中）三年生B（中島）小村の両脇に立ち、腕をがっちりと掴む

「静に、あの二人を見てなさい」

○美術室

吉賀、川崎がいる

▽二人は、まだ立ったまま

「俺、セックスってしたことなくて」

「したこと無いのに 何で？」

▽川崎 黙っている

「なんとなく、判っているよ。脅されているんだね」

▽川崎 瞼を閉じ、吉賀に合図をする

「わかった。じゃ、僕が、リードするね」

「吉賀君、君は」

「いいから、任せて。変なことほしないよ」

▽吉賀 川崎に近づき、背伸びをする
顔を近づけ、川崎にキスをする

二年生A（森下）

三年生A（田中）

○（同）準備室

「わ、やったわ」

「シッ。静に」

○（同）美術室

▽吉賀 キスを止め、川崎の体を倒し、机に上半身を寝かせる

▽吉賀 川崎のズボンのベルトを緩め、カットーシャツのボタンを外していく

▽吉賀 カッターシャツを脱がす

川崎 Tシャツ姿になる

▽吉賀 川崎のTシャツを脱がす

川崎は、上半身裸。長身でスリム、腹筋もあり いい身体をしている

吉賀

「かっこいいですね」

川崎

「そんなことないよ」

Copyright©2026 D's

吉賀

「僕も、犯しがいがあるよ」

川崎

「え」

吉賀

「いいから、気にしない」

▽吉賀 川崎の胸の辺りを舐め廻し、時々、乳首の先を舌でつつく

▽吉賀 川崎の学生ズボンの中に手を入れ、パンツの上から川崎の陰茎を揉む

▽川崎 ズボンの中の物が大きくなってくる

吉賀

「反応がいいね。机の上に寝ようか」

▽川崎 うなずき、足を机の上に上げ、仰向けで寝る

▽吉賀 川崎のズボンを脱がす

川崎 黒のボクサーブリーフで、パンパンに膨れている

▽吉賀 川崎のボクサーパンツの上から、大きくなったものを優しく手で包み込む

吉賀

「大きいね」

川崎

▽吉賀 自身のカッターシャツ、Ｔシャツを脱ぎ、学生ズボンを脱ぐ

吉賀は、ランパンだけの姿になる

▽吉賀 机の上にあがり、川崎の両足を広げ、その間に座る

▽吉賀 川崎の上に体を倒し、再び、川崎の乳首を舐め始める

「あ、あう」

▽川崎 声が出る

▽吉賀 舐める場所を下に移動させていく
腹からヘソの周りを舐める

▽吉賀 ボクサーブリーフの上から、川崎の陰茎を舌でなぞる

吉賀

「窮屈でしょ」

▽吉賀 川崎のボクサーブリーフのずらす
川崎の陰茎が飛び出してくる

女子達

○（同）準備室

「キャー」

▽女子 川崎の大きくなった陰茎がさらけ出されて、悲鳴を上げる

大倉

「シッ」

▽大倉、女子達 吉賀、川崎の行為を黙ってみている

▽小村 初めてみる男子同士のセックスに興奮し 勃起している

○（同）美術室

▽吉賀 川崎の陰茎を口に含み、上下に扱く

「汚いよ」

▽吉賀 一旦、口を離す

吉賀

「大丈夫」

吉賀

「気持ちいい？」

川崎

「うん」

吉賀

「いきそうになったら、言ってね」

▽吉賀 再び、川崎の陰茎を口に含み扱く

○（同）準備室

同じ光景を見ているので飽きてきた女子達

▽三年生A（田中） マイクのスイッチを入れる

三年生A（田中）

「ちょっと、早くすませてね。私たち、終わるの待ってるのよ」

三年生B（中島）

「そうよ、いつまで、ダラダラしてるの？ 早く、入れないさいよ」

○（同）美術室

吉賀

「やっぱり」

川崎

「やっぱりって」

吉賀

川崎

吉賀

川崎

吉賀

川崎

吉賀

川崎

吉賀

「あのスリガラス、マジックミラーなんだよ」

「え、見られてたってこと」

「そっらしい」

▽川崎 上半身を起こそうとする

▽吉賀 もう、見られてるんだから、一緒だよ。楽しもうよ」

「君って」

「じゃ、ご希望通り、早く終わらせますか」

「終わらせるって何を」

「セックス」

「え。本気なの」

「当たり前だよ」

川崎

「でも」

吉賀

「脅されているんでしょ」

川崎

「そうだけど」

吉賀

「僕じゃ嫌？」

川崎

「嫌じゆないけど」

吉賀

「僕も、川崎さんなら、いいかなって」

川崎

「わかった。早く済ませよう」

吉賀

「じゃ、入れたことある？」

川崎

「え？ 入れるって何？」

吉賀

「そうだよ。僕がタチするね」

川崎

「タチって何」

Copyright©2026 D's

吉賀

「川崎君は、そのまま寝てくれる。あとは、僕に任せて」

▽吉賀 川崎の穿いているボクサーブリーフ脱がし床に落とす

▽吉賀 川崎の肛門のに人差し指の先を入れる

川崎

「何、何するの」

吉賀

「黙ってて。早く 終わらそうよ」

▽吉賀 川崎の肛門に、ゆっくりと人差し指を入れていく

川崎

「あつ。あつ。」

吉賀

「気持ち良かったら、声を出していいからね」

▽吉賀 川崎の肛門に入れた指を 中で動かす

川崎

「あつ。あつ。」

吉賀

「そろそろいいかな」

川崎

▽吉賀 ランパンの裾から、自身の陰茎を取り出す

▽吉賀 陰茎をゆっくりと川崎の肛門の中に入れていく

「あ、あ、あ、あ」

○（同）準備室

「キャー あの子達、すこーい」

「信じられない」

「美少年同士のセックスって、美しいわ」

「よ、よしが」

小村

▽大倉 小村の声に気づく

「ごめんなさい。あっただけ楽しんでるのずるいわね」

大倉

▽大倉 小村のズボンのベルトを緩める

大倉

小村

大倉

川崎

吉賀

吉賀

小村のズボンがスポンと下に下がる
小村の下半身は、トランクスで、立派なテントが張ってる

▽大倉 小村の股間をギュッとにぎり揉み始める

「こっちも、立派だわ」

▽大倉 小村のトランクスの中に手を入れ、小村の陰茎を握り、ゆっくりと抜く

「せ、先生」

「大丈夫、先生に任せて」

○（同）美術室

▽吉賀 腰を激しく動かしている

「あ、あ、あ、あ」

「うっ、うっ、うっ」

「い、いきそう」

川崎

「俺、いきそう」

▽吉賀 川崎の陰茎を扱きだす

吉賀

「いっしょにいこう」

川崎

「あ、あ、あ、あ」

吉賀

「うっ、うっ、うっ」

▽川崎 陰茎の先から、精液が飛び出す

▽吉賀 腰の動きがゆっくりになる

▽吉賀 川崎の上に倒れ顔を川崎の胸に付ける

○（同）準備室

小村

「で、出る」

大倉

「いいわよ。あなたもいきなさい」

Copyright©2026 D's

小村

「うっ」

○（同）美術室

▽川崎 自分の胸の上に寝ている、吉賀の頭を撫でる

「ごめん」

吉賀

「僕こそ、ごめんなさい」

川崎

「ううん。俺は、君に入れてもらえて、よかったと思ってる」

吉賀

「僕も。川崎さんのような、カッコイイ人と出来てよかった」

川崎

「起きよっか」

吉賀

「そうですね」

▽吉賀 机から下り、穿いているランパンを整える

▽吉賀 床に落ちている川崎のボクサーブリーフを拾い、川崎に渡す

▽川崎 吉賀からボクサーブリーフを受け取り、机の上で穿く

▽川崎 机から下りる

○準備室へ繋がるドアが開く

▽大倉 美術室へ入ってくる

「二人とも、お疲れ様」

▽女子生徒 ニヤニヤ笑いながら 美術室へ入ってくる

三年生A（田中）

「二人とも 満足できたかしら」

▽小村 美術室へ入ってくる

小村

「吉賀 大丈夫か」

吉賀

「うん。大丈夫」

大倉

「小村君も よかったでしょ」

Copyright © 2026 DS

小村

「いえ、俺は」

三年生B（中島）

「あんなに濃いの出しておいて」

大倉

「明日は、いよいよ、文化祭ね」
文化祭が終わったら、お待ちかねの打ち上げよ」

三年生A（田中）

「やったー」

大倉

「とうぜん。全員参加よ」

二年生A（森下）

「よかったわね。吉賀君、小村君」

大倉

「川崎君も、特別参加よ」

川崎

「お、俺も ですか」

大倉

「当然よ。それで、最後にしてあげる」

川崎

「本当に、本当に、ですネ」

Copyright@2026 D's

大倉

「そうよ。美大の推薦チケットゲットね」

三年生A（田中）

「先生ずるーい。私だって推薦で行きたかったのに」

三年生B（中島）

「イメケンに甘いんだから」

大倉

「そんなつもりないわよ」

三年生A（田中）

「ところで、打ち上げて どこでするんですか」

大倉

「そうね。じゃ、先生が奮発して、みんなを、温泉につれていってあげる」

二年生B（近野）

「やったあ」

三年生A（田中）

「先生。いいんですか」

大倉

「いいわよ。だって、イケメン三人と一緒になんですもの」

三年生B（中島）

「当然、泊まりですよね」

大倉

「もちろん」

三年生B（中島）

「楽しみだわ」

▽大倉 小村、吉賀、川崎の方を見る

大倉

「あなたたちも、楽しみでしょ」

▽川崎 小村 不安な顔をする

▽吉賀 睨みつけている

○（翌日）文化祭の日

（ナレーション）

（文化祭当日、大倉の姿はなかった）

生徒A

「ねね、知ってる？ 美術の大倉が失踪したって」

生徒B

「職員室で噂がもちきりよ」

生徒C

「なんか、ホストクラブで、男狂いになってたって」

生徒D

「マッチングで、結婚詐欺にひっかかったって聞いたわよ」

生徒E

(ナレーション)

「整形が失敗して、出てこれないんですって」

(学校では、さまざまなウワサが 飛び交っていた

大倉は、古里の幼なじみと駆け落ちして、北海道で農場を営んでいたという事を知るのは、十年後の同窓会まで、誰も知らなかった)

◇ テロップ ◇

大倉先生のモデルとなった先生は、現在行方不明です。

なので、最後の落ちは、こうであって欲しいとの願いを込めて書きました

(作者)

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第四話

夢雄
美侶

サブタイトル 「文化祭が始まるよ」

本話について

あらすじ

文化祭の当日、美優達のクラスは喫茶店で大忙し
そこにやってくる、エロイ客人を相手に苦労します。
最後は、吉賀と松子がついに・・・

登場人物（本話のみ）

Copyright@2024 D's

□ 第一幕 今日は文化祭

○（文化祭の朝） 姫磨工業高校 工業化学科の実習棟

今日は、いよいよ文化祭。

工業化学科 実習棟一階の第一実験室では、美優たち一年生が、早朝から喫茶店の準備に励んでいる。

ちなみに、二年生は、化学実験ショーを行うようで、三年生は、体育管を使い演劇とバンドを披露するようだ。

○一階の実習室の横の準備室

喫茶店をするため、オーブンなどを持ち込んできている

▽松子 オーブンから取り出したケーキを取り出し、ナイフで切り分けてる

「おいしぞう」

「中川さん、すごいや」

「ねえ、吉賀君ケーキの味見してくれる？」

美優

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

智美

松子

松子

吉賀

▽松子 ケーキの切れ端を爪楊枝で刺し、吉賀に渡す

▽吉賀 一口で食べる

「うん。美味しい。店で売ってるのと同じだ」

「よかった」

「ケーキ屋さんになれるね」

「花と小鳥がさえずる、喫茶店でもいいわね」

▽智美 準備室を覗く

「美優、松子、そろそろ着替えるわよ」

「はい」

「吉賀君、ちょっと着替えてくるわね」

「了解」

中野

生徒A

生徒B

智美

松子

▽美優、松子、智美 実習棟の中にある、女子更衣室へ行く

「おーい、午前担当の男子も早く着替えろよお」

「じゃ、着替えるとするか」

「俺、午後担当だから、教室で だべってくるわ」

▽部活の出し物で抜ける者もあり、だいたい十人前後で喫茶店を回すことになる

今回の衣装は、工業化学科らしく、全員 実習用の白衣を着ることにした。
ただし、女子の三人は、メイド喫茶を意識しての、フリフリの水色の
ミニスカートにフリフリの白のブラウス、頭には、大きな赤のリボンの
カチューシャ。これらは、すべて、ロリっ小島のコーディネートだ

○女子更衣室

「ねね、見て。かわいい。小島って案外、イイセンスしてるわね」

「一度、こんなの着てみたかったけど、さすがに 家では着れないし」

美優

「あの顔から、こんなファッションセンスが生み出させるなんて、天は二物を与えずとは、言ったものね」

智美

「誉めているのか？ けなしているのか？」

美優

「あら、私としては 最大限 敬意を払ってるつもりよ」

松子

「もう、美優ったら」

智美

「美優は午後からブラバンの演奏に行くんでしょ」

美優

「そうなの。喫茶店にいたかったのにね」

松子

「私は、美優の演奏を聴きたかったわ」

美優

「ありがとう。終わったら、直ぐにもどって 手伝うわね」

男子

▽美優、智美、松子 実習室に戻る

「おおーっ」

智美

「ちょっと、タダ見は、だめよ」

小村

「夢前が、美少女アニメキャラに見えるよ」

男子A

「高谷さん、なんてセクシーなんだ」

智美

「ねえ、私たちだけって、不公平じゃない？」

中野

「なにがだい？」

智美

「私達だけが、コスプレみたいなこととして、男子は、なにも無いの？」

中野

「でも、クラスで決めたことだし、当日に言われても」

智美

「じゃ、部活やってる人は、白衣の下は、部活のユニフォームってのはどう？」

部活のユニフォームなら、すぐに 着替えれるでしょ

小村君は、バスケット、滝本君は、ラグビー、松村君は、水着ってとこでしょ」

小島

「松村のもっこりを公然にさらすのか？」

智美

「だから、白衣を上に着るのよ」

(美優)

(白衣の下に、松村の筋肉が見れるって、エロすぎ。智美も相当ワルよの)

中野

「それ、良いアイデアかもしれない」

小島

「おいおい、俺は、山岳部の、衣装か？ リュック背負うのか？」

智美

「心配しないで、顔面妖怪は、接客担当じゃないからしないから着替えなくてもいいわよ」

美優

「智美 だめよ本当のこと言っちゃ」

男子A

「どうする？」

男子B

「どうする？」

小村

「まあ、確かに高谷がいうこともわかる。女子だけってのは、不公平だよな。頑張ってくれたんだから、男子もやろうぜ！」

男子C

「小村が言うなら やるか」

と、言うことで、ウェ이터役の男子は、白衣の下に部活のユニフォームを着ることに決まった。

※調理担当

松子・美優・吉賀

※ウエイター担当（前半）（後半担当は割愛）

智美 フリフリのメイド衣装

小村 バスケットのユニフォーム

滝本 ラグビーのユニフォーム

中野 バスケットのユニフォーム

松村 競泳水着＋Ｔシャツ

※呼び込み、案内係

男子 数名

そんなこんなで、準備も整い、文化祭が始まった。

□第二幕 平常時 # 智美 #

○工業化学科実習棟 入口付近

▽呼び込み役の生徒 来客に向かって呼び込みをしている

「いらっしやい、いらっしやい、美味しいケーキと、コーヒーの店ですよ」

男子A

「ねえねえ、いい子いるよ。寄ってきなよ」

男子B

なんかの、呼び込みと勘違いしている、男子もいる。

▽来客の女子中学生 三人人組

看板を見る、

「へえ、ビーカーで飲むコーヒーだつて。代わってる」

女子中学生A

「ちょっと、入ってみようよ」

女子中学生B

「そうだね」

女子中学生C

「はい、カワイイ女の子、三人様、どうぞ」

男子A

〇一階 実習室

▽女子中学生 実習室に入ってくる

女子中学生 A

「わあ、さすが高校だわ。中学校の実験室と全然違う」

男子 B

「こちらのお席にどうぞ」

▽女子中学生 席に着く

▽智美 女子中学生のいる席にやってくる

智美

「いらしゃいませ」

▽女子中学生 智美の衣装を見る

女子中学生

「カワイイ」

女子中学生 B

「おねえさん、きれえい」

智美

「ありがとう。あなたたちも、とってもカワイイわよ。」

女子中学生A

智美

初めてのお客さんだから、うんとサービスするわね
今日の おすすめは、シフォンケーキのセットね」

「じゃ、それにします」

「ありがとうございます。シフォンケーキセット、三つ」

Copyright@2026 D&S

□第三幕 # おばちゃん二人 VS 小村 #

○工業化学科実習棟 前

中年女性二人が、工業化学科棟の前を通る

▽おばちゃんA メイド喫茶の看板を見つける

「ちよつと、田中さん、メイド喫茶ですってよ。ちよつと休んで行きましょうよ」

おばちゃんB

「そうね、歩きすぎて疲れたわ」

男子A

「どうぞ、イケメンのコスプレウェイターが、おもてなしますよ」

おばちゃんA

「コスプレですって。それもイケメン」

男子A

「はい、白衣の下は、何を着てるか、お楽しみです。もしかして、すっぽんぽんかも、しれませんが」

おばちゃんB

「もう、おばちゃんをからかわないで。でも、いいわね」

おばちゃんA

「じゃ、ここで、休憩しましょう。ちゃんとサービスしてよね」

男子 A

「はい、はい、もちろん。美人の奥様二人です」

男子 A

▽男子 A おばちゃんを工業化学科棟へ案内する

「あちらの方が、イケメン喫茶になってます」

○実習室入り口

案内係の男子 B が立っている

男子 B

▽男子 B 扉を開ける

「こちらです」

おばちゃん A

「あら、ここね」

▽おばちゃん二人 喫茶店になっている実習室に入る

○実習室

中では 智美が待っている

智美

「いらっしやいませ。」「こちらにどうぞ」

智美

▽智美 おばちゃんを席に案内する
○おばちゃん二人組のテーブル
― 一番奥の実習テーブルへ案内する
「こちらの席にお座りください」

智美

▽おばちゃん二人 隣通しに椅子に座る
「メニューをどうぞ」

智美

▽智美 おばちゃんにメニューを渡す

おばちゃんB

▽おばちゃんA メニューを受け取る

「あら？ イケメンはどこにいるの。イケメンを楽しみに来たのよ」

おばちゃんA

「大丈夫です。後で参ります」

「そう。楽しみだわ。韓国スターのような子を頼むわね」

(智美)

(ここは、ホストクラブじゃないつうの)

智美

「では、ご注文は、イケメン男子にお願いします」

▽智美 おばちゃんの席を離れ、準備室に戻る

○準備室

▽智美 イライラした感じで準備室に戻ってくる

智美

「ちょっと、男の子たち、出番よ」

小村

「じゃ、俺が行くとするか」

小村

▽小村 注文を聞きに おばさんたちのテーブルに行く

「いらっしやいませ。本日は、一年二組の喫茶店にようこそ
ご注文はお決まりですか」

おばちゃん A

「わっ、かわいい。」

おばちゃん B

「ほんと、イケメンね」

小村

「ご注文を」

おばちゃん B

「私は、あなたを、頂くわ」

おばちゃん A

▽小村 照れ笑い

「ちよっと、ちよっと お兄さんが困ってるわよ」

おばちゃん B

「え、本当に食べてみたいのよ」

小村

「ありがとうございます。でも、当店のメニューはもっと美味しいですよ」

おばちゃん B

「あら、そうなの。残念ね」

おばちゃん A

「ところで、コスプレ喫茶なんですよ。その白衣の下は、何を着てるのかしら？」

小村

「この下ですか」

おばちゃん A

「そうそう」

▽小村 白衣をパツと広げ、バスケのユニフォーム姿を披露

おばちゃん A

「バレーボールかしら？」

おばちゃん B

「違うわよ、バスケットボールよね」

小村

「正解です。バスケットボールです」

おばちゃん A

「そうなの。バレーボールとは どう違うの？」

小村

「そうですね。一番分かり易いのは、シャツが、ランニングなんです」

おばちゃん A

「そうなの。ちょっと、白衣を脱いでみせて」

▽小村 白衣を脱ぎ、上半身もバスケット部のユニフォームになる

ランニングなので、腕がさらけだされる

おばちゃん A

「まあ、カッコイイ」

おばちゃん B

「ちょっと、腕を上げてみて」

▽小村 腕をあげる

薄く生えた脇毛が見える

おばちゃん B

「まあ 脇毛が、セクシーね」

▽小村 腕を下ろす

小村

「あ、すみません」

おばちゃん B

「もつと見せてよ」

小村

「すみません」

おばちゃん A

「いいのよ、男の子だもの。脇毛生えてる方が、素敵よ」

おばちゃん B

「じゃ、下の方も、生えてるのかしら？」

小村

「それは、ご想像に、お任せします」

おばちゃん B

「それは、見せてくれないのね」

小村

「申し訳ございません。さすがにそれは」

おばちゃん B

「残念だわ」

小村

おばちゃん A

「ご注文をお願いできますか」

「じゃ。あなたのオススメを二つね」

小村

おばちゃん B

▽小村 準備室の方を チラ見すると、智美が、クッキーを見せる

「では、おすめは、コーヒーと、クッキーの、セットですが、よろしいでしょうか」

「ええ、それでいいわ」

小村

おばちゃん B

「では、失礼します」

「また、戻ってきてね」

▽小村 準備室へ戻る

○実習準備室

小村

「ふう、疲れた。おばちゃんの相手って疲れるよ。持っていくときは、松村 お願いな」

松村

「え？ 僕？」

小村

「頼むよ」

松村

「わかったよ」

（数分後）

▽松子 お盆に、コーヒーをクッキーを載せた物を持ってくる

松子

「はい、出来たわよ。誰か運んで」

小村

「じゃ、松村 頼む」

松村

「了解」

智美

「ちょっと待って。松村君、白衣は「こ」で脱いで行った時ほうがいいわよ」

松村

「え？ 恥ずかしいよ」

智美

「何言ってるの。部活の時は、白衣なんか着てないでしょ」

▽松村 しかたなく白衣を脱ぐ

上半身は、白のＴシャツ。下は 水泳部のユニフォームである競泳水着
もっこりが目立つ

「じゃ、よろしく」

▽松村 準備室からおばちゃん達の待つテーブルに向かう

□ 第四幕 # おばちゃん二人 VS 松村 #

○ おばちゃん二人組のテーブル

松村
「お待たせしました」

おばちゃん A
「きたきた」

▽ おばちゃん達

松村のもっこりした競泳水着に目が点

▽ おばちゃん B 思わず、手を口にあてる

おばちゃん B
「え、その格好は何」

▽ 松村 慌てる

松村
「すいません、すぐに、服をきてきます」

おばちゃん B
「違うの、とっても、素敵よ。」

松村
「ありがとうございます」

おばちゃん B

「もうちょっと、こっちに来て よく見せてくれる」

▽松村 おばちゃんの近くにいく

▽おばちゃん 松村の競泳水着のモツコリした部分を指差す

おばちゃん A

「ここには、何か入っているのかしら」

松村

「それは、秘密です」

おばちゃん B

「秘密ですって。田中さん、ちょっと、確認してみたら」

おばちゃん A

「いいの。悪いわ。でも、そう？ じゃ」

▽おばちゃん A 松村のもっこりした部分をつつく

“ツンツン”

▽松村 腰をひっこめる

松村

「あ、止めてください」

おばちゃん A

おばちゃん A

おばちゃん A

松村

おばちゃん A

おばちゃん B

「あら、なんか、感度がいいわね」

「もう、じれったいわね」

▽おばちゃん A 松村の前に来て
手で、松村の股間を揉む

「こっよ」

「や、やめて、ください。困ります」

「私達、全然、困りませんけど」

▽松村 コーヒーの乗ったおぼんを
机の上に置く

▽松村 軽く 会釈をして去って行く

「ちょっと、私はまだなのよ」

○準備室

松村

滝本

智美

滝本

智美

滝本

▽松村 戻って、白衣を羽織る

「僕、もう、無理」

「しょうがないなあ、今度は、俺が行って、ピシッと行ってやるよ」

「はい、次は これを六番に運んでくれる」

「じゃ、俺が行ってきてやるよ」

「滝本君、気をつけて」

「ああ」

Copyright@2026 D's

□ 第五幕 # 青年 VS 滝本 #

▽ 滝本 六番テーブルに飲み物とケーキを持って行く

○ 六番テーブルの席

三十代そこそこの中年太りの男性が座っている

「お待たせしました」

「お、きたきた」

▽ 滝本 客の男性を見て、女子がよかったのかと思う

「すみません。僕で。女子と代わりましょうか」

「いや、いいよ。ありがとう。君は、ラグビー部だね」

▽ 滝本 机の上にケーキと飲み物を置く

「はい」

「中にラグーシャツ着てるから、すぐわかるよ」

男性

滝本

男性

滝本

男性

滝本

滝本

男性

滝本

「そうですね。一発でわかりますよね」

「ちょっと、白衣を脱いでくれる」

「はい」

▽滝本 白衣を脱ぐ

ラガーシャツと、ラガーパンツを穿いている

ラガーパンツはショート丈なので、太股ががつつり出ている

▽男性 滝本の姿をまじまじと見る

「胸板もあるし、足も筋肉が付いて太いね」

「ありがとうございます。足が太いって言われるとうれしいです。」

「そうなんだ。俺は、太ってるから足が太いと言われると嫌だな」

「お客さん、そんなに太ってませんよ」

※めっちゃくちゃお世辞

男性

「大人をからかっちゃいけないよ」

滝本

「ガリガリより いいですよ。俺は、もっと太りたいです」

男性

「そうなんだ。そういえば、ラグビーって、パンツ穿かないって本当なの」

滝本

「そう言われますよね。実際、練習中は穿きますけど、試合の時は、穿かないようにしていますよ」

男性

「へえ、あれは、まじだったんだ」

滝本

「でも、最近では殆どの学校では、下にスパッツみたいな穿いてますけど、うちのような古くからの学校は 伝統を守ってますね」

男性

「じゃ、今の君は」

滝本

「俺ですか。今は、穿いてませんよ。こういう大事な行事のときは、身を引き締めるため、下着を穿かない事にしました」

男性

「穿いてないの？」

滝本

「はい」

男性

「証拠見せて」

滝本

「いえ、それは・・・」

男性

「いいじゃないか。男どうしだろ。ちよつとだけ」

滝本

「いえ、だめです」

男性

「じゃ、上から ちよつと触らせてよ。本当に穿いてないか確認するだけだからさ」

滝本

「少しだけですよ」

男性

「ああ。少しだけ」

▽男性 滝本のラグパンの上から、股間を触る

男性

「本当だ」

滝本

「穿いてないでしょ」

滝本

▽男性 滝本の気が緩んだ隙に、滝本のラグビーパンツの中に手を入れる

「あ、ダメです」

▽男性 滝本の陰茎を握る

男性

（女の子のような話し方で）「カワイイ」

▽滝本 男性の手を抜こうとする

男性

（女の子のような話し方で）「まだ だめよ」

▽滝本 なんとか、男性の手を取り出す

男性

（女の子のような話し方で）「もう、せっかく 気持ちよくさせてあげたかったのに」

滝本

▽滝本 ラグビーパンツの位置を直しながら

「じゅっくり」

▽滝本 会釈してその場を離れ、準備室に戻る

○実習準備室

智美

「大丈夫だった」

滝本

「俺も、もう無理。あんなの相手にできない」

（その後 イケメン喫茶 大繁盛中）

○（数時間経過）昼過ぎの 第一実習室

昼時となり、客がいなくなった

中野

「今のうちに、交代で昼飯にでもしようか。先に女子から、行ってくれるかい？」

智美

「私達は、松子の焼いてくれたケーキをここで食べるから大丈夫よ。それより、男子の方が、お腹空いてるでしょ」

中野

「ありがとう。じゃ男子も、昼飯に行ってくれるかな。

あと、誰か、教室にいる午後のチームを呼んできてくれるかな。それまでは、僕と、小村と、吉賀の三人でがんばっておくよ」

滝本

「オツケー 中野」

▽滝本 他、数人の生徒が、第一実験室から出ていく

小村 吉賀 中野 の男子三人と

美優 智美 松子 の女子三人が残っている

美優

「ごめん。私、午後いちで、ブラスバンド部の演奏があるの」

智美

「そっか、今日の美優は忙しいよね」

美優

「終わったら、みんなの分もがんばるよ」

中野

▽美優 準備室から出て行く

「よし、午後のメンバーが来るまで、頑張ろう
幸い、人も少ないし、なんとかなるだろう」

松子

▽松子 シフォンケーキを持ってくる

「少しは、お腹が満たせるわよ」

中野

「ありがとう。いただくよ」

▽中野 小村 吉賀 ケーキを食べる

Copyright@2026 D'S

□第六幕 # おばちゃん四人組 VS 吉賀 #

○第一実習室（今は、喫茶店）

▽智美 準備室の扉から、客が来るのを見ている

（少し待っていると）

▽女（幸子）と 男（幸子の彼氏）が入ってくる

幸子は、中学の時の智美のクラスメート

智美を虐めていた

▽智美 幸子の姿を見て驚く

幸子の方は気がついていない

▽智美 準備室の中に逃げ込む

○準備室

▽松子 急に智美が戻ってきたことに驚く

「智美、どうしたの」

智美

「え、えっと。野球部の準備に呼ばれてたの忘れてたの
急いでいなくなっちゃ」

松子

「そうなの。じゃ、早く行っておいでよ」

智美

「ごめん、しばらく 店の方お願いするわね」

松子

「大丈夫、任せておいて」

吉賀

▽智美 準備室の別の扉から出て行く

「高谷さん、慌ててたね」

松子

「そうみたいね。よっぽど 何かあったのね。お客が来たみたいだから
私が行ってくるわ」

吉賀

「中川さんは、調理担当だけどいいの？」

松子

「いいのよ。私も この衣装 見てもらいたいもん」

▽松子 男と、女の所にいき、席を案内する

(しばらくして)

○準備室

「お客が減ったね」

「そうだね。小村君、食事しておいでよ」

「後半のメンバーが来るまではいいよ」

「中野君と、吉賀君でなんとかなるわよ」

「小村、行ってこいよ」

「そうか。じゃ、食堂に行ってくるよ」

▽小村 昼食を取りに、準備室を出る

○準備室

松子、吉賀、中野 の三人だけとなる

松子
吉賀
小村
松子
中野
小村

(まもなく)

○第一実習室の扉

▽入り口から、年配女性四人が入ってくる

おばちゃん A

「ここね。田中さんが、教えてくれた店ってのは」

▽中野 おばちゃんの前に立ち

中野

「いらっしやいませ。こちらにどうぞ」

▽中野 奥の角のテーブルに案内

おばちゃん A

「なんや？ あんたが、イケメンか？ ちょっと、聞いてることと違うやない？」

中野

「あいにく、イケメンたちは、お昼に行っちゃいました」

おばちゃん B

「せっかく、来たのに」

おばちゃん C

「私なんか、イケメンがいるからって聞いて、パートを早く切り上げてきたのよ
どうして、くれるの？」

おばちゃん D

「チェンジ、チェンジ」

中野

「申し訳ありません」

おばちゃん C

「謝ってすむ問題じゃないわよね」

▽吉賀 準備室のところから中野の様子を見ている

中野の様子がおかしいと感じ、行くことにする。

吉賀 学生服（カッターシャツと黒の長ズボン）の上に白衣を着る

▽吉賀 中野の所に行く

吉賀

「中野くん、どうしたの？」

中野

「吉賀」

▽おばちゃん達 吉賀の顔を見る

おばちゃん A

「あら、ちゃんとイケメン、いるじゃないの」

おばちゃん B

「ほんと、ほんと、アイドルみたい」

おばちゃんC

吉賀

中野

松子

中野

松子

中野

松子

中野

「決めた。アナタで、いいわ」

「中野くん、ここは、僕に任せて」

「わかった。ありがとう」

▽中野 準備室に戻って行く

○準備室

「大変な客ね」

「だよな」

「中野君だって、十分イケメンなのにね」

「いや、俺は身長だけだから」

「どうしましょう」

「俺、食堂行って、小村呼んでくるよ」

松子

「そうね」

▽中野 小村を呼びに 準備室を出ていく

○実習室（今はイメケン喫茶）

おばちゃん四人組のと、吉賀が会話している

吉賀

「では、お嬢さま方、ご注文を、お聞かせいただけますか？」

おばちゃん A

「まあ、お嬢さま ですって」

おばちゃん B

「でも、注文を聞く前に、することあるでしょ？」

吉賀

「为什么呢？」

おばちゃん B

「もう、ここは、コスプレ喫茶って、田中さんから、聞いたのよ。
あなたは博士のコスプレなのかしら」

吉賀

「すいません。僕は、調理を担当しているので、こんな格好なんです」

おばちゃん C

「え、あなたこそ、接客しなさいよ」

おばちゃん D

吉賀

おばちゃん D

吉賀

おばちゃん A

吉賀

おばちゃん A

おばちゃん B

吉賀

「今は、ウェイターでしょ」

「確かに そうですが」

「じゃ、コスプレをしてみせて」

「ユニフォームは部屋においてきているので」

「出来ないって言うの。それじゃ、パンツ一枚になってくれてもいいのよ」

「さすがにそれは」

「あら、なに、サービス悪いわね。田中さんは、パンチ一枚で接客してもらったって聞いたわよ。ここは、客を選ぶのかしら」

「最近の高校生は、それだからねえ」

「そんなつもりはないのですが」

○準備室

▽松子 準備室の扉から吉賀のことを伺っている

吉賀が困っているようなので、吉賀の元に行く

○おばちゃん四人組の席

▽松子 吉賀の横に並ぶ

松子

「お客様、どうされました」

おばちゃん B

「なあに、あなた？」

松子

「私に対応します」

おばちゃん A

「嫌よ。私は、この子がいいの」

おばちゃん C

「それに、さっきは、別の客には、コスプレのサービスをして、私たちには出来ないの？ この店は、客を選ぶの？」

松子

「それは・・・」

吉賀

「中川さん、大丈夫。お客様の言う通り。差別なんて、しては、ダメだよ。ここは、僕が、対応するから」

松子

「大丈夫」

吉賀

「心配しないで」

松子

「わかった」

▽松子 準備室に戻り、扉から様子を伺っている

おばちゃん A

「邪魔者が消えたから、早く脱いで」

吉賀

「本当に、脱ぐんですか」

おばちゃん B

「全裸になってって言ってないわ。最低限の物は穿いておいてもらわないと、警察に捕まってしまうじゃないの」

おばちゃん C

「そうよ。パンツまでは脱がなくていいわよ」

▽吉賀 白衣を脱ぎ、空いている机の上に置く

下はカットソーシャツを着ている

▽吉賀 カットソーシャツのボタンを外し、カットソーシャツを脱ぎ、机の上に

▽吉賀 さらにＴシャツを脱ぎ机の上に

吉賀の色白の華奢な体をさらす

▽おばちゃん 吉賀の綺麗な身体を見て、うっとり

おばちゃん B

「わお！ 素敵」

おばちゃん C

「悔しいくらい、綺麗だわ」

おばちゃん D

「早く 下も」

▽吉賀 ズボンのベルトに手をかけ ベルトを外す

ベルトを緩めると、ズボンが、ストンと落ち、
体操服のランニングパンツを穿いている

おばちゃん A

「あら？ かっこいいの履いてるわね」

おばちゃん B

「あら、陸上選手だったの？」

吉賀

「いいえ、これは、学校の体操服なんです」

おばちゃんB

吉賀

おばちゃんB

おばちゃんD

おばちゃんA

吉賀

おばちゃんA

吉賀

おばちゃんA

吉賀

「そうなの、今どき、そんなに丈が短いのって、珍しいわね」

「案外軽くて、履きやすいんですよ」

「そうなの」

「確かに軽くて、涼しそうだけど、ちよつと、前の膨らんだところが、気になって、しかたないわ」

「これって、箱根駅伝で大学生が穿いてるやつかしら」

「そうですね」

「私、見てて、前から気になってた事あるんだけど
その下って、どうなってるの？ 走つてるときに、中が見えたりしないの？」

「大丈夫ですよ。ちゃんと、中にインナーパンツが付いていて、見えないように
なってるんです」

「へえ、ちよつと、見せて？」

「どうぞ」

おばちゃん A

おばちゃん B

おばちゃん C

吉賀

おばちゃん B

おばちゃん C

おばちゃん B

おばちゃん C

吉賀

▽吉賀 おばちゃん A に、ランパンの裾をめくり、下のサポーター部分を見せる

「本当。ちゃんと見えないようになってるのね」

「もう、山田さんたら。見えちゃ困るじゃないの」

「生地が、とっても薄いようだけど、何でできてるのかしら？」

「さあ、汗を蒸発させやすい生地だと思うのですが」

「せっかくだから、触らせてもらったら？」

「あら、恥ずかしいわ」

「何言ってるの。今しかできないわよ」

「そうね。ちょっと、触らせてくらかしら」

「はい」

▽吉賀 おばちゃん C の方に行く

吉賀

「どうぞ」

▽おばちゃんC 吉賀のランニングパンツ裾の生地を指で挟み手触りを確認

おばちゃんC

「薄いわね。こんな生地だから、ここが、大事なところが、右に向いてるのが、まるわかりね」

おばちゃんD

「そんなに薄いのに。私も触っていいかしら」

吉賀

「どうぞ」

▽おばちゃんD 吉賀のランニングパンツの上から、膨れた部分をわしづかみ

吉賀

「え」

おばちゃんD

「本当 とっても薄いわ」

▽おばちゃんD 吉賀の陰茎をランニングパンツの上から揉みまくっている

吉賀

「あの、そろそろ注文を」

おばちゃんD

おばちゃんA

おばちゃんB

おばちゃんC

おばちゃんD

吉賀

松子

吉賀

▽おばちゃんD 手を離す

「あら、ごめんなさい。あんまりあなたがカワイイので、注文を忘れてたわ」

「じゃ、私は、ホットコーヒーで」

「私も。私は、ミルクを付けてね」

「私もコーヒーでいいわ」

「ホットコーヒー四つね」

「かしこまりました」

▽吉賀 準備室の戻って行く

○準備室

「吉賀君、大丈夫」

「平気、平気。中川さん コーヒー四つね」

松子

「はい」

▽松子 コーヒーメーカーでコーヒーを作る

松子

「はい 出来たわ」

吉賀

「じゃ、持って行ってくるね」

松子

「吉賀君、服を着たら」

吉賀

「だめだよ。服を着て行ったら、何を言われるか。それに、服は 机に置いてきてしまったんだ」

松子

「気をつけてね」

吉賀

「心配しないで」

▽吉賀 準備室から出て、おばちゃん四人組の席に向かう

○おばちゃん四人組の席

吉賀

「お待たせしました」

おばちゃん A

「来た、来た」

▽吉賀 コーヒーをおばちゃん達の側に置いていく

▽吉賀 コーヒーを全て 配り終わる

吉賀

「それでは、ごゆっくりと」

▽吉賀 その場を離れようとする

おばちゃん C

「ちょっと待って」

吉賀

「他に、何か注文ですか」

おばちゃん C

「そうじゃないわ」

吉賀

「なんででしょうか」

おばちゃん D

「私達 もう少し 聞きたいことがあるのよ」

吉賀

「はい」

おばちゃん D

吉賀

おばちゃん C

おばちゃん A

吉賀

おばちゃん B

吉賀

おばちゃん C

おばちゃん D

おばちゃん C

「ねえ、もっこり目立つけど気にならないの」

「これですか。履き慣れてるので、僕は、気になりませんね」

「気にならないですって、よっぽど、自信があるのね」

「そんなに 目立ってるのよ」

「はい 大丈夫です」

「ねえ、もっと大きくなったら、恥ずかしいでしょ」

「そうですか」

「ですって。じゃ、恥ずかしいかどうか、確認してみない」

「どうやって」

「ちょっと こっちにいらっしやい」

▽吉賀 おばちゃんCの所にいく

おばちゃんC

「もっと近くに来て」

▽吉賀 おばちゃんCに もっと近づく

椅子に座ってる おばちゃんCの顔の高さに、吉賀のもっこりした部分

▽おばちゃんC 吉賀のランニングパンツの上から 陰茎の部分を擦りだす

吉賀

「何をするんですか」

おばちゃんC

「大きくなっても、恥ずかしくないか 確認するのよ」

吉賀

「止めてください」

▽吉賀 おばちゃんCから離れようとする

▽おばちゃんD 後ろから吉賀の体を押さえる

おばちゃんD

「ダメよ 動いちゃ」

吉賀

「マジで、止めてくれませんか」

おばちゃん C

「あら、固くなってきてるわよ」

▽おばちゃん A おばちゃん B 席を立ち上がって 吉賀の下半身を見る

▽おばちゃん C 吉賀の陰茎部分を 握って縦にする

ランニングパンツがテントを張ったように見える

おばちゃん A

「本当、すごいじゃない」

おばちゃん C

「どう、これでも 恥ずかしくないの」

吉賀

「はい」

おばちゃん C

「結構 強情ね」

▽おばちゃん C 吉賀のランニングパンツの上から陰茎部分を舐め出す

ランニングパンツが濡れ、生地が陰茎に張り付く

おばちゃん C

「ほら、あなたの亀さんが よくわかるわよ」

おばちゃん A

「ちょっと、透けて、筋が見えるじゃない、やらしい」

吉賀

「はい、確かに 恥ずかしいです」

おばちゃん C

「おばちゃん、素直な子が好きなのよ」

▽おばちゃん D 吉賀を離す

吉賀

「では、ごゆっくり」

おばちゃん B

「あー」

おばちゃん A

「どうしたの 大声出して」

おばちゃん B

「ちょっと、私、ミルクも頼んだわよね」

吉賀

「すみません。直ぐ取ってきます」

おばちゃん B

「取りに行かなくてもいいわよ。直ぐに出してくれるなら」

吉賀

「どういうことですか」

おばちゃん A

「もう、何する気」

おばちゃんB

「ちょっと、こっちへいらっしやい」

▽吉賀 おばちゃんBの所へ

おばちゃんB

「あなたのミルクを入れてちょうだい」

吉賀

「ミルクって」

おばちゃんB

「鈍いわね。ここに 沢山入っているでしょ」

吉賀

「それは、勘弁してください」

おばちゃんB

「だめよ。ミルク忘れた あなたが悪いの」

吉賀

「さすがに、それは」

おばちゃんB

「大丈夫。直ぐに出してあげるから」

▽おばちゃんB 立ち上がり、吉賀の前に立つ

吉賀

おばちゃんB

▽吉賀　じっとしている
▽おばちゃんB　吉賀ランニングパンツの中に手を入れ陰茎を握る
「何をするんですか」

「ミルクを搾り出すのよ」

▽おばちゃんB　吉賀のランパンの中で陰茎を扱きだす
ランパンの中が激しく動いている

吉賀

「あ、あつ、や、やめて」

おばちゃんB

「あーん。固いわ。主人のと大違い」

吉賀

「あつ　あつ、や、やめて」

▽吉賀　腰を振っている

おばちゃんB

「あなたも、喜んでいるじゃないの」

おばちゃんA

「沢山出るように、私も手伝うわ」

吉賀

▽おばちゃんA 立ち上がり、吉賀の乳首を指でいじりだす

「あ、やばい、いく いく」

▽吉賀 足がガクガクとなる

▽おばちゃんB ゆっくりと陰茎を絞る

ランパンから吉賀の精液が、滲み出してくる

▽吉賀 息があら

太股に粘液が流れてくる

▽おばちゃんB 吉賀のランパンから染み出た精液をコーヒーカップですくう

おばちゃんB

「ちゃんとミルクを出たじゃない」

▽おばちゃんB コーヒーと吉賀の出した粘液をスプーンで混ぜ飲む

おばちゃんB

「うーん この青臭いの最高だわ」

おばちゃんD

「ちょっと、あなた達だけずるいわよ」

おばちゃん C

「そうよそうよ」

おばちゃん D

「私たちにも ミルクを入れてちょうだい」

吉賀

「もう、無理です」

おばんちゃん A

「え、若いんだから、まだまだ いけるでしょ」

吉賀

「いえ、本当に」

おばちゃん C

「わかったわ。じゃ、もう一回だけでいいから ミルクを出して」

吉賀

「無理ですって」

おばちゃん D

「大丈夫よ、私たちの熟女のテクニクで いかせてあげるから」

おばちゃん C

「ちょっと この上に寝なさいよ」

▽吉賀 おばちゃんのひっこさに諦める

吉賀

「机の上ですか」

おばちゃん C

「そうよ。その方が、やりやすいもの」

▽吉賀 ためらっている

おばちゃん D

「さあ 早く」

吉賀

「本当に、これで最後ですよ」

おばちゃん D

「ええ。判ってるわよ」

▽吉賀 シューズを脱ぎ 机に仰向けになって寝る

おばちゃん D

「両手は上に上げて」

▽吉賀 両手を上に上げる

うっすらと脇毛が見える

おばちゃん A

「こんなカワイイ子でも、ワキ毛が生えてるのね」

おばちゃん B

「もう、可愛くて、こっしちゃう」

吉賀

おばちゃんC

おばちゃんB

おばちゃんC

おばちゃんC

おばちゃんC

▽おばちゃんB 吉賀の両脇に、自分の手を入れ吉賀のワキ毛の感触を楽しむ

「くすぐったいです」

「ちょっと、今度は、私たちが楽しむ番よ」

「ちょっとぐらい いいじゃない」

▽おばちゃんC 吉賀のランニングパンツの膨らみを見る

「右寄りなのね」

▽おばちゃんC 吉賀のランニングパンツの裾から手を入れ陰茎を握る

「もう、こんなに大きくなってるじゃないの」

▽おばちゃんC インナーが邪魔でなかなか扱けない

「こんなに大きくして、窮屈でしょ」

▽おばちゃんC インナーをめくり、陰茎を ランパンの中に取り出す

※インナーからは取りだしているが、ランパンは穿いたまま

吉賀のランニングパンツは、見事なテントを張る

おばちゃんD

「すごい。ビンビンに起ってるじゃない」

▽おばちゃんC 吉賀の陰茎をランニングパンツの中で扱きだす

吉賀

「あっ あっ あっ」

▽吉賀 扱くりズムに合わせて、声を漏らす

おばちゃんA

「嫌だ、この子 すごく感じてるじゃない」

おばちゃんD

「もっと、感じさせてあげるわね」

▽おばちゃんD 吉賀の乳首を舌でつつき、舐め、吸い出す

吉賀

「あーっ」

おばちゃんC

「そろそろ、ミルクも暖まったかしら」

▽おばちゃんC 激しく扱きだす

吉賀

「あうっ、い、いく」

▽おばちゃんC 吉賀のランパンの中から手を出し、今度はランパンの上から固くなった陰茎を握り、亀頭部分をくつきりとさせる

▽吉賀 尻が高く浮く

ランパンに包まれた亀頭部分から、むにゅっと精液が滲み出てくる

吉賀

（ハア、ハア・・・）

おばちゃんC

「どう。気持ちよかった」

▽吉賀 無言

▽おばちゃんD 吉賀のランニングパンツの上から股間もむむ

（グチヨ、グチヨ と音がする）

おばちゃんD

「わ、なんて ヤラシイ音なの」

▽おばちゃんD 吉賀のランニングパンツのウエストバンドをつまみ、持ち上げ中を覗く

おばちゃん D

「いっぱい出したわね」

おばちゃん A

「私も見せて」

▽おばちゃん A 覗きにくる

おばちゃん A

「めっちゃ 毛に絡んでるわ」

吉賀

「これで、いいですか」

おばちゃん A

「ええ、いいわよ。とっても楽しめたわ」

▽吉賀 机から下りる

吉賀

「それでは」

おばちゃん A

「来年も楽しみにしてるわよ」

▽吉賀 別の机に置いてあった、服を持ち準備室へ戻る

○準備室

松子

吉賀

松子

吉賀

智美

松子

▽吉賀 準備室に戻ってくる

「吉賀君、大丈夫」

「うん。大丈夫」

「これ、使って」

▽松子 お湯で濡らしたタオルを渡す

「ありがとう」

▽吉賀 タオルで ランパン、腹や、胸を拭く

○準備室の扉が開く

▽智美 戻ってくる

「松子 ごめん 待たせて」

「遅いよ。吉賀君が大変だったんだから」

智美

「吉賀君がどうかしたの」

▽智美 吉賀の方を見る

上半身裸で、ランニングパンツが精液でぐちよぐちよ

智美

「え、何があったの」

松子

「それが」

吉賀

「僕、部室棟で、シャワー浴びてきていいかな」

松子

「ええ そうした方がいいわ」

吉賀

▽吉賀 Tシャツを着る

吉賀

「じゃ、ちょっと行ってくる」

▽吉賀 準備室から出て行く

▽松子 心配そうな顔をしている

Copyright©2026 D's

松子

「智美、ちょっとだけ、店番頼むわ」

智美

「いいよ、松子、ゆっくりしてきな」

（直後）

▽中野 小村が戻ってくる

中野

「ごめん、小村を探すのに時間かかって」

小村

「俺、教室に後半の奴ら呼びに行ってたんだよ」

▽後半担当の男子生徒も入ってくる

生徒A

「よっしゃ、午後からは俺たちに任せておけ」

▽智美 松子の顔を見る

智美

「ほら、こっちは大丈夫だから ちゃんと吉賀君を見てあげるのよ」

松子

「智美 ありがとう」

▽松子 準備室から出て行く

Copyright@2026 D³S

□ 第七幕 滝本と小雪の出会い

(数分後)

○ 準備室

おばちゃん四人組も帰り、平安な実習室
午後から担当の男子生徒と、滝本も待機している

小雪

「すいません」

(第一実習室の方から声が聞こえる)

智美

「あら、お客さんだわ」

▽ 智美 周りを見渡すが、滝本しかいない

滝本

「俺が行くよ」

智美

「滝本君は、午前担当だから、いいわよ」

滝本

「俺、こういうの好きだから」

智美

「ありがとう。じゃ、注文聞いてきてくれる」

滝本

「オッケー」

▽滝本 お盆に水の入ったコップを乗せ実習室に向かう

○女性一人が座っている机

▽滝本 女性に近づく

滝本

「いらっしやいませ」

小雪

「ああ、よかった。誰も来てくれないかと思ったわ」

▽滝本 女性がとても綺麗で見とれてしまう

小雪

「ねえ どうかしました？」

滝本

「え、あ、はい。あまり綺麗な人なんで」

小雪

「もう、学生さんが、大人をからかつちゃダメよ」

滝本

「いえ、ほんとうです」

小雪

「冗談でも　こんな若い人に言われるなんて、光栄だわ」

滝本

「冗談ではないです」

小雪

「ありがとう」

滝本

「ご注文をどうぞ」

小雪

「何が、いいかしら？　あなたは、何が好き？」

滝本

「俺？　僕ですか。僕は、コーヒーは飲まないですけど、ここのコーヒーは、超お奨めですよ」

小雪

「どうして　お奨めなのかしら」

滝本

「日本で絶対買えないコーヒー豆を使ってるんです」

小雪

「おもしろいわ。日本で売ってないコーヒーが、飲めるなんて」

滝本

「本当です。クラスメートに外交官の息子がいて、そこから仕入れたんです」

小雪

「すごいね。じゃ、それを二つ」

滝本

「二つですか？」

小雪

「そう、あなたの分。一緒に飲んでくれないかしら？」

滝本

「いいんですか？ 俺なんかと」

小雪

「ええ、お願い」

滝本

「かしこまりました」

小雪

「それと、お願いが、あるの。あなた、ラグビー部でしょ」

滝本

「どうして 判るんですか」

小雪

「だって、白衣の間から、ラグーシャツが見えてるじゃない」

滝本

「本当だ。すごく簡単でしたね」

小雪

「次、運んで来るときは、白衣を脱いで ラグーマンの姿でお願いしても

滝本

小雪

滝本

智美

滝本

智美

滝本

智美

いいかしら」

「どうしてですか」

「わけは、運んで来たときに話すわ」

▽滝本 準備実に戻る

「コーヒー二つ」

「一人なのに二つ？」

「一つは俺の分だそうだ」

「なんで、滝本君と、飲みたいのかしら？」

「さあ」

「また、体が、目当てなのかしら。滝本君で、筋肉室で、刺さる人にはささるから」

▽智美 コーヒーをカップに注ぐ

▽滝本 白衣を脱ぐ

ラグーシャツと、ラグビーパンツの姿に

「どうして 脱ぐの」

「あの人が、俺のユニフォーム姿を見たいっていうから」

「やっぱり、あの女も変態なのね」

「まさか？ あんな綺麗な人が？ でも あの人なら、いいかな」

「はいはい、出来たから、行つといで」

▽智美 滝本にお盆を渡す

▽滝本 準備室を出て、小雪が待っている机に向かう

○小雪が座っているテーブル

▽滝本 やってくる

「お待たせしました」

智美

滝本

智美

滝本

智美

滝本

小雪

▽小雪 滝本のユニフォーム姿を見る
「ありがとう。私のお願ひ聞いてくれたのね」

滝本

「はい。あ、でも、ここはイメケン コスプレ喫茶なので」

小雪

「自分の事をイケメンって言うのね」

滝本

「すいません。俺って、全然 いけてないですよね」

小雪

「うそうそ。とっても イケメンよ。」

「じゃ、横に座って、一緒にコーヒーを飲んでくれる」

滝本

「はい」

▽滝本 小雪の横の椅子に座る

小雪

「ありがとう。私のような人の話相手になってくれて」

滝本

「いえ、俺も、こんな綺麗な人と話せるなんて、ラッキーです」

小雪

「ラグビーは、おもしろい？」

滝本

「はい。楽しいです。なんたって、一年からレギュラーになれましたから」

小結

「すごい。ここの高校のラグビー部は、強いのに、もうレギュラーなのね」

滝本

「ええ。練習、無茶くちや がんばりました ってのはウソで、
部員が少なくて、全員レギュラーなんです」

小雪

（笑う）

小雪

「ごめんなさいね」

滝本

「いえ、でも、強いのは本当ですよ。昔は、すごく弱かったって先輩から
聞いたのですが、ある時、すごい先輩が来てから、一気に強くなった」

小雪

「そうなの」

滝本

「だから、部員のみんなは、その伝説の先輩に負けないように、練習に励んで
いるんです」

小雪

「そうなの でも無理はしないでね」

滝本

「え？」

小雪

「ほら、この足の怪我の跡」

▽小雪 滝本の太股にある大きな傷跡を指差す

滝本

「ああ、敵の体当たりで、そのまま転けたら、骨が折れて。この時は、骨も見えて、俺もうダメ！って思いましたよ」

小雪

「ほらほら、危ない。気をつけてよ」

滝本

「なんで、俺の事、心配してくれるんですか？」

小雪

「はは、ごめんなさい。不気味よね。こんな、おばさんが」

滝本

「いえ、おばさんじゃないです。最初、俺の顔を見たときは、楽しそうだったけど今は、悲しそうに見えます」

小雪

「そう、顔にでちゃうのね」

滝本

「どうしたんですか」

小雪

「あなたと話していたら、昔のこと思い出しちゃった」

滝本

「昔のこと」

小雪

「私も夫も、ここの学校の生徒だったの。そして、彼はあなたと同じラグビー部の選手だったの」

私が、自転車で転けて、気がつくと、あの人の膝を枕にして寝ていたわ。

暑さでやられたね。まだ、動かない方がいいよ。と、言っつて、いつまでも膝の上にそして、同じ様に 太股に大きな傷があった。私、その傷を何度も撫でてたわ」

滝本

「俺と似ているんですかね」

小雪

「もう一つ、お願いを聞いてくれる」

滝本

「なんですか」

小雪

「あなたの膝で少しだけ、横にさせて」

滝本

「俺でいいんですか？」

小雪

「ええ、だって、あの人の若い頃に、そっくりなんですもの。」

たまたま通ったのも、何かの縁かもしれないわ」

滝本

「俺でよければ、どうぞ」

小雪

「ありがとう」

▽滝本 膝の上をあける

▽小雪 頭をかがめ、滝本の太股の上に頭を置く

小雪

「ああ、あの時と同じだわ」

▽小雪 滝本の太股にある傷を撫でる

小雪

「あの時と同じ」

▽滝本 小雪に太股と撫でられ、股間が反応しはじめる

▽小雪 頭を起こす

滝本

「すいません、こいつが、反応してしまっ」

小雪

「いいのよ。あの時と、何もかも一緒だわ」

滝本

「え？」

小雪

「あの人も、そうだったのよ」

滝本

「すいません」

小雪

「あはは、本当に今日は、ありがとう。楽しかったわ」

▽小雪 立ち上がる

滝本

「え？ もう、帰るんですか」

小雪

「これ以上いたら、あの人のことを もっと思い出しそうで」

滝本

「わかりました」

今度

「今度、会うことが出来たら、あなたの願い事、叶えるわ。

これは、あの人に始めてあった日に、あの人に言った言葉よ」

滝本

「俺、きっと、また会えると信じてます」

小雪

「ありがとう」

▽小雪 実習室から出て行く

Copyright@2026 D³S

□ 第八幕 ついに吉賀と松子が

○ 部活棟のシャワールーム

部活棟には、男子用のシャワールームが備わっている

▽ 吉賀 シャワーブースでランニングパンツを穿いたままシャワーを浴びている

▽ 松子 男子用なので、恐る恐る シャワー室の扉を開けて入ってくる

▽ 松子 シャワーの音がしている方へ近づく

▽ 松子 シャワー浴びている吉賀の側にくる

▽ 松子 カーテンの隙間から、吉賀がランパンを穿いたままシャワーを浴びている
後ろ姿を見つける

松子

「吉賀君」

▽ 吉賀 声に気づき 後ろを見る

▽ 吉賀 松子の方を向く

吉賀

「どうしたの？ 中川さん」

松子

「心配で見に来ちゃった」

吉賀

「大丈夫だよ」

松子

「吉賀君が、大丈夫でも、私が大丈夫じゃないの。本当に、本当に、心配したんだから」

▽松子 シャワーを浴びている吉賀に抱きつく

シャワーの湯が、松子にかかり、松子のメイドの衣装が濡れる

吉賀

「ごめん、心配かけちゃったね 中川さん」

松子

「本当に、本当によ」

吉賀

「うん。わかった。ほらほら汚いから離れて」

▽吉賀 松子を離そうするが、離れない

▽松子 吉賀の胸に顔をぴったりとくっつけたまま

松子

「吉賀君のは汚くないわ」

▽松子 吉賀をシャワー室の奥に押し、吉賀の背中を壁につける

▽松子 吉賀の前に膝を立ててしゃがむ

松子の目の前に、吉賀のもつこりとしたランパン

▽松子 ランパンの上から、吉賀の膨らんだ部分を口で啜えた

吉賀

「中川さん、そんな事しちゃだめだ」

松子

「松子って呼んで」

▽松子 吉賀のランニングパンツの上から手を入れ、直に握り優しく扱う

吉賀

「松子ちゃん、そんなことしちゃダメだって」

松子

「いやよ。あんな おばさんにだけに させないわ。

私だって、私だって」

吉賀

「松子ちゃん」

吉賀

松子

吉賀

吉賀

▽松子 吉賀の陰茎を一生懸命扱っている

(しばらく)

「うっ」

▽吉賀 松子の頭を抱え、腰を突き出す

「どっ」

「き、気持ちいいよ。松子ちゃん」

▽松子 ランニングパンツをずらし、吉賀の陰茎を取り出し壁に向かって抜く

「い、いく うっ」

▽松子 吉賀の精液が顔にかかる

▽吉賀 松子の頭を持ち上げ、立たせるようにする

▽松子 立ち上がる

▽吉賀 松子の顔についた精液を、手で拭い、その手で、松子の頬をはさむ
ゆっくりと、顔を近づけ、キスをする

▽松子 吉賀 キスをしたまま硬直

▽吉賀 キスをやめる

「吉賀君」

「松子ちゃん」

▽吉賀 手を松子の陰部に触る

「まだ、ダメ」

「ごめん、つい」

「体育の先生に、ちゃんと、付けるようにいわれてるでしょ」

「じゃ、もう一度」

▽吉賀 松子に顔を近づける

松子

松子

松子

吉賀

松子

吉賀

▽吉賀 松子 キスをする

(数分後)

○第一実習室

すでに喫茶店は終了し、生徒達は、片付けをしている

▽松子 吉賀 制服に着替え 実習室にもどる

美優、智美が片付けをしていた

「ごめん、おそくなっちゃた」

▽美優 松子の方を見る

「松子 心配してたよ。どこ行ってたの」

「どっって」

▽吉賀 遮るように

「中川さん、僕、男子の片付け手伝ってくるね」

吉賀

松子

美優

松子

松子

「うん」

美優

▽吉賀 その場を離れる

「しかも、自分だけ着替えてるし」

松子

「だって、あの衣装は、恥ずかしかったんだもん」

美優

「もう、心配してたの損しちゃった」

▽智美 皿を持っまま

智美

「何言ってるの。美優だって、部活に行ったきりだったじゃない」

▽美優 自分の頭を軽く叩く

美優

「あ、そうか」

智美

「ほらほら、早く片付けましょうよ。私、野球部の打ち上げの準備があるんだから」

美優

「おっと、私もだ。松子は、調理器具の片付けお願いするわ」

松子

美優

智美

智美

松子

智美

松子

「任せておいて」

「私は、実習室の方、片付けてくるわ」

「お願いね」

▽美優 実習室の方に行く

○準備室

松子と智美だけがいる

▽智美 松子に近づく

「どうだった」

「ふふふ。秘密」

「教えなさいよ」

「教えない」

Copyright@2026 D's

(二人の痴話げんかシーンで、フェードアウト)

Copyright@2026 D³S

第五話

夢雄

美侶

サブタイトル「ファッションモデルの人生がはじまるよ」

あらすじ

小村は吉賀の誘いで、服飾のカタログ用のモデルをすることとなる。
その服飾とは、一度、小村がイカされちゃ 例のマヌカン
さて、今回は いろんなことをされるのやら

登場人物（本話のみ）

□ 第一幕 ファッションモデル？

さあて、文化祭も終わり、次のイベントは？

○（ある秋の朝）一年二組の教室

▽ 美優 智美 松子 美優の席の周りで話をしている

「なんも無いぞぉ」

「いきなり どうしたの」

「文化祭も終わって、正月まで何もすることないのよ」

「何言ってるの。クリスマスっていうビッグイベントがあるじゃない」

▽ 吉賀 自席に座っている

女子の声が聞こえ、後ろを向く

▽ 吉賀 指を立て指を振りながら

「ちっ、ちっ、ちっ、それは違うな」

美優

智美

美優

智美

吉賀

松子

「吉賀君、どうして」

吉賀

「夢前さんにクリスマスというのは無縁だからだよ」

松子

「あら、美優って 仏教だったかしら」

吉賀

「そうじゃないよ。クリスマスとは、恋人同士が一緒に過ごす時間。夢前さんには、一番、縁のない話じゃないか」

美優

「ちよつと吉賀、どういうこと。クリスマスって言ったら、ケーキでしょ、チキンでしょ、それに、それに、なんたって、食べるものが沢山あるのよ」

智美

「美優、そんなにムキにならないで」

吉賀

「ね。クリスマスに、縁が無さそうでしょ」

美優

「よしがい」

小村

▽小村 吉賀を実習棟に行くのに誘いにくる

「おーい 吉賀、そろそろ実習室に行こうぜ」

吉賀

「うん。行こう、行こう」

小村

▽小村 夢前の顔を見て、吉賀の顔を見る

「吉賀、また夢前に撮られてたのか」

吉賀

「ううん。夢前さんは、クリスマスに縁がないよねって話してただけなの」

美優

「ちょっと小村君、聞いてくれる、吉賀君 ひどいのよ。私にはクリスマスは関係ないって」

小村

「そっかな。俺は、案外、似合っそうに見えるけどな」

▽美優 胸を張る

美優

「やっぱり小村君は、ちゃんと判ってる。その辺のちんちくりんと違うわ」

吉賀

▽吉賀 小村に抱きつき、小村の顔を見上げる

「えーん。小村君、夢前さんが、僕のこと ちんちくりんって言う」

(美優)

(ちょっと、小村君に抱きつくのは、私よ)

▽小村 吉賀の頭をなでる

小村

「よしよし。良い子だ、良い子だ」

▽吉賀 美優の顔を見て、ウィンク

(美優)

(あの やろお)

吉賀

「うんうん。僕、怖かったよ」

▽吉賀 小村の股間を撫でる

(美優)

(ちょっと、こいつ 何してんの。それも、私がしたいのに)

小村

「こら、吉賀 どさくさに紛れてどこ触ってる」

▽吉賀 小村の股間部分から手をどけ、顔を上げる

吉賀

「ばれたか」

小村

「そりゃそうだろ」

小村

「ほら、実習棟に行こうぜ」

▽小村 美優の方を向く

小村

「ほんならな、夢前」

吉賀

「ガンバ、夢前さん」

▽小村 吉賀 教室から出ていく

美優

「あのやろー後で、怨念を飛ばしてやる」

智美

「あんたは、霊能力者か」

松子

「まあまあ美優、おさえて、おさえて。私たちも実習棟に移動しないと」

美優

「次は 落合の実習かぁ。ラッキー」

松子

「あら、美優って、落合のこと好きだったけ？」

美優

「ちやうちやう、実習だと眠くならないの。私って、一カ所に停まってしまうと、死んじやうのよ」

智美

「あんたはサメかよ」

松子

「まあ、美優は、数学の藤本の時は、ナマケモノのように寝てるもんね」

松子

「そんなことより、さあ、急ぎましょ」

美優

「だね」

▽美優 智美 松子 教室から出ていく

（数分後）

○（同）実習室

▽小村 吉賀の目の前の松子の席に座って 吉賀と話をしている

▽松子 少し遅れてやってくる

小村が座っているので、吉賀の横に立つ

松子

小村

松子

美優

(美優)

小村

吉賀

松子

吉賀

▽智美 吉賀の反対側の椅子に座る

▽美優 智美の横の椅子に座る

「ねね、私の椅子に座ってなんの話してるの？」

「中川 悪い悪い、すぐにどくよ」

「いいわよ。ところで なんの話してたの？」

「なにになに、小村君の恋ばな」

(しまった、余計なことを言ってしまった)

「違う、違う」

「あのね、夏にみんなで、松子ちゃんのおばあちゃんの家に行ったでしょ」

「うんうん、それで」

「その時に、僕ら水着を買ったでしょ」

(美優)

吉賀

松子

吉賀

美優

智美

美優

松子

吉賀

松子

小村

(小村君は、精液ぶちまけて、もらってきたんだっけ)

「その店から、来年の新作水着のモデルになってくれない？って話があったんだ」

「モデル？」

「来年の出す予定の水着を試着して写真を撮るの。で、百貨店とかに配って反応をみるんだよ」

「まだ冬だよ」

「ちちち、美優は知らないんだな。ファッションの世界って半年なんか遅いくらいよ」

「そうなんだ」

「すごい、モデルだなんて」

「店にだけ出回るカタログなんで、普通の人には目に付かないんだけどね」

「それでも すごいわよ。で、小村君が選ばれたのね」

「俺、モデルって柄じゃないし」

吉賀

「そんな事ないよ。スタイルだっていいし」

小村

「もっと、男前は、いるだろ」

吉賀

「めちゃくちゃ男前が着ている服ってほしい？小村君のような、どこにでもいるちよっと男前の方が着ているほうが、売れるんだよ」

松子

「小村君って、すっごく今風で、かっこいいと思うけど」

智美

「そうよ、小村君って顔が小さくて、十分男前よ」

小村

「高谷さん、おだてないでよ」

松子

「あ、でも小村君だけ？ 吉賀君は、しないの？」

吉賀

「僕？ 僕もするよ。Sサイズの美少年モデルで」

(美優)

(美少年は余計じゃ。服はSサイズ でも、中身はLなんだよな)

吉賀

「実際の売り場での宣伝だから、より一般人に近い人がいいからね。外人さんモデルに似合っても、僕ら一般人には、似合うとは限らないから」

(美優)

松子

智美

松子

吉賀

美優

智美

小村

美優

小村

松子

(いや、あんたは十分 日本人離れしてるって)

「そっか、服のサイズに合わせて必要なんだね」

「へえ、二人ですごいわね」

「ねね、小村君、いいんじゃない？」

「そそ、バイト代、プラス 試着した水着は、全部くれるって」

「いいなあ」

「じゃ、美優も出れば？」

「夢前なら、上がないから、男物でもいいけるやろ」

「小村君、あとで、校舎の裏で、待ってるわね」

「夢前が言っと、冗談が本気に聞こえるんだよな」

「ところで、水着を買った店って、アノ 男好き店長のところよね」

吉賀

「そっだよ」

美優

「ええ、危険よ キケン。今度こそ 小村君は、ああされて、こう されて」

智美

「美優たら、何を想像してんのよ。松子も、言ってやりなよ」

松子

「えっと、吉賀君が、ああされて、こうされて、出されて、イヤっ！」

智美

「二人ともっ」

吉賀

「大丈夫だって、僕もいるんだし」

(美優)

(それが、一番危ないって。最近、私が、こいつの小村君への熱い目線に
気づいていないと思ってるのか。こいつと、店長で、小村君に薬で眠らせて
二人で、むひひひひなことをするんじゃない・・・)

松子

「美優、顔がにやけてるよ」

美優

「いかん、いかん 私としたことが」

松子

「私、吉賀君が心配だから、付いていっていい」

美優

(美優)

吉賀

松子

「松子が行くなら、私も着いて行く」

(小村君が 店長にレイプされていると「見たいし」)

「いいよ。そんなに心配なら、おいでよ」

「じゃ、決まりね」

Copyright@2026 D's

□第二幕 スタジオ撮影

○（次の土曜日）某スタジオの入口

美優は松子と車で待ち合わせをし、吉賀に教えてもらったスタジオを訪問

美優

「ここね」

松子

「ここよ」

美優

「いざ」

（美優）

（小村君のレイプを見に）

松子

「いざ」

（松子）

（吉賀君のもっこり眺めに）

▽美優、松子 ビル入口の自動ドアの前に立つ

自動ドアが開く

▽美優 松子 中に入る

Copyright@2026 D's

松子

「スタジオって言うから、テレビ局みたいなの想像してたけど、七五三の写真撮るのと変わらないわね」

美優

「そうね。私、芸能人とか、居たらどうしよう？　なんて、考えてたけど、普通なのね」

▽美優　持っていた鞆を手でおさえる

(美優)

(色紙が無駄になったじゃないの)

○スタジオ一階の受付

受付嬢が一人で座っている

▽美優　松子　受付嬢に話しかける

美優

「えつと、ダイジルの撮影見学者なんですが」

受付

「ダ、ダイジルですか？」

美優

「はい、大汁(だいじる)じゃないですよ」

松子

受付

松子

受付

受付

松子

「美優、違うわよ。ディーゼルよ」

「ああ、ディーゼルですね。お名前は？」

「中川と夢前です」

「少々お待ちください」

▽受付のお姉さん パソコンの画面で確認

「はい、伺っております、こちらの名札を首から下げていただき、エレベーターで、三階の Aスタジオにお入り下さい」

「ありがとうございます」

▽松子 受付嬢から名札を受けとる

▽松子 美優 エレベーターの方に向かう

○エレベーターの中

▽美優 松子 エレベータの表示板を見ている

松子

「智美も来たら良かったのにね」

美優

「なんか、今日は、デートって言ってたわよ。あいかわらず、お盛んなのよ」

松子

「お盛んって、美優、最近 最近変なテレビとか見てない」

美優

「見てない、見てない」

松子

「ドキドキするわね」

美優

「私たちも スカウトされたりして」

松子

「美人三姉妹で売れるわよ」

○スタジオBの3階

エレベーターの扉が開く

▽美優 松子 エレベーターを降り 廊下を歩く

○スタジオAの入口

松子

▽松子 スタジオの表示を見る

「このようね」

○撮影場所

▽美優 松子 スタジオに入っていく

遠くに眩しい明かりが見え、数人が集まっている

・カメラマン（男）

・カメラマンの助手（女A）

・ライト係（男）

・レフ板持ち（女B）

・メイク（女C）

▽小村 吉賀 砂浜の壁紙をバックに、小村と吉賀が、

水着姿で、立っていた。

▽小村 吉賀 カメラマンの指示に従ってポーズをしている

「はい、小村君、こっちに目線。吉賀君は、上目遣いで、小村君の方みて」

「いいよ。いいよ」

カメラマン

カメラマン

カメラマン

▽カメラマン シャッターを切っている

「はい、オッケー。次の撮影開始まで、十分休憩だ。
それまでに、次のに着替えておいて」

▽小村 吉賀は、撮影舞台から下りる

「ごくろうさま。二人とも素敵よ」

「ありがとうございます」

「吉賀君は、ぜんぜん素人じゃないわね。プロのモデルみたいだったわ」

吉賀

「そうですか。素質があるのかな」

店長

「あるある。小村君は、シャイなところが、仕草に出ていて、それもいいの」

小村

「それは、いいのか 悪いのか」

店長

「いいに、決まってるじゃない。そうだ、今度、家にいらっしやいよ
私が、手取り足取り、教えてあげる。ついでに、真ん中の足もね」

美優

「いいえ、行きません」

▽店長 後ろを向く

美優と松子が立っているのを見る

店長

「あなた、誰？」

美優

「わたし、わたしは、通りすがりのモデルよ」

▽店長 まさか？って顔をする

小村

「すいません。僕達の友だちなんです。僕たちの撮影してるところを見たいって言うので」

店長

「まっ、そうなの。まさか、健ちゃん、この女と やったの？」

(美優)

(健ちゃん、なんて、馴れ馴れしく呼ぶんじゃないねえ)

小村

「いえ、クラスメート、ただの友達です」

店長

「そう、良かった。私の健ちゃん穴は私のものだけよ」

(美優)

(この、ホモ 頭おかしいんとちゃうか?)

店長

▽店長 松子を見る

「こちらの方は」

松子

「わ、私ですか？」

吉賀

「僕の彼女です」

▽松子 顔が赤くなる

▽松子、美優 吉賀を見る

松子

「吉賀君たら いきなり何を言うの」

店長

「あ、そう。とっても、カワイイカップルね。がんばってね」

(店長)

(なに、この女 ビッチじゃないの)

松子

「はい、ありがとうございます」

社員

「社長、そろそろ二人 着替えに入ってもらわないと終わりませんよ」

松子

「社長？」

店長

「あら、知らなかった？ 私、ダイジル日本支社の社長をやらせてもらってるの」

吉賀

「店長、ダイジルって」

店長

「さっき、受付から、ダイジルって言う、うるさいハエが二匹飛んで行ったって連絡あったのよ」

▽松子 店長を睨みつける

▽美優 店長を睨みつける

（三人の間に火花がはしる）

▽店長 吉賀、小村の方を向く

店長

「さあ、お二人さん、撮影の続きよ。行きましょ。
今度も、私が 着せてあげるわ。ちゃんと いいチンポジに収めてあげないとね」

吉賀

「はい」

▽社長 吉賀と小村の間に入り、スタジオから出ていく

店長

「さあ、小村君、今度は、もっと股間を強調させてもらうわよ」

○スタジオ

▽美優 松子 スタジオを見回す。

美優

「なんだかんだ、スタジオなんだわ」

松子

「そうよ、スタジオよ」

（数分後）

○スタジオ

▽小村 吉賀が 競泳水着姿でスタジオに戻ってくる

▽美優 小村、吉賀の股間部分を見比べる

(美優)

(やっぱ、吉賀の方が おおきいのか)

▽松子 吉賀の股間を見る

(松子)

(吉賀君のあそこ、また触ってみたい)

○セットの中

カメラマン

「じゃ、撮影しようか」

▽小村 吉賀、セットの中に入る

カメラマン

「ちょっと、好きなポーズをやってみて」

▽吉賀 座ったり、手を後ろに組んだり、慣れた感じでポーズを決めていく

▽小村 吉賀のを見ながら 不慣れな感じでポーズをしていく

○セットから離れた場所

松子、美優が見ている

松子

美優

松子

カメラマン

(美優)

吉賀

小村

「さすが、吉賀君ね。慣れてるわ」

「だよな。まさにアイドルだよな」

「美優たら」

○セットの中

「ちょっと、二人抱き合ってくれない」

▽小村 戸惑っている

▽吉賀 小村を両手で抱きつく

(あのカメラマン なんちゅう、要求を出すんだ)

「小村君も、僕のように手を回して」

「こうか」

▽小村 吉賀に両腕を回し 抱きつく

カメラマン

▽吉賀 さらに力を込めて 抱きつく

「いいよ。いいよ。そのまま」

▽カメラマン 二人の股間の部分のアップ写真を取り出す

(美優)

(あの写真、欲しい)

カメラマン

「もっと、股間をくっつけたいな。もう少し、大きくしてくれる」

▽小村 戸惑う

カメラマン

「しょうがないな。メイク ちょっと、大きくしてあげて」

メイク係

「はい」

▽メイク係 小村の側にくる

メイク係

「ちょっと 失礼するわよ」

▽メイク係 小村の競泳パンツの中に手を入れて、陰茎を扱きだす

小村

「ちょっと、何するんですか」

カメラマン

「いいから、黙って 撮影に必要なことなんだから」

○セットの外

松子

「え、あの人、小村君になにしてるの」

(美優)

(いいなあ。公然とできるのね。私もメイク係になりたいわ)

○セットの中

▽メイク係 小村の競泳水着から手を出す

メイク係

「これくらいで、どうですか」

カメラマン

「もうちょっと、ほしいな。あと、上向きにしてくれ」

メイク係

「わかりました」

▽メイク係 小村の競泳水着の中に手を入れ、陰茎を上向きにする

小村

メイク係

小村

メイク係

カメラマン

▽メイク係 小村の競泳水着から手を出すと、競泳水着の上から、陰茎を扱きだ

「あ、あ、だめ、出そう」

「もう少し我慢して」

▽メイク係 扱き続ける

「や、やばい、射精する、する。うっ」

▽小村 腰を曲げ手で股間を押さえる

「すいません。中断です」

「もう一回休憩」

(数時間後)

□第三幕 帰り道

○（夕方）街中 帰り道

美優と小村、歩いている

大分前を 松子と吉賀が歩いている

美優

「今日は楽しかったわ」

（美優）

（遠かったけど 小村君のいくとこ見れて）

小村

「俺も、良い経験できたよ」

（美優）

（あんな、ところで いかされるって 良い経験だよ）

美優

「うんうん。小村君 かつこよかったわ」

小村

「そうかな」

（美優）

（競。パンのもっこりが、一番似合ってるわね）

○クリスマスソングが聞こえてくる

小村

「そういえば、もうすぐ クリスマスだね」

美優

「そうね」

小村

「夢前は、まだ、サンタクロース信じてたりして」

美優

「そうね、小五までは、信じてたわ」

小村

「おれ、小六」

美優

「ウソでしょ」

小村

「めっちゃマジ」

美優

「小村君で、純情だったんだ」

(美優)

(今でも、純情なんだよな)

小村

「なあ、夢前、クリスマスプレゼントもらうなら、何がいい？」

美優

「最新型のバイブ」

小村

「え？ バイブ？」

美優

（ヤバイ、無意識で、言っちゃった。どうしよう、どうしよう）
ちようど、その時、アクセサリショップの前を通っていた。
美優は、とっさに、ショーウィンドーの中を指を指す）

美優

「ちがう、ちがう、ピアス。パイプオルガンの形をした」

小村

「パイプオルガンのピアスって、すごいな」

（美優）

（なんとかセーフのようね）

小村

「ピアスって、耳の穴を空けるやつ？」

美優

「そう」

小村

「高校生が、そんなこと、しちゃダメだよ」

美優

「そう？ 智美なんか、いっぱいもってるって言ってるわよ」

小村

「だめだめ、体に 穴を開けるなんて、俺が許さないから」

美優

小村

「なんで、小村くんの、許しがいるの？」

「いや、それは・・・」

▽小村 吉賀、美優と小村が来るのを待っている

▽美優 小村、松子と吉賀のところに追いつく

松子

「美優達、歩くの遅いよ」

美優

「ごめん」

小村

「悪い」

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第六話

夢雄

美侶

サブタイトル 「バイトをはじめるよ」

あらすじ

小村は美優にクリスマスプレゼントをするためにバイトをはじめます
しかし、そんな短期で高額なバイトはあるのでしょうか？
イケメンの小村がバイトに選んだのは？

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D's

□ 第一幕 バイトをするぞ

○ (翌日の朝) 一年二組の教室 休憩時間

▽ 小村 自席に座っている

▽ 吉賀 小村の席にやってくる

「困った、困った」

「小村君、何を困ってるの」

「もうすぐ、クリスマスだろ」

「そうだね」

「夢前に、クリスマスプレゼントをげようと思って、さしげなくに聞いてみたんだ」

「そしたら？」

「なんて言ったと思う」

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

「そうだね。女の子だったら、マフラーとかかな」

小村

「マフラーだったら、いいよ」

吉賀

「違」

小村

「なんとピアスが、欲しいんだって」

吉賀

「へえ 意外、夢前さんに、そんな女らしさが、あったなんて。でも、それで何か問題なの？」

小村

「知ってるか？ピアスって、耳に穴 空けるんだよ」

吉賀

「それぐらい知ってるよ」

小村

「体に、穴を、空けるなんて、信じられない」

吉賀

「そうじゃないと、付けられないからね」

小村

「なんと、その穴に、細いものを入れる。おおー怖い」

吉賀

「女って、空いた穴に、棒を入れるのが好きな生き物なんだよ」

小村

「今、なんて」

吉賀

「ごめん、小村君には、難しかったね。
まあ、今時、ピアスなんかしてる子いっぱいいるよ」

小村

「そりゃ、大人になったらいけど、俺ら高校生だぜ」

吉賀

「小村君、古いよ。だって、ほら、僕だって」

▽吉賀 自分の耳たぶを小村に見せる

そこには 小さな穴が空いている

▽小村 吉賀の耳たぶをじっと見る

小村

「吉賀あお前ってやつは、大切な体になんてことしてるんだ」

吉賀

「何いつているの。今時の高校生ってピアスぐらいするよ」

小村

「知らなかった。黒い点があることは知ってたけど、ホクロだと思ってた」

▽小村 美優の方に走っていく。

○（同）美優の席

▽美優、松子、智美 やべっている

▽美優 小村が急いでやってくるのを見る

「小村君、どうしたの」

「な、な、吉賀って、ピアスしてるの知ってた」

「吉賀君のピアス、知ってるわよ。さすがに学校では見たことないけど、空いてるから、してるんだろなって」

「そんなの、入学式の時から知ってるわよね。美優も、知ってたでしょ」

▽美優 知らなかったけど知ってたふり

「ええ、もち、もちろんよ」

（うわっ、ホクロだと、思ってたよ）

（美優）

美優

智美

松子

小村

美優

小村

「ちつ、教えてくれよ」

智美

「別に、教える情報でもないわよ」

小村

「そっか、知らなかったのは、俺だけだったのか」

▽小村 吉賀のところに戻る

○（同）吉賀の席

小村

「夢前たちは、知ってたって」

吉賀

「大抵の人は気づくんじゃないかな」

小村

「え、俺が鈍感なのか」

吉賀

「そんなことより、小村君、何が、困ってたの？」

小村

「そうだった。夢前に、クリスマスプレゼントしたいんだよな。
で、さり気なく聞いてみたら、ピアスって言うんだ。
それで、調べてみたら、結婚、高いんだよな」

吉賀

「いま、持っている お金で買える物にすれば いいじゃん」

小村

「それじゃ、いいものが買えないんだよ。ガラス玉や、メッキなんて、嫌なんだよ。俺は、本物指向なんだよ」

吉賀

「小村君って、変なとこに こだわるよね」

小村

「それが、俺のいいところなのさ」

吉賀

「で、どうしようと思ってるの」

小村

「そうなんだよ。どうしたらいいか一緒に考えてくれよ」

吉賀

「手っ取り早く、バイトをすれば」

小村

「バイトか。そうだな、バイトでも探すか。でも、そんな簡単に見つかるかな」

吉賀

「今は、どこでも人手不足で、沢山あるはずだよ」

小村

「でも、バイトの給料って、もらえるの一ヶ月くらい先になるんだよね」

吉賀

「そうだよ」

小村

「じゃ、クリスマスまでに間に合わないかもしれないな」

吉賀

「それなら、僕と援交する？三万円払うけど どう？」

小村

「のし付けて断るよ」

吉賀

「うん、僕もイヤだな。お金目当てのセックスなんて、できないからね」

小村

「なんか、違うことになってない」

吉賀

「気にしない、気にしない」

○（翌日の朝） 一年二組の教室

▽小村 教室に入ってきて、吉賀を見つける

▽小村 吉賀の席にやってくる

小村

「吉賀あ。いいバイト見つかりそうだよ」

吉賀

「え？ もう？」

小村

「ほら、コレ見てみるよ」

▽小村 パソコンから印刷したと思われるものを吉賀に見せる

短期アルバイト募集

簡単なお仕事です。

日払い、日給 一万円 + 歩合

お仕事で疲れた、お客様に、マッサージをして癒やしてあげる、
ボランティア精神あふれるお仕事です。
マッサージ経験は、なくても大丈夫

お問合せ XXXX-XXXX-XXXXXX

小村

「どうだい？ いいだろ。これなら、一日だけで、十分じゃないかな」

吉賀

「これって怪しくない」

小村

「どこが 怪しいんだ」

吉賀

「どっちかと言うと 怪しさしかないんだけど」

小村

「取りあえず、昼休みに連絡だけしてみよう」

○（昼休み）学校の校舎の裏

▽小村 吉賀がいる

小村

「よし、かけてみるよ」

吉賀

「えっと、携帯の番号は、非通知でかけてね」

小村

「おっけー」

▽小村 スマートフォンを取りだし 電話をかける

小村

「はい。バイト募集を見て」

小村

「はい。面接ですか」

小村

「わかりました」

小村

「では、次の日曜日に」

吉賀

▽小村 電話を切る

「なんて」

小村

「面接が必要なんだって」

吉賀

「面接か。そりゃそうだよね」

小村

「俺、バイトなんてしたことないから、心配だよ」

吉賀

「ちょっと待って」

吉賀

▽吉賀 スマートフォンを取りだし電話をかける

「はい、そうです」

吉賀

「では、日曜日に」

吉賀

吉賀

吉賀

「はい。お伺いします」

「それでは」

▽吉賀 電話を切る

「僕も、一緒に行ってあげるよ」

Copyright@2026 D³S

□第二幕 バイトの面接

○（次の日曜日）バイト先があるとされるマンションの前

▽吉賀 小村 マンションの前で立っている

「ここだよな」

「そうみたいだよ」

「おれ、会社の様なところをイメージしてんだけど、ここって普通のマンションだよな」

「そうだね。僕は、なんとなく判ってたんだけどね」

「とりあえず、行ってみないことには 始まらないよな」

「そうだね」

○マンションの一階ロビー オートロックになっている

「押すぞ」

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

▽小村 インターフォンのボタンを押す

“ピンポーン”

(直ぐに)

▽インターフォンから若い男の声がする

「はい」

「バイトの募集で来た小村です」

「吉賀です」

「バイトの面接だね」

「はい」

「もう一人の子の顔が見えないな。カメラの側に寄ってくれる」

▽吉賀 インターフォンのカメラの前に立つ

男

「今、開けますね」

▽マンションの扉が開く

▽吉賀 小村 マンションに入っていく

▽吉賀 小村 マンションのエレベーターに乗る

○エレベーターの中

小村、吉賀が乗っている

「なんで、吉賀の確認をしたのかな」

「案外、顔を確認してたんじゃない」

「なんで、顔を」

「イケメンかどうか」

▽エレベーターが止まる

吉賀

小村

吉賀

小村

Copyright@2026 D's

男

小村

男

男

▽小村、吉賀 エレベーターから降りる

○（同） 指定された部屋の前

▽小村 扉をノックする

扉が開く中から若い男が出てくる

「いらっしゃい。さあ、どうぞ」

「おじやまします」

▽小村 吉賀 男について、マンションの部屋に入っていく

○マンションの一室

2LDKのマンションで、テーブルとソファがある

「さあ 座って」

▽小村 吉賀 ソファに座る

「どちらが 小村君で、吉賀君」

▽小村 手を少し上げる

「あ、僕が小村です」

「背が高い方が小村君だね。じゃ、そっちが吉賀君ね」

「はい」

「小村君は、イケメンでスタイルがいいね。吉賀君は、童顔でカワイイよ
どっちも、採用だよ」

「え、アルバイトさせてもらえるんですか」

「ああ、君らのような子は、お客様も大喜びだよ」

「そういえば、仕事の内容って」

「そうだった。二人があんまりイケメンだから、忘れてたよ。
まずは、簡単に仕事内容を説明するね」

「サラリーマンの方が、お仕事で疲れた体を癒やに、ここに来られます。
君たちは、その方達を優しく癒やしてあげる仕事をしてもらいます」

小村

「癒やすってどうすんですか」

男

「一番簡単なのは、話を聞いてあげること。次にマッサージをしてあげるんだ」

小村

「僕ら、マッサージ経験ないんですけど」

男

「心配なくていいよ。この後 教えてあげるから。それに、マッサージを希望してくる人は、マッサージを目的としてない」

小村

「マッサージをしにきて、マッサージじゃないとは」

男

「まあ。その時が来ればわかるよ」

小村

「大丈夫ですか」

吉賀

「心配ばかりしていてもしょうがないよ」

男

「バイト料のことだけど、お客様一人つき、一万円

小村

「一万円か。じゃ、僕、二万円あればいいんです」

男

「それだけでいいの。じゃ、一日で稼げちゃうね」

小村

「やった。でも、失敗したりしないですか」

男

「大丈夫、大丈夫。お客様の言う通りにしていればいいよ。それに」

小村

「それに」

男

「お客様を喜ばせてあげると、お小遣いをくれるかもしれないよ」

小村

「バイト代までもらえて、お小遣いももらえるんですか」

男

「そうそう。良いバイトでしょ」

吉賀

「危険はないんですか」

男

「そうだよね。危険の心配するよね。でも、心配はない。危険を感じたら、部屋に備え付けのインターフォンを使って俺に連絡してくれる。

それでもインターフォンができない状態のときは、

部屋にカメラがあって俺が監視しているから安心して。

君たちの危険を察知したら、すぐに助けにいくから」

吉賀

「じゃ、僕たちはずっと監視されているんですね」

男

「監視っていうと悪い言い方だけど、君たちの安全を考えてだからね」

吉賀

「そうなんですネ」

男

「じゃ、早速だけど、今日からしてみるかい」

小村

「今日からですか」

男

「そう。二万円稼げたらいいんですよ。じゃ、今日で終わらせちゃいなよ」

小村

「吉賀、どうする」

吉賀

「小村君に任せるよ」

小村

「何も、準備してないしな」

男

「大丈夫。まだ、十時でしょ。二時間ほどレクチャーしてあげるから、午後からお客さんの相手してくれば、夕方には終わるよ
それに、昼間のお客さんの方が、いろいろと安全なんだよ」

小村

「やっぱり危険ってことですか」

男

「ごめん、ごめん。夜だと、たまに酔っ払ってる人がくるの。そういった人は、常識が通じない時があるんだよ」

小村

「そうなんですネ。じゃ、せっかく来たんだし、じゃ、今日だけということデ」

男

「うんうん。時間は大切にしなくちゃ」

▽男 吉賀の方を向く

男

「君は どうする」

吉賀

「もちろん、僕も、小村君につきあうよ」

男

「よし。じゃ、決まり。そしたら、今から マッサージの練習をしようか」

小村

「はい。よろしくお願いします。」

男

「じゃ、隣が実施部屋になってるから、こっちにきて」

▽男 立ち上がり、隣のへやに続くふすまを開ける

○（隣の部屋）マッサージの練習場

洋室になっており、真ん中にマットが敷いてある
角に冷蔵庫と、タンスが置いてある

▽男 部屋に入り、二人を招く

▽小村 吉賀 部屋に

男

「ちよつと部屋の造りは違うけど、キッチンに冷蔵庫があるから、
そこから飲み物を出してあげてくれる。

それと、タンスがあるので、ユニフォームが入れてあるよ。

ユニフォームは、お客様が指定されたものを着てくれたらいいよ
何も言われなかったら、Ｔシャツと短パンね」

小村

「ユニフォームって、そんなに種類があるんですか」

男

「そうだね。お客様の要求を答えているうちに増えていったんだよ。
中には、お客様が持ち込んで、くることもあるから、その場合は、
できるだけ それを着てあげてね」

小村

「はい。わかりました」

男

「取りあえず、ユニフォームに着替えようか。ダンスを開けてもらん」

▽小村 タンスの引き出しを開ける

綺麗に整頓された、体育会系のユニフォームが入っている

男

「そうだね。何を着てもらおうか。小村君は、部活は何やってるの」

小村

「僕も、吉賀もバスケットボールです」

男

「バスケか。ちょっと人気ないかな。取りあえず、今日は、競パンでいこうか」

小村

「競パンってなんですか」

男

「競泳用の水着のことを競パンって言うんだよ」

小村

「そっか、わかりました」

男

「じゃ、着替えてくれる」

▽小村 タンスの中から、競パンを二枚探しだし、一枚を吉賀に渡す

▽吉賀 小村から 競パンを受けとる

▽小村 吉賀 上に着ているものを脱ぐ

▽男 小村の上半身を見る

男 「小村君は、めっちゃくちゃ良い体してるね。あ、吉賀くんだって、いい体だよ」

▽小村 吉賀 ズボンを脱ぎ、パンツを脱いで、競パンを穿く

小村 「これでいいですか」

▽男 二人の姿を見る

男 「吉賀君は、大きいね」

吉賀 「結構、言われますね」

男 「そりゃいいや。二人とも、人気者になるよ」

小村 「でも、今日だけですから」

男

「そっか。まあ、風呂場に行こうか」

小村

「風呂場ですか」

男

「そう、まずは、お客様の体をシャワーで洗ってあげるんだよ」

小村

「なるほど」

▽男、小村 吉賀 風呂場に行く

男

「じゃ、二人で中に入って、洗いあつてみてくれる。そこにある、スポンジ、石鹸、シャンプーは自由に使っていいよ」

小村

「はい」

▽小村 吉賀 中に入る

男は、脱衣場の場所で、二人を見ている

男

「そうそう、浴槽の中に入ってね。でないと掃除が大変だから」

小村

「わかりました」

小村

吉賀

吉賀

小村

男

小村

吉賀

▽小村が先に浴槽に入り、吉賀が続く

「じゃ、俺が吉賀を洗うね」

「うん。お願いする」

▽小村 シャワーを出す

「冷たい」

▽小村 シャワーをさっと 吉賀から避ける

「ごめんごめん」

「まずは、温度を確かめてくれるかい」

▽小村 シャワーの温度を調整する

「これで どうだい」

「うん。ちょうどいいよ」

男

「まずは、背中から」

▽吉賀 小村に背中を向ける

▽小村 吉賀にシャワを浴びせる

「そろそろ体を洗ってあげてくれるかい」

小村

「はい」

▽小村 スポンジをとり、ボディソープを付ける

▽小村 吉賀の背中をスポンジで洗う

「やさしく、やさしくだよ。良い感じ」

「背中が終わったら前ね。上から始めて、足下まで」

小村

「吉賀、今度は、前」

吉賀

「うん」

吉賀

男

吉賀

男

吉賀

男

▽吉賀 小村の方を向く

▽小村 吉賀の胸のあたりからスポンジで擦る

「あ、くすぐったい」

「下半身は、念入りに」

▽小村 吉賀の競泳水着の上からスポンジを当てて擦る

吉賀の競泳水着が石鹼の泡まみれになる

「あう」

「どうした、吉賀君」

「いえ、なんにも」

「じゃ、石鹼を流して終わりかな」

▽小村 吉賀についた石鹼をシャワーで流した

(数分経過)

○某マンションの部屋

▽吉賀、小村 男が 洋室にいる

▽吉賀 小村は、バスタオルで、身体、競泳水着を拭いている

「大体わかったかな」

「はい」

「じゃ、次は、マッサージをしてみようか。今度は、吉賀君から」

「はい」

「じゃ、小村君はパンツを脱いで、マットの上に寝てくれるかい」

「全裸なんですか」

「そうだね。だいたい全裸になるかな。全裸が恥ずかしい人がいたら、この引き出しに紙パンツが入っているから出してあげてくれるかな」

男

▽男 引き出しから紙パンツを取り出して見せる

「じゃ、はじめようか。まずは、うつ伏せは適当でいから、仰向けで寝てくれるかな」

小村

「いくら、友だちでも全裸は恥ずかしいです」

男

「そうだね。全裸になるのは、お客様だから 競パンのままでいいよ」

▽小村 マットの上に仰向け寝る

男

「小村君、こうして見ても、やっぱりかっこいいよ」

小村

「そうですか」

男

「うんうん。僕が マッサージしてあげたいよ
じゃ、吉賀くん、はじめようか。」

まずは、吉賀君が思う、マッサージをやってみて。それで直してほしいところを
言うよ」

吉賀

「はい じゃ、小村君 するね」

小村

「よろしく」

▽吉賀 小村の横に座る

▽吉賀 オイルの瓶から そのまま小村の胸に 勢いよくかける

「おお、大胆でいいね」

▽吉賀 小村の胸の上に散ったオイルを、手でまんべなく伸ばす

「吉賀君、そんなのどうやって覚えたの」

「動画です」

「最近の動画は すごいな」

▽吉賀 小村の下腹部をマッサージをする

▽小村 小村の穿いている競泳水着の前が膨らみはじめる

「小村君、気持ちいいのかい」

男

男

吉賀

男

男

小村

「まあ」

▽小村 恥ずかしそうに、競泳水着を手で隠す

吉賀

「だめだよ。手をどけなきゃ」

▽吉賀 小村の手を退ける

▽小村 競泳水着のウエストバンドの部分から、小村の陰茎の先の割れ目の部分が見えている

吉賀

「小村君、めっちゃ起ってるね」

小村

「しょうがないだろ」

「いいよ。いいよ。気持ちいい証拠だから」

男

「じゃ、吉賀君、カチカチになった物を、ほぐしてあげてよ」

吉賀

「そうですね」

▽吉賀 小村の競泳水着の上に、オイルをビシヨビシヨに垂らす

「何すんの」

吉賀

「今、言った通り、柔らかくしてあげるよ」

▽吉賀 小村の競泳水着の上から くつきりを盛り上がった陰茎を擦り出す

小村

「ちょ、ちょっと」

男

「小村君、吉賀君の練習の邪魔をしないで」

▽吉賀 競泳水着の上から、小村の陰茎を握り扱う

小村

「あ、あ、や、やばいって」

▽吉賀 少し力を入れ 激しく扱きだす

小村

「やばい、やばいって、うう」

▽小村 吉賀の扱くりズムに合わせて、腰が上下する

男

「いいよ、いいよ。このまま いかせてあげて」

小村

▽吉賀 小村の胸に近づけ、乳首を舌でつつき舐め回す

「あ、あ、だめ いく うっ」

▽小村 競泳水着のウエストバンドから少しはみ出していた、先の割れ目から
大量の精液が 小村の腹筋の上に飛び散った

男

「いいよいいよ。吉賀君、最高だね。次は、小村君の番だね」

男

小村

吉賀

小村

○（数時間後）マンションの一室 待機場

昼過ぎなので、待機場には 小村と吉賀しかない

▽吉賀、小村 ソファーに座っている

←# インサート #←

「お客が来たら、そのインターフォンで、何号室か、言うから、
ここの鍵を持って、部屋でお客が、来るのをまつんだよ」

→# インサート #→

▽小村 吉賀 待機部屋のソファーに座っている

「なあ、吉賀、ドキドキするな」

「そうだね。初めてのお客さんで どんな人なんだろう」

「俺、ちゃんと、出きるか心配になってきた」

吉賀

「大丈夫だって」

○インターフォンが鳴る

“プルプル”

吉賀

「はい」

店員

「お客さんがいらっしゃった。吉賀君、518号室へ行って」

吉賀

「分かりました」

▽吉賀 インターフォンを切る

吉賀

「じゃ、行ってくるね」

小村

「気をつけて。危なかったら、人を呼ぶんだよ」

吉賀

「大丈夫だって」

□第四幕 # おっちゃん V S 吉賀 #

○エレベーターの中

吉賀が乗っている

○マンションの通路

吉賀が歩いている

○指定された部屋の前

▽吉賀 鍵を使いドアを開けて中に入る

灯りや、エアコンが付いている

(数分後)

○ドアのチャイムが鳴る

▽吉賀 インターフォンの画像を見る

小太りの中年の男性が映っている

▽吉賀 ドアを開け玄関に向かう

中年男性

吉賀

中年男性

吉賀

中年男性

吉賀

中年男性

▽吉賀 ドアを開ける

小太りの中年のおっちゃんが立っている

「カメラで見るより、ずっとカワイイね」

「どうぞ、入ってください」

▽吉賀 中年男性を中に招き入れる

「新人さんなんだね」

「はい。今日からなんです。でも、今日だけかも」

「え、残念だな。次も指名しようと思ったのに」

「あ、座ってください。ウーロン茶でいいですか」

「ありがとう」

▽中年男性 ソファーに座る

▽吉賀 キッチンへ行き、冷蔵庫からペットボトルのウーロン茶を取り出す

中年男性

▽吉賀 ペットボトルを中年男性の前に置く

「ありがとうございます。君も、ここに座りなよ」

▽中年男性 ソファをポンとたたき、吉賀に横に座るよう促す

▽吉賀 中年男性の横に座る

中年男性

「まじで、かわいいね。何歳」

吉賀

「個人情報教えてはダメな規則なんです」

中年男性

「そうだった。そうだった」

▽中年男性 吉賀のジーンズの上から太股をさすりだす

中年男性

「めっちゃ、タイプ」

吉賀

「ありがとうございます」

▽中年男性 ジーンズの上から吉賀の股間を揉み出す

吉賀

「だめですよ」

中年男性

「いいじゃないか」

吉賀

「だめですって」

中年男性

「おっちゃん、ズボンを脱がせてあげる」

▽中年男性 吉賀のベルトに手をかける

吉賀

「いえ、ダメですって」

中年男性

「おっちゃん、若い子の服を脱がすときが、興奮するんだよ。な、ちょっとだけ」

▽中年男性 吉賀のベルトをゆるめ、ジーンズのファスナーを下げる

▽中年男性 吉賀の股間を揉みだす

中年男性

「ほら、固くなってきた」

吉賀

「だめですよ」

中年男性

▽中年男性　しばらく吉賀の股間を揉んでいる

「じゃ、ここからは　後のお楽しみってことで、シャワーに行こうか」

▽中年男性　立ち上がり、服を脱ぎ出す

▽吉賀　立ち上がり、ハンガーを取ってくる

吉賀

「これに服をお掛けください」

中年男性

「ありがとう。早く　君も脱ぎなよ」

▽中年男性　全裸になっている

▽吉賀　服を脱ぎ出す

▽中年男性　吉賀の着替えを見ている

▽吉賀　シャツを脱ぎ上半身裸に

中年男子

「綺麗な身体だね。しゃぶりたいよ」

吉賀

中年男性

吉賀

中年男性

吉賀

中年男性

吉賀

▽吉賀 パンツを脱いで全裸になる

▽中年男性 吉賀の背後から抱きつく

「お客様、やめてください」

「君も、こっちの人なんだろ」

▽中年男性 吉賀の股間を揉み出す

「だめですって」

「ほらほら、固くなってる」

「揉むからですよ」

「ここで、一回出しちゃおうか」

「ダメです」

▽中年男性 背後から吉賀に抱きついたまま、手を吉賀の前に回し吉賀の陰茎を

扱
く

吉
賀

「あ、あ、だ だめ」

▽吉賀 足が震えている

中
年
男
性

「ほら、若いんだから、ぶっ放しなよ」

吉
賀

「あう」

▽吉賀 射精してしまう

中
年
男
性

▽中年男性 吉賀の陰茎をゆっくりとしごき、残っている精液が床に落ちる

「早かったね。さあ、シャワーに行こう」

▽中年男性 シャワー室に行く

▽吉賀 床に落ちた精液をティッシュで拭く

▽吉賀 競泳水着を履き、シャワー室へ

中年男性

○シャワー室

中年男性がシャワーを浴びている

「ほら、君もシャワーを浴びて

▽吉賀 浴槽の中に入る

▽中年男性 吉賀にシャワーを当てる

中年男性

「競パン姿も、カワイイね」

○マンションの一室

中年男性が全裸でマットの上にうつ伏せで寝ている

中年男性

「じゃ、そろそろ初めてもらおうかな」

吉賀

「じゃ、いきますね」

▽吉賀 中年男性の太ももに座り、背中に、オイルを垂らす

▽吉賀 両手でオイルを伸ばしマッサージを始める

中年男性

▽吉賀 中年男性の背中を両手の平を使い、マッサージ
「はあ、気持ちいいね」

吉賀

「ありがとうございます」

吉賀

「お客さんは、ここによく来てるんですか」

中年男性

「ああ、毎週来てるよ。ここは、いいよ。仕事の疲れが、一発でとれるから」

吉賀

「そうなんですか」

中年男性

「それにね」

▽中年男性 手を後ろの廻し、吉賀の太ももをさする

中年男性

「こうやって、若い男の子を触っていると、心が休まるんだ」

吉賀

「そうなんですが」

▽中年男性 吉賀の太股と擦っている

中年男性

「全然、毛が無いね。剃ってるの」

吉賀

「いいえ、永久脱毛しました」

中年男性

「最近の若い子は、おしゃれだね」

吉賀

「そうかも。でも、僕は、お客さんみたいに、自然な人も好きですよ」

中年男性

「そうなんだ」

▽中年男性 吉賀の競泳水着の中に指を入れ、玉袋を指先で触る

中年男性

「でも、ここは、めっちゃ生えてるね」

吉賀

「そうですね。結構、剛毛って言われます」

中年男性

「うんうん。固そうだ」

▽中年男性 競泳水着の上から吉賀の股間を揉み出す

中年男性

「結構、大きいね。もう起ってるの」

吉賀

「いいえ、まだですよ」

中年男性

「そうなの。じゃ、どこまで大きくなるかな」

吉賀

「さあ」

▽吉賀 中年男性の背中をマッサージをしている

▽中年男性 吉賀の股間を揉んでいる

中年男性

「君って、男もいけるの」

吉賀

「いえ、違いますけど」

中年男性

「そっかな？ ノンケさんなら、こんなにならないと思うけどね。
才能有るんじゃない？」

吉賀

「そんなことないです」

中年男性

「男の経験はあるの」

吉賀

「ないですね」

中年男性

「おっちゃんが 教えてあげようか」

吉賀

「今日は、仕事なので、またの機会に」

中年男性

「かわすの うまいね」

吉賀

▽吉賀 マッサージの手を止め、中年男性の太股から離れる

「背中おわりましたんで、表向きになってください」

中年男性

「よいしょっと」

▽中年男性 重い体を、ぐるっと転がし、上向きになる

吉賀

「顔にタオルをかけますか」

中年男性

「いや、君のカワイイ顔を見たいからいいよ」

▽吉賀 中年男性の太股に座る

吉賀

「じゃ、はじめますね」

▽吉賀 中年男性の胸、腹の上に、オイルを垂らす

▽吉賀 中年男性の胸の上からマッサージを始める

▽中年男性 手を伸ばし、競泳水着の上から吉賀の股間を揉み出す

吉賀

「お客さん、好きなんですネ」

中年男性

「ああ、特に君のは」

吉賀

「それはありがとうございます」

▽吉賀 陰茎が勃起している

競泳水着のウエスト部分から、亀頭が少しはみ出している

中年男性

「おおきいね。窮屈そうだ」

吉賀

「最近の高校生は、こんなもんですよ」

中年男性

「この前、ネットで知り合った子は、小さくて、反ってたな。君みたいな、真っ直ぐで太いのは見たことないよ」

吉賀

「お客さんの也大きいですね」

中年男性

「そうかな」

▽吉賀 中年男性の陰茎を握り、優しく扱く

吉賀

「そろそろ出しましょうか」

中年男性

「ずいぶん、積極的だね」

吉賀

「僕は、もう出しましたから」

中年男性

「俺はもういいんだよ。今度は、俺がマッサージをしてあげよう」

吉賀

「え」

中年男性

「いいから、今度は、君がここに寝てくれるかい」

▽中年男性 上半身を起こそうとする

▽吉賀 中年男性の上から降り、横に移動

▽中年男性 上半身を起こす

「さあ、ここに寝て」

「そう言われても」

「ここは俺たちのような者を癒やす場所なんだろう。俺が君をマッサージすること、俺も癒やされるんだよ」

「わかりました。じゃ、お言葉に甘えて」

▽吉賀 うつぶせでマットの上に寝転ぶ

「仰向けで寝てくれるかな」

▽吉賀 仰向けになる

▽中年男性 吉賀の身体をじっとみる

中年男性

吉賀

中年男性

吉賀

中年男性

中年男性

「ほんと、綺麗な身体だ」

▽中年男性 オイルの入った入れ物を持ち、吉賀の胸から、股間に垂らしだす

▽中年男性 指先で吉賀の乳首を刺激する

吉賀

「あん、あん」

中年男性

「感じやすいんだね」

▽中年男性 吉賀の競泳水着の上から、もっこりした股間を揉み出す

中年男性

「もう、固くなってるやないか。やらしいな」

▽中年男性 競泳水着のもっこりした部分を、指で掴み扱きだす

吉賀

「あ、あ、あう」

▽吉賀 腰が上下に動く

中年男性

「腰の動きが やらしいの」

中年男性

▽中年男性 吉賀の競泳水着の上から、もっこりした部分にかみつく

「うーん。美味しいな」

▽中年男性 吉賀の競泳水着の上を舌で舐め回る

▽中年男性 吉賀のヘソ、乳首を舌で舐め回す

▽中年男性 手は、ずっと吉賀の股間を扱っている

中年男性

「びんびんや。そろそろ、揉ませてもらうで」

▽中年男性 吉賀の競泳水着をゆつくりと脱がす

吉賀のビンビンになった、陰茎が飛び出してくる

中年男性

「でかいね」

▽中年男性 吉賀のビンビン陰茎を弾いて遊び出す

中年男性

「こんなになって、どうしてほしい」

中年男性

▽中年男性 吉賀の陰茎をギュッと握る

「どうして ほしい」

吉賀

「いかせて ください」

中年男性

「うんうん。百点満点」

▽中年男性 吉賀の陰茎を口で咥えて扱きだす

▽吉賀 腰をふっている

吉賀

「や、やばい。いきそう」

▽中年男性 吉賀の亀頭の割れ目を高速に舌で舐める

吉賀

「あ、いく、いく・・・うっう」

▽中年男性 吉賀の陰茎を口に含む

▽吉賀 腹が大きく波打つ

吉賀

▽中年男性 吸い込んでいる

「あっ、あっ、あっ」

吉賀

▽吉賀 動きが止まる

「うっ」

中年男性

▽中年男性 吉賀の陰茎から口を離し、上半身を起こす

「ミルク、もっと欲しい」

中年男性

▽吉賀 方針状態

ビンビンだった陰茎は、萎んでいた

「ミルク、ミルク」

吉賀

「もう、無理ですよ」

▽中年男性 吉賀の上に覆い被さり、吉賀の乳首を舐め始める

吉賀

「あつ、あつ」

▽中年男性 吉賀の股間を握り、抜き始める

中年男性

「ほら、もう元気なってきた」

▽中年男性 抜く速度を速める

(クチャクチャクチャ)

中年男性

「こんなに我慢汁出して、君もそうとうエロいね」

吉賀

「あ、ああ・・また、いく・・いく・・」

▽吉賀 亀頭の前から精液が、ドロつと流れる

▽中年男性 吉賀の陰茎を咥える

▽中年男性 頭を振りながら陰茎を吸い込む

吉賀

「あ、あ、い、痛いです」

吉賀

▽中年男性 亀頭の割れ目を下で舐める

「い、痛いです」

▽中年男性 吉賀のへそ、腹、乳首を舐めていく

▽中年男性 吉賀の口にキスをしよとする

▽吉賀 顔を背ける

中年男性

「おっちゃんとキスは無理だよね」

▽中年男性 吉賀の横に寝転ぶ

手は、吉賀の陰茎を握っている

中年男性

「いっぱい でたね。おいしかった」

▽中年男性 立ち上がり、シャワーを浴びに行った

○待機所

小村 吉賀がソファーに座り話をしている

「え？ まじで、射精させられたの」

「うん。びっくりしたよ」

「え？ どうしよう」

▽小村 インターフォンを押し、男と話をする

「あおの」

「どうしたの」

「俺ら、射精させられる って聞いてないんですけど」

「ああ、それは客によるよ。さっきのケースはまれさ。

もし、嫌だったら、嫌って言えばいいよ。それでも断れないなら、
部屋のインターフォンで、俺を呼んでくれるかい」

「わかりました」

小村

男

小村

男

小村

小村

吉賀

小村

男

「それに、一回いくことで、千円バイト代上乘せになるんだよ。こんなに割のいいバイトは他にないけどな」

小村

「そうなんですか。一回千円って、すごいな。俺十回くらい射精してもいいや」

(吉賀)

(さすがに十回は無理でしょ)

男

「まあ、気にしない気にしない」

小村

「今日だけだし、イカされるだけなら、まあいいか」

(吉賀)

(いや、だから・・・)

(数分後)

▽インターフォンが鳴る

▽小村 インターフォンに出る

「お客さんだけど、どっちが行ける」

男

小村

「俺が行きます」

男

「じゃ 204号室で待機してくれる」

小村

「わかりました」

▽小村 インターフォンを置く

吉賀

「お客さん来たの？」

小村

「よし、いよいよ、俺の出番だ」

吉賀

「気をつけてね」

小村

「大丈夫。俺が終わったら、帰ろうぜ」

吉賀

「そうだね。そうしよう」

▽小村 鍵を持って、出て行く

Copyright@2026 D's

□第五幕

青年（古屋） V S 小村

○マンションの通路

▽小村 204号室に向かって歩いている

「ああは言った物の心配だな」

○204号室の前

▽小村 204号室の扉を開ける

小村

「失礼します」

▽小村 部屋に入る

バリ風の家具が かざられ、ちよつとしたリゾートの雰囲気

（まもなく）

(インターフォンが鳴る)

▽小村 扉を開ける

▽青年(古屋)が立っている

イケメンのスーツで、スラリとした若い青年

「こんにちは」

「こ、こんにちは」

▽古屋 小村の全身をみる

「俺 好みでよかった」

「中に入ってください」

▽小村 古屋を中に入れる

▽小村 ドアのロックをかけて、部屋に入る

「どうぞ、座ってください」

小村

小村

古屋

小村

古屋

Copyright©2020 D's

古屋

「ああ、ありがとう」

▽古屋 ソファーに座る

小村

「飲み物は何がいいですか」

古屋

「ミネラルウォーターをもらおうか」

▽小村 キッチンの冷蔵庫から、ペットボトルのミネラルウォーターを取り

古屋のテーブルの上に置く

小村

「どうぞ」

古屋

「ありがとう」

古屋

「若い子が出てきた驚いたよ」

小村

「僕もです。こんなカッコイイ人が来るなんて」

古屋

「かっこいいか。ありがとう」

小村

古屋

小村

古屋

小村

▽古屋 ペットボトルの蓋を開け、ミネラルウォーターを一口飲む

「まずは、シャワーで、身体を洗いますので、服を脱いでいただけますか」

「ああ、分かった」

▽古屋 ジャケットを脱ぐ

「ジャケットは、こちらに」

▽小村 手を出す

▽古屋 ジャケットを小村に渡す

▽小村 ハンガーにジャケットを通し、ハンガーラックにかける

▽古屋 カッターシャツを脱ぐ

筋肉質の綺麗な身体だ

「どうした、君も脱がないのか」

「あ、すみません。」

古屋

小村

古屋

小村

古屋

小村

古屋

▽小村 トレーナーを脱ぎ、スエットを脱ぐ
スエットの下は競泳水着を履いている

「いいからだしているね」

「俺がですか」

「ああ、今までであった中でも最高だ」

「そんなこと言われると照れますよ」

▽古屋 スラックスを脱ぎ、パンツを脱ぐ

「じゃ、シャワーに行こうか」

「はい」

▽小村 古屋の体に石鹸をつけ洗う

「君はいくつだい」

小村

古屋

小村

「十八歳です」

※本当は16歳 店の男に18才というように言われてる

「そうか、大学生か。若く見られるだろ」

「そ、そうですね」

▽小村 古屋の体にシャワーをかけ石鹸を流す

▽小村 バスタブから出て、棚からバスタオルを取り、古屋に渡す

▽古屋 バスタブから出て、バスタオルを受け取り、体を拭き始める

▽古屋 ある程度、体を拭くと、バスルームから出ていく

▽小村 バスタオルで体を拭く

○部屋

腰にバスタオルを巻いた古屋が、ソファアに座っている

▽小村 競泳水着 だけ穿いた姿で部屋に戻ってくる

古屋

小村

古屋

小村

古屋

古屋

▽古屋 小村の競泳水着の膨らみを見る

「かっこいいね」

「では、マットの上にうつ伏せで寝ていただけますか」

「ああ」

▽古屋 腰に巻いているバスタオルを取り マットうつ伏せで寝る

▽小村 古屋の脇腹の横に膝を立てて座る

▽小村 オイルの瓶を手に取り、もう片方の手の平にオイルを垂らす

「では、はじめます」

「よろしく」

▽小村 古屋の背中を優しくマッサージする

「君は、いつから始めたの」

小村

「今日からです」

古屋

「今日からか」

小村

「でも、今日で終わりです」

古屋

「今日で？」

小村

「はい。彼女にクリスマスプレゼントを買ってあげたくて、一日だけのバイトなんです」

古屋

「そっか。おしいな。また次もお願いしたかったのに」

小村

「すいません」

古屋

「君が謝ることではないよ。今日、君に会えて、ラッキーだと思うよ」

小村

「はい。僕も。最初で、最後のお客さんが、こんなにカッコいい人でラッキーでした」

古屋

「そっか。それはよかった」

小村

「はい」

▽小村 マッサージを続けている

小村

「背中終わりましたので、仰向けになってもらえますか」

古屋

「ああ。あんまり気持ちいいから、寝かけていたよ」

▽古屋 体を少し起こし、回転させ表向きになる

古屋の股間が見えてしまう

小村

「タオルをおかけしましょうか」

古屋

「別にかまわないが、君に任せるよ」

▽小村 古屋の股間が隠れるように、タオルをかける

小村

「本当にカッコイイ身体ですね。憧れますよ」

古屋

「そんなに、誉めてもらってもバイト代は出ないよ」

▽小村 古屋の胸にオイル垂らす

古屋

▽小村 古屋の胸をマッサージしはじめる

「マッサージ上手だね」

小村

「そうですか」

古屋

「ああ、おかげで、ここが こんなになったよ」

小村

▽古屋 少し顔を上げ、股間にかけてタオルが突き上がっているのを見る

「ほんとうだ」

古屋

「君は、どうなんだい」

小村

▽古屋 競泳水着の上から、小村の股間を揉み出す

「お客さん、ダメですよ」

古屋

「あれ、君も起ってきてるじゃないか」

小村

「揉まれると誰だって、起ちますよ」

古屋

小村

古屋

小村

古屋

小村

古屋

「ちょっと見せてもらってもいいか」

「ええ」

▽古屋 上半身を起こす

▽小村 膝を立てて古屋の前に座っている

▽古屋 小村の競泳水着を下にずらす

小村の陰茎が飛び出す

「大きいね」

「どうして、大きいといいんですか。僕はわからないです」

「ははは 男は大きいと言われると嬉しいものなんだよ」

「そうなんですネ。僕の友達は、めちやくちやデカイですよ。それに剥けているんです」

「そうなの？ 一度、見てみたいな」

小村

古屋

「今は、待機室で僕の帰りを待ってるんですよね」

「それなら」

▽古屋 立ち上がりインターフォンの前に

▽古屋 インターフォンのボタンを押す

○待機部屋

着替えが終わり、帰るのを待っている吉賀がソファに座っている

▽インターフォンが鳴る

▽吉賀 インターフォンを取る

○小村と古屋の部屋

古屋が腰にタオルを巻き、ソファに座っている

（ドアのチャイムが鳴る）

▽小村 競泳水着だけの姿でドアを開ける
ドアを開けると 吉賀がたっている

吉賀

「小村君、どうかしたの」

小村

「吉賀こそ」

吉賀

「僕は、小村君の居るところに行くようになって言われて、何かあったのか心配して慌ててきたよ」

▽古屋 部屋の奥から、玄関の二人に声をかける

古屋

「俺が呼んだんだ」

小村

「取りあえず、入って」

▽吉賀 部屋の中に入っていく

部屋に入ると、ソファーに座っている古屋がいる

古屋

「はじめまして、君が吉賀君。ヨロシクね」

吉賀

「はい、よろしくです」

▽吉賀 小村の方に向く

吉賀

「何が、どうなってるの」

小村

「僕にもわからないよ」

古屋

「君のアソコが、立派って言うから、どんな子か、会ってみたくて呼んだんだ」

吉賀

「そうなんですネ。でも、僕は仕事が終わりましたので」

古屋

「そうなんだ」

▽古屋 立ち上がり叫ぶ

古屋

「おい、店員 どうする」

▽男 インターフォンを通して

男

「おい、お客さんに失礼だぞ。まだ仕事しろ」

吉賀

男

小村

吉賀

男

古屋

吉賀

古屋

「僕は、仕事終わりですよ」

「わかった。じゃ、君らのバイト代は払わない。お客様を怒らせたんだからな」

「そんな」

「わかりました。やりますよ、やりますよ」

「最初から、そう言えばいいんだよ」

（インターフォンが切れる）

「話はで終わったようだね」

「そうですね。じゃ、ちよつと着替えます」

▽吉賀 上着、シャツを脱ぎ上半身は裸になる

「なんて綺麗な身体なんだ。透き通ってるようだ」

▽吉賀 ジーンズを脱ぐ

高校のランパン姿になる

▽古屋 吉賀のランパン姿を見る

「君らは、姫磨工業高校の生徒か？」

「そうですけど」

「大学生じゃないのか」

「はい」

「なんてことだ。未成年じゃないか。いくら俺でも未成年とはできないな」

「すいません。店の人に、大学生だって言うように言われてたんです」

「そっか。でも、俺がしなければいいんだし。君たちで、セックスしてるところを見せてくれよ」

「せ、セックスって」

「何を驚いているんだ。ここは そういう場所だぞ」

古屋 吉賀 古屋 小村 古屋 吉賀 古屋 吉賀 古屋 小村 古屋 小村 古屋

小村

「まじか」

古屋

「そういう場所とは知らなかったのか」

小村

「ええ、ただのマッサージする場所だと」

古屋

「そっか。それは困ったな。すでに大金を払ったんだからな。どうしたものか」

吉賀

「セックスは無理ですけど、僕が、小村くんをいかせるのは、どうですか？」

古屋

「なるほど。でも、それだと君がいくところ見たい俺がなっとくできない」

吉賀

「じゃ、あなたは僕をいかせてください」

古屋

「よし、それで手をうつとう」

小村

「よ、吉賀」

吉賀

「そういうこと。しょうがないよ。小村君 かくこして」

小村

「ちよ、ちょっと待ってよ」

吉賀

「何をいまさら。小村君、僕になんかもちがうかされるでしょ」

小村

「そりゃそうだけど」

古屋

「君たちは、そんな関係だったのか」

小村

「ち、違います。なりゆきで そんなことがあっただけです」

古屋

「まあ。いいか」

吉賀

「小村君、さっさと済ませて帰ろうよ」

小村

「わかった」

吉賀

「じゃ、マットの上に寝てくれる」

▽小村 マットの上に仰向けに寝転ぶ

▽吉賀 小村の上に寝転ぶ

小村

▽吉賀 小村の乳首を舐め始める

「くすぐったいよ」

▽吉賀 自分の顔を小村の顔に近づける

▽吉賀 小村にキスをする

▽小村 目を大きく開いてしまう

▽吉賀 口から離し、首、胸、腹と舌で舐めていく

▽吉賀 小村の競泳パンツの上から、膨らんだところを舐める

小村

「あ あ、つ」

▽小村 目を瞑りながら腰を振る

▽古屋 ソファーに座り、二人の行為を見ている

▽吉賀 小村の競泳水着を脱がす

小村の陰茎が飛び出てくる

小村

▽吉賀 小村の乳首を舐めながら、片方の手で、小村の陰茎を扱きはじめる

「あ、あや、やばい、で、でそう」

▽吉賀 小村の陰茎を激しく扱きだす

「あ、ああ、あう」

小村

▽小村 腰が大きく持ち上がる

勢いよく、小村の精液が飛び散る

▽吉賀 小村の陰茎をゆっくりと扱き、精道に残った精液を搾りだす

▽小村 目を瞑り、深呼吸をしている

「いっちゃったね」

吉賀

▽吉賀 古屋の方を見る

「よかったよ。じゃ、次は、俺が君をいかせる番だな」

古屋

▽古屋 ソファーから立ち上がる

「約束ですもんね」

▽吉賀 立ち上がる

▽古屋 吉賀の背後に回る

▽古屋 吉賀の背後から吉賀に抱きつく

▽古屋 吉賀の顔を右に向け 吉賀にキスをする

▽古屋 キスをしたまま、片方の手の指先で、吉賀の乳首をまさぐる

▽古屋 吉賀の乳首をつついた後、手を下げていき、吉賀のランパンの中に手を入れ
吉賀の陰茎を握る

▽古屋 吉賀の陰茎を扱きだす

▽古屋 吉賀とのキスをやめる

古屋

「小村君の言ったとおりだ。大きいね」

▽古屋 吉賀の陰茎を扱きだす

吉賀のランパンが激しく動いている

吉賀

「あっ、あっ」

▽吉賀 足がガクガクとなる

▽古屋 もう片方の手は、吉賀の乳首をいじっている

吉賀

「あっ い、いきそう」

▽古屋 吉賀のランパンの中につっこんだ手を激しく動かしている

吉賀

「あ、あ、い、いく」

▽吉賀 足が大きくがたつく

吉賀

「あっ」

古屋

▽古屋 ランパンの中の手をゆっくりと動かす

吉賀のランパンの裾から、ふとももに刺って、精液が流れ落ちる

「見せて」らん

古屋

▽古屋 吉賀のランパンのウエスト部分を広げて覗く

「いい子だ」

吉賀

「僕も、とても気持ちよかったです」

古屋

「素直だな」

吉賀

「そうですか。そろそろ時間なんで」

古屋

▽古屋 壁にかけている時計を見る

「時間が経つのが早いな」

古屋

▽吉賀 シャワールームの方に行こうとする

「最後のシャワーは俺一人でいいよ。君は、友だちと後で入ってくれ」

▽古屋 バスタオルを手に取り、シャワールームへ

(数分後)

▽古屋 腰にバスタオルを巻いて、バスルームから出てくる

吉賀は、ランパンを穿いたまま 立っている

小村は タオルを腰に巻いた状態で、マットの上でに座っている

「今日は、楽しかったよ」

「僕も よかったです」

「商売が上手だな」

「いえ、本当です」

「今日で、最後って残念だよ」

「僕もです」

「じゃ、個人的にでも会うか」

古屋

吉賀

古屋

吉賀

古屋

吉賀

古屋

吉賀

「すいません。嘘をついてました」

古屋

「おもしろい子だ」

吉賀

「そうかも」

古屋

「じゃ、俺は失礼するかな」

▽古屋 吉賀のに近づく

▽古屋 吉賀の正面に立ち、顔をじつとみる

▽古屋 吉賀を両手で抱き、キスをする

▽古屋 吉賀とのキスを止め、手を離す

▽古屋 部屋から出ていく

▽吉賀 小村の方を見る

吉賀

「じゃ、僕らもシャワー浴びて帰ろうか」

▽小村 立ち上がる

○受付のあるマンションの部屋

吉賀、小村 受付の男がいる

▽男が椅子に座っている

「今日のバイト代」

▽男 お金の入った封筒二つを小村 吉賀に差し出す

「ありがとうございます」

「次は、いつこれるかな」

「いえ、最初に言いましたけど、これで終わりにします」

「何言ってるの、君らは ここでずっとバイトするんだよ」

小村

「いえ、無理ですよ」

男

「無理って。そんな事いうと、さっきのやっつたところの動画を、ネットに流しちゃうよ」

小村

「え？」

男

「しっかり、録画してあるからさ」

小村

「消して下さい」

男

「無理だね。でも、君らが、バイトを続けている限り大丈夫だよ」

小村

「そんなの卑怯です」

男

「金儲けに卑怯は、つきものさ」

吉賀

「小村君、僕らの負けだよ。行こう」

小村

「吉賀、いいのか」

吉賀

「だって、話がわかる人じゃなさそうだし。今日は帰るしかなさそうだよ」

男

吉賀

男

「吉賀君、物わかりいいね」

「行こう」

「じゃ、来週も同じ時間にきてくれよ」

▽吉賀、小村 部屋を出る

Copyright@2020 D³S

□ 第六幕 翌週

○（翌週の土曜日）マンションの入口

小村、吉賀は しょうがなくマッサージのあるマンションの下に来ている

▽小村 マンション入り口でインターフォンのボタンを押そうとしている

「絶対、断ろうな」

「そうだね」

「ダメなら警察にでも言うって言うしかないよ」

「うん。そうしようか」

「じゃ、押すぞ」

▽小村 入り口のインターフォンで部屋番号のボタンを押す

（応答がない）

「よし、もう一回」

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

小村

小村

吉賀

▽小村 インターフォンのボタンを押す

(反応がない)

「どうしたんだろう」

「どうしたのかな」

(少しして)

○マンションの中から、このマンションの住人と思われる人が扉を開けて出てくる

▽吉賀、小村 その隙に建物の中に入る

○マンションのエレベーターの中

小村 吉賀が乗っている

「なんとか入れたな」

「そうだね」

小村

吉賀

(エレベーターが止まる)

○マンションの通路

小村 吉賀 歩いている

○(同) 受付のあった部屋の前

▽吉賀 小村 部屋に近づくと、部屋のドアを囲むように、コーンが置かれ、黄色いテープで囲んでいた

▽小村 ドアの端や、通路に面した硝子が黒くなっていることに気づく

(ドアが開く)

▽警察官 中から出てくる

小村、吉賀に気づく

「君ら、ここの住人の知り合いかい？」

「いえ、別の階の者ですけど、どうしたんですか？」

▽吉賀 知らない振りをする

警察官

吉賀

警察官

「じゃ あっちに行ってくれるかな」

吉賀

「何かあったんですか」

警察官

「君は、昨日の火事しらないの？」

吉賀

「あ、昨日は、この友達の家泊まってたんです」

警察官

「そうか。取りあえず。まだ現場検証してるから、ここから離れてくれるかな」

吉賀

「はい、失礼しました」

吉賀

「行こう、小村君」

▽吉賀 小村 その場を離れる

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第七話

夢雄
美侶

サブタイトル 「クリスマス大作戦 滝本 & 小雪 編」

本話について

あらすじ

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D³S

□ 第一幕 突然の再開

○ (クリスマスの数日前の夕方) 道

▽ 滝本 学校からの部活帰り。自転車を漕ぎ、家に向かっている

「すっかり、遅くなったな」

小
雪

「キャッ」

○ 自転車同士が衝突する

キキッー

ドシーン

滝
本

「いてて」

▽ 滝本 転けて倒れている 小雪に

滝
本

「大丈夫ですか」

Copyright@2026 D's

小雪

「ごめんなさい。よそ見してたの」

▽小雪 顔を上げて、滝本の顔を見

小雪

「あなた」

滝本

「あの時の」

▽滝本 小雪に手を差し出す

▽小雪 滝本の手を掴んで 立ち上がる

小雪

「本当に ごめんなさいね」

滝本

「はい、俺は、大丈夫です。そちらこそ」

小雪

「私は大丈夫よ」

▽小雪 滝本の全身を見る

滝本の足を見ると、ズボンが膝が破け、血が流れている。

小雪

「あら？ 血がでてるわ。家が近くだから、寄って手当てしていきなさい」

滝本

「大丈夫ですって」

小雪

「ダメダメ。ほら」

半ば、強制的に、滝本は、夫人の家に連れていかれた。

○小雪の住んでいるマンション

そこそこ広いマンションの一室に連れて行かれ、リビングに通された。

▽小雪 滝本を見る

「早くズボンを脱いで」

滝本

「いえ、大丈夫ですって」

小雪

「だめよ。すぐに消毒しなきゃ」

▽滝本 言われるがままズボンを脱いだ

▽小雪 膝下の血が滲んでいるところに、消毒スプレーをかける

滝本

「痛っつ」

小雪

「男の子でしょ」

滝本

「男だって、痛い物は、痛いの」

小雪

「そうよね」

小雪

「さあて、これでいいわ。あとは・」

滝本

「ありがとうございます」

▽滝本　ズボンを穿こうとする

小雪

「ちょっと待って」

○小雪　リビングから出て行く

▽滝本　ソファーに座り、当たりを見回している

（数分後）

小雪

▽小雪 手に学生ズボンを持って戻ってくる

「これ、どうかしら？」

滝本

▽小雪 学生ズボンを広げて、滝本に見せる

「これは？」

小雪

「亡くなった主人が、学生の時のもののなの。あなたのが、破れてしまったので、
どうかと思い」

滝本

「え？ 亡くなった・・・大切な物じゃないの？」

小雪

「そうね。でも、この前、あなたに初めて会ったとき、
どこことなく 主人の面影があったの。あなたが、穿いてくれたら」

滝本

「俺が穿いたら？」

小雪

「いえ、なんでもないわ。穿いてみて」

▽小雪 滝本にズボンを渡す

滝本

▽滝本　ズボンを受取り穿いてみる

「ちょっと、ウエストが大きいですね」

▽小雪　滝本のズボンのウエスト部分に指を入れる

小雪

「ほんの少しね。直ぐに直すわ。もう一回　脱いでくれる」

▽滝本　ズボンを脱ぎ渡す

▽小雪　ズボンをテーブルに置き別の部屋へ

（直ぐに）

▽小雪　片手に、大きな木箱を提げて戻ってくる

大きな木箱をテーブルに置き、上の蓋を開くと、裁縫道具が、ぎっしりと詰まっていた。

黒い糸と針を取り出し、ズボンのウエスト付近を詰め、縫いだした。

滝本

「すごい、そんなことも出きるんですね」

小雪

「主人って、服を買うのが苦手で、私が買ってきては、こーやってサイズを

合わせてたの」

「へえー」

「さあ、もう終わりよ。もう一度、穿いてみて」

▽小雪　ズボンを滝本に渡す

▽滝本　ズボンを穿いてみる

「ぴったりです」

「そう、よかったわ。

破れた方のズボンは、また直しておくから、取りにいらっしやい」

「そんなのいいですよ」

「ダメダメ。じゃ、連絡先教えてくれる？」

▽滝本　ポケットから、スマホを取り出した

▽小雪、滝本　連絡先を交換する

小雪

滝本

小雪

滝本

小雪

滝本

小雪

滝本

▽小雪 スマートフォンに登録しようとするが、名前を知らなかった

「そういえば、名前を聞いてなかったわ」

「ほんとうだ」

「名前 教えてくれる？」

「たきもと です」

「下は？」

「下もですか？」

「早く教えて」

▽滝本 恥ずかしそうにしている

「恵（めぐみ）です」

Copyright@2026 D'S

小雪

「あら？ 素敵な名前」

滝本

「俺、女みたいで嫌なんですよ。だから、みんなには、けい　って呼んでもらってます」

小雪

「そんなことないわ。素敵よ」

滝本

「じゃ、僕にも名前を教えてくださいませんか？」

小雪

「私は、小雪（こゆき）よ」

滝本

「上の名前は？」

小雪

「忘れたわ」

滝本

「ズルイですよ」

小雪

「ごめんなさい。田中　小雪よ。二月の雪が降っている日に生まれたからって両親が付けてくれたの。きっと　あなたの名前も両親が一生懸命に考えて付けてくれたはずよ」

滝本

「小雪さんですか。カワイイ名前ですね」

小雪

小雪

「ありがとう」

「さあ今日は、もう遅いから。ズボン、直したら連絡するわね」

▽滝本 小雪の家から出る

Copyright@2026 D³S

□第二幕 小雪の家でクリスマス

数日後、滝本に、連絡があった。
ズボンのほつれを直したので取りに来るようにと。

○（クリスマスイブ）の昼 小雪が住んでいるマンションのドアの前

滝本が、チャイムを押す

「ピンポン」

（ドアが開く）

中から小雪が顔を出す

「いらっしやい」

「こんにちは」

「さあ、入って」

「お邪魔します」

▽小雪 滝本を部屋の中に招き入れる

小雪
滝本
滝本
小雪

○（同）リビング

▽滝本 ソファーに座る

「寒かったでしょ」

「はい」

「ごめんなさいね。こんな日に来てもらって」

「いえ、部活の帰りですから」

「クリスマスイブなのに部活なの？彼女さんに怒られるわよ」

「そんなのいませんよ」

「本当かしら」

「本当ですよ」

「何か、温かい飲みものを入れるわね。あ、それよりも、お腹空いてないかしら」

小雪

滝本

小雪

滝本

小雪

滝本

小雪

滝本

小雪

滝本

「どちらかと言うと、何か食べたいです。部活終わってすぐにきましたので」

小雪

「ごめんなさい。気がつかなくて」

滝本

「俺も催促したみたいで すみません」

小雪

「じゃ、何か作るわ。私も まだ食べてないの」

滝本

「ありがとうございます」

小雪

「じゃ、今から作るから、シャワーを浴びてきていいわよ」

滝本

「いいんですか？」

小雪

「ええ、もちろん」

滝本

「助かった。ちょっと汗が気になったてたんですよ」

小雪

「あら、汗の臭い いいじゃない」

滝本

「え、いいんですか」

小雪

「ぜんぜん、いいわよ。でも、折角の料理のいい匂いが汗の臭いで台無しになるから、シャワーは浴びてきてほしいわ」

滝本

「はい。わかりました」

小雪

「後で、バスタオルと着替え持って行くわね。バスルームは、廊下を出て左よ」

滝本

「はい」

▽滝本 リビングから出ていく

○（同）バスルーム

滝本が立ってシャワーを浴びている

“ガラッ” （バスルームの前の扉が開く音）

▽滝本 すりガラス越しに、小雪の影が見える

（小雪さんが、バスタオルを持ってきてくれたのかな）

（滝本）

“カチッ” （バスルームの扉が開く音）

(滝本)

(え)

▽滝本 扉を見る

胸から腰にかけて、バスタオルを巻いた小雪が立っている

滝本

「小雪さん」

小雪

「思ったより、料理が早くできたので、私もシャワーを浴びていいかしら」

▽小雪 目線を滝本の股間に

▽滝本 片手で自分の股間を隠し、背中を向ける

小雪

「見てないから大丈夫よ。背中、流しましょうか？」

滝本

「大丈夫です。俺、直ぐに出ますので」

小雪

「いいのよ。背中流させて欲しいの」

▽滝本 股間を隠しながら小雪の方を向く

滝本

「どうして？」

小雪

「あなたを見ると、どうしても、主人を思い出してしまふの。
昔、よく主人の背中を流したのを もう一度 したくて」

▽滝本 少し考える

滝本

「お願いします」

小雪

「ありがとう」

▽滝本 小雪に背中を向ける

▽小雪 ボディーソープを手の平に出し、手の平で優しく滝本の背中をさすりだす

小雪

「なにから なにまで、主人と同じだわ」

滝本

「そうですか」

小雪

「ああ、懐かしい」

▽小雪 滝本の背中に頬を付ける

小雪

「温かい」

滝本

▽小雪 両腕を前に回し、滝本を抱きしめる

「こ、小雪さん」

小雪

「少しだけ、少しだけ、こうさせていて」

▽滝本 滝本の胸にある小雪の手の上に、自分の手を重ねる

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第八話

夢雄
美侶

サブタイトル 「クリスマス大作戦 美優 & 小村 編」

あらすじ

思い切って小村が美優をクリスマスのデートに誘います
そして、デート中、シャイな小村はなんと2回も出してしまうのです

登場人物（本話のみ）

□ 第一幕 小村からの誘い

次は、美優と小村。

主役級の二人ですが、主役ゆえ、あまり発展がないんですね。シャイで、純情で、ウブな、まるで、作者といっしょ

本当は、この世のものと思えない エロシーンを描きたいのですが、期待しないでください。

なんと言っても、作者自身が、しらゆりの様な可憐で、清楚で、エロ無縁なのですから

○ (クリスマスイブ) 二年二組の教室

▽美優、智美、松子が話をしている

「ああ、今日で二学期も終わりかあ」

「ほんとね。二学期って、一番 長いはずなんだけど、あっというまに終わったって感じ」

「年を取ると、時間の流れが早いつて言うわよね」

「もう、おばさん臭いこと言わないでよ」

美優

松子

美優

松子

智美

美優

智美

美優

松子

智美

小村

智美

小村

智美

「大人になったって、言ってほしいわ」

「みんなは、冬休みは、何するの？」

「今のところ予定なし。美優は？」

「私も何も無いわ。ま、大掃除ってとこね」

「私は、大晦日まで、バイトだわ」

「松子は、がんばるなあ」

▽小村 吉賀 がやってくる

「なんの話、してるの？」

「小村君、冬休みなにするかな？ なんてね。」

「オレは、寝正月」

「ええー 若いもんがー」

松子

「吉賀君は？」

(美優)

(どうせ、常夏のハワイって言うんだろうな)

吉賀

「今年は、家でのんびりだね」

松子

「そうなの」

(美優)

(お！ やっと庶民らしく なってきたな)

吉賀

「プライベートジェットのパイロットが、インフルエンザにかかっちゃってさ、飛行機飛ばせないんだ。今からだと、庶民の乗る飛行機は、予約が採れないし、しかたないよ」

(美優)

(おお、ついに、庶民を敵にまわしたな)

松子

「ねえ。せっかく、みんな、いるんだったら、初詣でにいかない？」

智美

「いいわね」

美優

「でも、男二人に、女 三人じゃね」

智美

▽智美 松村の背中を見る

「ねえ、松村君」

▽松村 智美の声に気づき振り向く

智美

「松村君は、正月何するの」

松村

「うーん、家でテレビ見てるよ」

智美

「じゃ、決まりね。お正月、私たちと、初詣よ」

松子

「智美、けっこうやるわね」

(美優)

(え、智美 いつから根暗オタクと)

智美

「何が？」

松子

「松村君のこと、結構 気にしてるでしょよ」

智美

「そんなんじゃないわ。夏休みのメンバーよ」

松子

智美

小村

美優

小村

美優

「まった、まったー」

「待ち合わせ場所なんかは、直前でするわね」

「夢前 明日、ヒマ？」

「え？ ええ。明日は部活ないから」

「じゃ、後で、メールする」

▽小村 その場所から離れる

○（夕方）美優の家のリビング

美優は家のソファでくつろいでいる

▽美優 スマートフォンにメッセージが届く

「あら、小村君からだわ」

▽美優 メッセージを開く

「明日、少し逢える？」

「明日かあ、どうしようかなあ？
なんてね。」

小村君からのクリスマスの誘いだわ。楽しみ。もち、オッケーで、返信と」

▽美優 小村に返信する

Copyright@2026 D's

□第二幕 街中

○（次の日のクリスマス） 昼間の駅前

▽美優 小村との待ち合わせ場所に行く

小村は、自転車を降り、自転車を持って待っている

美優

「ごめん、待った？」

小村

「ううん、俺も今来たところ」

美優

「よかった」

美優

「急に会いたって、どうしたの？」

（美優）

（ふふふ、ちょっと、いじわるな、わ・た・し）

小村

「えっと、クリスマスだろ、俺、暇だったしい、夢前も、暇だったら・・・あ、ごめん、忙しいよね」

美優

「そうね、忙しい　くらいに、暇だったわ。小村君こそ、大丈夫なの？」

小村

美優

小村

(美優)

美優

「俺は、平気。妹に、クリスマス家にいて、淋しいやつ、って言うから、クリスマスは、家にいないぞって、言ってしまった手前、帰り辛いんだよ」

「あら、そうなの。じゃ、どこかに行きましようか」

「そうだね。ちょうど、面白い映画をやってるんだ」

(映画って、雑誌の情報だな)

「わ、楽しみ」

▽美優と小村は、街の小さな映画館に向かっている

○街中

自転車を押して歩く小村と、その横を歩いている美優

□ 第三幕 映画館

○ 映画館の座席

売店で、ポップコーンとコーラを買い、部屋に入る。
その映画館は、今では珍しい自由席だ。

一列、丸ごと空いている所の真ん中に座った。

(程なくして、映画の上映が始まる)

グロテスクなシーン

「いやーん」

美優

▽ 美優 思わず、隣の席の小村に身を寄せる

「大丈夫だよ」

小村

▽ 小村 美優の手を握る

(ちよっと、わざとらしくったかな)

(美優)

残虐なシーン

▽美優 小村の胸に顔をうずめる

小村

「大丈夫、大丈夫」

美優

「私、無理 無理」

▽美優 小村の股間に顔を押し当て、頭を振る

(美優)

(小村君の股間 ちょっと固くなってるんじゃない)

小村

「大丈夫だって」

▽小村 美優の頭を撫でている

美優

「無理よ 無理」

▽美優 さらに小村の股間を頭を揺さぶり刺激する

▽小村 美優の頭を撫でている

しかし、美優の刺激に、下半身が徐々に反応していく

(小村)

小村

(やば。起ってきた)

「夢前、大丈夫だって」

美優

▽小村 美優の頭を持ち上げようとする

「ほんとっ」

(美優)

(ち、もう少し だったのに)

残酷なシーン

▽美優 残酷なシーンを見てしまう

(美優にとっては 平気)

美優

「きゃーっつ 嘔つき」

▽美優 再び 小村の股間に顔を埋める

今度は 美優の口に股間部分があたるように

小村

「ごめん」

▽小村 美優の頭を撫でている

▽美優 小村のジーンズの上から少し固くなった陰茎を 口でパクパク

(美優) (ジーンズって、邪魔ね。ちつとも 感触がわかんない)

(小村) (やばい、ますます起ってきた)

(美優) (わ、反応してる、してる)

(小村) (なんとかしないと)

小村 「夢前」

▽美優 (カワイイ) 顔を振り向けて小村の方を見る

美優 「どうしたの 小村君」

▽小村 美優のカワイイ顔を見て、何も言えなくなる

小村 「な、なんでもない」

美優

(美優)

「映画終わるまで、こうしているわ」
(折角の男の股間、楽しまなきゃ)

(美優)

▽美優 再び顔を小村の股間の上に当てる
(さらに固くなってるわ)

(小村)

(や、やばいよ)

(小村)

▽美優 小村の股間部分を、頬でスリスリ
(も、もうだめ)

▽美優 小村の股間が一瞬大きくなったような感覚
直ぐに、臭いに異変を感じる

▽小村 美優の頭を持ち起こす

小村

「じめん」

美優

小村

美優

小村

小村

(美優)

「どうしたの」

「急に腹が」

「大丈夫」

「大丈夫、ちょっと待ってて」

▽小村 頭を低くして立ち上がり、狭い通路をゆっくりと歩いて、映画館を出る

○映画館のトイレの個室

小村がジーンズを下ろし、トイレトペーパーで股間を拭いている

「やっぱいな。射精しちゃったよ」

○映画館の中

スプラッターなシーンをポップコーンと食べながら見ている美優

(つままない映画ね。それよりも小村君。もしかしていっちゃったの？
あんなに慌てるなんて、カワイイのね)

(数時間後)

□ 第四幕 帰り道

○（夜）街を歩く美優と小村

クリスマスのイルミネーションが綺麗だ

「映画、怖いの選んでごめんな」

「ううん。大丈夫。それよりも、小村君 お腹大丈夫？」

（イッタ なんて言えないわよね）

（よかった。ばれてなかった）

「大丈夫。トイレに行ったら治ったよ」

「よかった。じゃ、そろそろ、帰りましょうか」

「そうだね。途中まで送るよ」

「ありがとう。でも、大丈夫よ」

「いいんだ、まだ、一緒に居たいから」

▽美優、小村 美優の家に向かって歩き出す

○美優の家の近くの公園

小村

「夢前、もう少しだけ、一緒にいたいからあそこで話さない？」

夢前

「ええ、いいわよ。私も そう思ってたの」

▽美優、小村 公園の中に入り、ベンチに座る

小村

「あのさ」

▽小村 コートのポケットから小さな箱を取り出し、美優に差し出す

小村

「夢前、これ、クリスマスプレゼント」

▽美優 小村からプレゼントを受けとる

美優

「え？ プレゼント、ありがとう。開けていい？」

小村

「気に入るといいんだけどな」

▽美優 箱を開ける
イヤリングが入っている。

小村 「本当は、ピアスが、いいんだろうけど、さすがに、穴を空けるのは嫌だったんだ」

美優 「ありがとう。ちょっと付けてみていい」

小村 「うん。俺も、夢前が付けたところ見てみたい」

▽美優 イヤリングを取りだし自分の耳に付ける

美優 「どうかしら？ 似合う？」

小村 「うん、似合ってる」

▽小村 美優の顔を、見つめた

▽美優 小村を見つめる

▽小村 美優の両肩を持つ

(小村)

▽小村 美優の顔に近づけていく

※小村は興奮して勃起状態

▽美優 目を瞑る

(や、やばい、また射精しそうだ)

▽小村 美優のカワイイ顔を間近で見る

(小村)

(あっ)

※射精してしまう

▽小村 美優の肩を持つ手を離す

小村

「だめ。まだ、だめだ」

▽美優 目を開く

美優

「どうしたの」

(美優)

(なに、なんなの、思わせぶり)

Copyright@2026 D's

小村

「ごめん。やっぱ、俺ら高校生だから」

美優

「うん。わかってる」

(美優)

(え、もう、高校生だよ)

小村

「じゃ、またな」

▽小村 ベンチから立ち上がり、自転車に跨がる

小村

「夢前、今日は楽しかったよ」

美優

「ええ、私も」

(美優)

(いや、中途半端なんですけど)

小村

「メリークリスマス」

▽小村 手を振りながら、自転車を漕ぎ、公園を出ていく

▽美優 ぼっとしながら 小村に手を振る

美優

小村

○公園

ベンチの前で美優が一人で立っている

「なんなのよー」

▽小村 自転車を漕いでいる

「頼むよ、あんなところで、射精しないでくれよ。今日、二回目だぜ」

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第九話

夢雄
美侶

サブタイトル 「クリスマス大作戦 松子 & 吉賀 編」

あらすじ

文化祭からラブブムードの二人

吉賀の家でデートと思いきや、吉賀の先週の話が聞かされて

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D's

□ 第一幕 性なるクリスマス

○ (クリスマスの昼) 吉賀の家

▽ 吉賀 リビングのソファアに座り、雑誌を見ている

吉賀のマンションは、セントラルヒーティングの為、季節に関係なく
温度が一定に保たれている。

その為、吉賀が一人にいるときは、Ｔシャツと短パンを着ている

(ピンポン)

「誰だろう?」

▽ 吉賀 インターフォンに出る

「はい」

「こんにちは、私よ」

▽ インターフォンのディスプレイに松子の姿が映される

「松子ちゃん、いらっしやい。今、開けるね」

吉賀

吉賀

松子

吉賀

▽吉賀 インターフォンの横の“開鍵”ボタンを押す

(数分後)

▽ドアのチャイムが鳴る

▽吉賀 玄関に行きドアを開ける

ドアを開けると 松子が、少し大きめの箱を持って立っている

「どうしたの？」

「来ちゃった」

「とりあえず、寒いから、早く入って」

「うん、お邪魔します」

▽松子 吉賀の家の中に入っていく

○吉賀家のリビング

吉賀

松子

吉賀

松子

▽松子 コートを脱ぎ、ソファアの背もたれに置く

吉賀

「急に来るから驚いたよ」

松子

「ごめん、忙しかった？」

吉賀

「忙しいように見える？」

▽吉賀 Tシャツに、黒のランパン姿だ。

松子

「ぜんぜん見えない」

吉賀

「今から、オナニーでも しようと思ったところ？ 手伝ってくれる」

松子

「もう、あいかわらずい冗談がきついんだから
でも、吉賀君なら、いいかな なんてね」

▽松子 大きめの箱を吉賀に差し出す

松子

「ケーキを焼いてきたの。他にクリスマスケーキを買ってるなら、持って帰るわ」

吉賀

「わあい。松子ちゃんの手作りのケーキ大好き」

松子

吉賀

松子

吉賀

「よかった」

「お茶入れるからテレビでも見てて」

「あ、私がケーキを切るわ」

「うん、ありがとう」

（数分後）

○吉賀家のリビング

松子と吉賀が ソファーに座りテレビを見ている

テーブルには、松子が持って来たケーキを食べ終わった皿が載っている

#テレビではクリスマスの映像が流れる#

「世間は、クリスマスなのね」

「そうだよね。クリスマスって一番好きな季節なんだ。赤や緑のイルミネーションもいいけど、温かい電球の色も好きなんだな」

吉賀

松子

松子

「すごい、大人のクリスマスって感じよね」

吉賀

「そうかな？ 松子ちゃんは、いつまで、サンタクロース信じてた？」

松子

「私？ 私は、小学校になったときには何となくわかってたわ」

吉賀

「早いんだね」

松子

「吉賀君は？」

吉賀

「僕も、小学生」

松子

「なあーんだ。いっしょじゃん」

吉賀

「大人に近くなるに従って、物事の仕組みがわかると、夢が減っていくよね」

松子

「そうよね」

吉賀

「赤ちゃんだって、キャベツ畑で、採れるって思ってたもん」

松子

「私は、コウノトリが、運んでくるって信じてたわ」

吉賀

「それが、今では、セックスで、子供が出来るなんて、子供が、知ったらショックだよね」

松子

「そうそう、わかるわ」

吉賀

「今でも、ココから出る、小さな精子が、人間になるって信じられないよ」

▽吉賀 ランパンの上を指差す

松子

「ははは、そうよね。今年は吉賀君の精子、なん億個も見せてもらったもんね」

吉賀

「ほんとうだ」

松子

「そういえば、何で、今日は黒いの穿いてるのね」

吉賀

「そうなの。たまには気分を変えてみるのもいいかなって」

松子

「うん。黒もかっこいいわ」

吉賀

「それに」

松子

「それに？」

▽吉賀 ランパンの裾を捲る

黒いインナーが見える

吉賀

「中也黒いから、透けないんだよね」

松子

「透ける？」

吉賀

「そう。だって、この前」

松子

「この前」

Copyright@2026 D³S

□第二幕 先週の出来事

(# 回想 # 先週の昼)

○(先週の日曜日の昼) 吉賀の家

吉賀は、ソファーに座りテレビを見ていた。
家にいるときは、黒のTシャツに、学校指定の白のランパン

ピンポーン

ドアのチャイムが鳴る

▽吉賀 インターフォンに出る

「はい」

宅配業者の男

「お荷物です」

吉賀

「すぐに開けます」

▽吉賀 インターフォンでエレベーターのドアのロックを解除し、玄関へ向かう

▽吉賀 玄関を開ける

宅配業者の男が立っている

二十歳そこそこの長身で、スラリとした細身のイケメン
首には汗拭き用のタオルを巻いている
大きな箱コーラーの入った段ボールを抱えている

宅配男

「どこに置きましょうか」

吉賀

「玄関に置いておいてください」

宅配男

「結構 重いので中まで持って行きましょうか」

吉賀

「いいんですか」

宅配男

「はい」

吉賀

「じゃ、キッチンまでお願いします」

宅配男

「わかりました」

▽吉賀 宅配男を家に入れる、廊下を進む

▽宅配男 玄関で靴を脱ぎ、吉賀の後ろを付いていく

宅配男

「立派な家ですね」

吉賀

「そうですか」

宅配男

「ええ、こんな家 なかなか無いですよ」

吉賀

「ありがとうございます」

○（同）キッチン

吉賀

「冷蔵庫の前に置いておいてください」

宅配男

「ここですね」

▽宅配男 段ボールを冷蔵庫の前に置く

宅配男

「コーラ お好きなんですね」

吉賀

「はい。もう、水代わりです」

宅配男

「実は、俺も飲み物の中で、コーラが一番好きなんですよ」

吉賀

「そうなんですネ。よかったらコーラ飲んで言って下さい」

宅配男

「いえ、仕事中なんで」

吉賀

「アルコールじゃ無いので大丈夫ですよ」

宅配男

「そうですか。では、いただきます」

▽吉賀 冷蔵庫を開け、冷えたコーラのペットボトルを取り出す

▽吉賀 ペットボトルを宅配男に渡す

▽宅配男 ペットボトルを受け取り、栓を開けて飲む

吉賀

「僕も飲みたくなつたな」

▽吉賀 冷蔵庫を開けて、ペットボトルを取り出す

▽吉賀 ペットボトルの栓を開ける

ペットボトルからコーラが吹き出し 吉賀のTシャツ、ランパンにかかる

吉賀

「わっ。やっちゃた」

▽吉賀 慌ててＴシャツを脱ぐ

上半身裸になる

宅配男

「大丈夫ですか」

吉賀

「大丈夫です」

▽宅配男 しゃがみ 吉賀のランパンの上を拭きだす

吉賀

「あ、そこは大丈夫ですから」

▽宅配男 顔を上げ、吉賀の顔を見る

宅配男

「大丈夫じゃないでしょ。濡れてこんなに透けてるよ」

▽宅配男 吉賀のランパンの上から陰茎を握って見せる

ランパンが濡れて陰茎に張り付き、くっつきりを形が分かってしまう

吉賀

「そう、そうですね」

宅配男

「ほら ちゃんと拭かないと」

▽宅配男 吉賀の前にしゃがみ、ランパンの上から陰茎を舐め始める

吉賀

「ちよ、ちよっと」

宅配男

「ほら、キレイキレイしようね」

▽宅配男 手を上げ 吉賀の先を高速になで始める

吉賀

「あう、あ、あう」

宅配男

「こんなになっちゃって。君もエロイね」

吉賀

「ち、ちが」

吉賀

「うっ」

▽吉賀 腰を振り出す

▽宅配男 顔を上に向けて、吉賀の苦しそうな顔を見る

宅配男

「いいね、その顔。お兄さんに もつと見せて」

▽宅配男 立ち上がり、手を吉賀のランパンの中に入れる

▽宅配男 吉賀に陰茎を握り、ゆっくりと扱く

▽宅配男 下を向き吉賀の我慢している顔を見る

宅配男

「ほら、早く出してくれないと、お兄さん、次の仕事があるんだよ」

▽宅配男 吉賀の陰茎を激しく扱きだす

吉賀

「あう、ああ、あう」

▽吉賀 足がガックとなる

▽宅配男 ランパンから手を出し、ランパンの上から吉賀の陰茎をゆっくりと
扱く

精液で、吉賀のランパンは張り付き、うっすらと色がわかる

宅配男

「こんなに ぐちよぐちよにして、ヤラシイね」

宅配男

▽吉賀 壁にもたれる

「だめだよ。そんな姿で玄関にでちゃ。これから気をつけるんだよ」

▽宅配男 玄関から出て行く

(# 回想 # 終わり)

Copyright@2026 D's

□第三幕 松子も触発？

○（同）リビング

「なに、それ。それで吉賀君、いつちゃたの」

「うん。そうなんだけど」

「そんなことするなんて。宅配屋さんに文句いつてやるわ」

「いいよ。僕が、そんな格好で出たのが悪いんだし」

「それにしても」

「なので、白は止めて、黒いにしてみたんだ」

「そんな ことで済むとは、思えないわよ」

「いいんだよ。気持ち良くてイッちゃったんだからしょうがないよ」

「えー 男にされた気持ちよかったの」

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

「そうなんだ。だから 僕も悪いの」

松子

「吉賀君、そんなに気持ちいいことしてほしいの」

吉賀

「まあ、男だったら 誰でもそうじゃないかな」

松子

「じゃ、私がしてあげる」

▽松子 ランパンの上から吉賀の股間を揉み出す

吉賀

「ちょ、ちょっと、松子ちゃん、何するの」

松子

「だって、気持ちいいことしてほしいんですよ」

吉賀

「そ、そうだけど。や、やめて」

▽松子 吉賀の陰茎を扱きだす

松子

「どう。気持ちいい」

吉賀

「う、うん」

※あまり、気持ちよく思っていない

松子

「なかなか、立たないわね」

▽松子 ランパンの裾から吉賀の陰茎を取りだし、扱く

松子

「ぜんぜん、大きくなってないじゃない」

吉賀

「なんか、調子が悪いのかな」

▽松子 吉賀の陰茎を扱っている

(数時間後)

○(夕方) 吉賀家のマンションの前

松子が帰るので吉賀が見送りしている

松子

「ごめんなさい」

吉賀

「いいよ。僕だって、調子の悪い時だってあるよ」

松子

「吉賀君が、男の人にイカされたって話をするから、私だって、ムキになって」

吉賀

「ごめん。余りに急だったから。今度は、ちゃんとイクようにするよ」

松子

「ごめんなさい」

吉賀

「大丈夫。なんたって、二回も実績あるんだから」

松子

「そうね」

吉賀

「駅まで送るよ」

松子

「ありがとう」

Copyright@2026 DS

Copyright@2026 D³S

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第十話

夢雄
美侶

サブタイトル 「クリスマス大作戦 智美 & 松村 編」

あらすじ

智美が街を歩いていると、かつてのクラスメイト 白井とばったり会ってしまします。実は、智美、中学時代はいじめられっ子で、白井は イジメの中心核。そして 智美にラブホ代をせびってきます。それを救うのは、偶然 通りかかった 松村。そして、智美は松村を誘い、ラブホに行くのでした。

□ 第一幕 神聖なるクリスマス

○ (クリスマスの夕方) 商店街 クリスマスの飾りで華やかだ

▽ 智美 商店街を歩いている

▽ 智美 周りを歩いているのが男女のカップルばかりで、ため息が出る

智美

「はあ、カップルばかりね。来るんじゃないかったわ」

▽ 智美 歩いていると 突然 声がかかる

女 (幸子)

「あれ？ 智美じゃない？」

▽ 智美 声のする方を見る

女 (幸子) と男 (幸子の彼氏) カップルが立っている

女 (幸子)

「やっぱり、智美じゃん。久しぶり」

▽ 中学の同級生の幸子 (さちこ)

幸子の横には、背の高い男がいた。イケメンではない。どちらかというと、顔が左右非対称で不細工な部類だ。

男

▽智美 嫌な奴に会った顔をする

「おい、サッチー 誰だい？」

女（幸子）

「ああ、中学の時のクラスメート。
クラスメートって言うけど、だじやないわよ。
だって、クラス一番の嫌われ者だもの。ね、智美そうでしょ」

▽智美 黙っている

男

「え、そうなの。道理で、ブスだなんて、思ったよ」

▽智美 その場から離れようとする

智美

「じゃ、私は用事があるから」

女（幸子）

「ねえ、待ってよ」

智美

「なに？」

女（幸子）

「昔みたいに、お金貸してくれない？」

智美

「無理よ」

女（幸子）

「友だちが困ってるのよ」

智美

「さつき 友だちじゃないって」

女（幸子）

「そんなん言ったけ」

男

▽幸子 男の方を見る

「言ったかな」

女（幸子）

▽幸子 智美の方を向く

「今度 会った時に返すからさ」

男

「まあ、あうことないだろうけど」

智美

「困ります」

女（幸子）

「何が困るの？私の方が困ってるのよ。貸してよ」

智美

「だって」

女（幸子）

「あんたみたいなブスが、何にお金使うって言うの」

智美

「え、でも」

▽男 智美の前に出る

男

「こいつとホテルで有意義に使うからさ、俺からも頼むよ」

女（幸子）

「それとも、これから男とホテルにでも行くの」

智美

「いえ」

女（幸子）

「冗談よ。あんたなんか、一生、男とホテルなんか行かないんだから、いいじゃん、貸してよ」

智美

「本当に、今お金を持っていないんですって」

女（幸子）

「じゃ、あそこのコンビニで、おろせばいいじゃん。でないと、いいのかなあ
あんたの高校に行って、昔のあんたの事、聞かせてやろうかな？」

智美

「そんなあ」

▽智美 困っている

智美の背後に近づく影

▽松村 智美の背後に近づく

智美 は気がついていない

▽松村 恐ろしい形相で男を睨みつける

▽男 智美の背後の松村に気づく

▽男 松村の顔を見て震える

▽男 幸子の手を引く

「おいセサッチー行くぞ」

「え？　なんで、まだ、お金貰ってないよ」

女（幸子）

男

男

「いいから、早く」

▽男 去って行く

女（幸子）

「待ってよ」

▽女（幸子） さっっていく

智美

「どうしたのかしら？ 急に？」

▽智美 後ろを振り向く

▽松村 智美にここやかな笑顔

松村

「高谷さん 何してるの」

智美

「松村君じゃない。驚かさないでよ」

松村

「こんな、道の真ん中で立っていると、危ないよ」

智美

「ケーキ 何しようかを考えてたら つい」

松村

「考え事は 道の真ん中でしない方がいいよ」

智美

「そうね。松村君は、ここで、何してたの」

松村

「僕も クリスマスだし、ケーキでも食べようかな？ なんて思って」

智美

「で、ケーキは買ったの？」

松村

「よくよく考えたら、一人なんで、クリスマスケーキなんか買っても無駄だから、止めることにして帰るとこだよ」

智美

「一人なの」

松村

「うん。今日も母さんは仕事で忙しいから、僕一人でクリぼっちさ
高谷さん彼氏とデートじゃないの」

智美

「私、そりゃデートに決まってって言いたいけど、
私もクリぼっちかな」

女

← # インサート # ← 女に言われているところ

「あんたなんか、一生、男とホテルなんか行かないんだから、

いいじゃん、貸してよ」

→ # インサート # →

「どうしたの？」

「松村君、時間あるなら、私に付き合って」

「いいけど、どうしたの」

▽智美 松村の手を引き歩く

○繁華街を抜け、周りに何も無い道

▽智美、松村 道を歩いている

「どこに行くの」

▽智美 黙っている

○ラブホ街

智美と松村が歩いている

松村

松村

智美

松村

ラブホテルの入口

▽智美 立ち止まる

「どうしたの 高谷さん」

▽智美 ラブホの看板を見る

「松村君、一緒に入る」

「どうしたの」

「どうしても。私とじゃ嫌」

「嫌じゃないけど」

「じゃ、入りましょう。私、したいの」

「わかった いいよ、高谷さん」

「いいの」

松村
智美
松村
智美
松村
智美
松村
智美

Copyright@2026 D's

松村
智美

「高谷さんの、そんな真剣な目
初めてみたよ」
「ありがとう」

Copyright@2026 DS

□ 第二幕

○ ラブホの入口

▽ 智美 どうしていいかわからない

「入るんだよね」

「もちろんよ」

▽ 松村 ラブホのドアを開ける

▽ 智美 松村についてラブホに入る

○ ラブホのロビー

ホテルの部屋の内装がわかる写真パネルが張られている。

「どの部屋にするか、ここで番号を押す方式みたいだね」

「分かってるわよ、どの部屋にしようか見てたの」

「じゃ、早く決めなきゃ。次の人が来てしまうよ」

松村

智美

松村

智美

松村

智美

「コレがいいわ」

▽智美 番号を入力すると、カードキーが出てきたので取る

智美

「さあ、行きましょう」

○ラブホの部屋

▽智美 松村 部屋に入る

▽智美 ベッドに座る

▽松村 智美の横に座る

智美

「ふう、落ち着くわね」

松村

「高谷さんは、よく来てるの」

智美

「よくって、ほどじゃないけど。彼氏とするときは。松村君は」

松村

「僕は、初めてだよ。一度、どんなところか見てみたいと思ってたんだ」

智美

「ふーん」

松村

「案外 高校生同士でも入れるんだね」

智美

「そうね。簡単よ。で、どうする？する？」

松村

「何を」

智美

「男と女が、ホテルに来たら することは一つよ」

松村

「高谷さんが、したいって言うなら、構わないよ」

智美

「いいわよ。じゃ、先にシャワー浴びてきてくれる。私は、その後に浴びるわ」

松村

「うん、わかった」

(智美)

▽松村 その場で服を脱ぎ、バスタオルを腰に巻いて、シャワールームに入った
シャワーの流れる音が聞こえ出すと、智美は、部屋を物色し始める

(コンドームはここね。コンドームを点けるのが、最初の難関ね。
これは、ローション。何に使うのかしら。あ、コレは？ マッサージの機械

どうしよう。本当は、始めてなのに ウソをついてしまったわ

(数分後)

▽松村 シャワーから出てくる

上半身裸で、腰にタオルを巻いて、別のタオルを髪を拭きながら

「さっぱりした。高谷さんも、早く浴びておいでよ」

「ええ」

▽松村 冷蔵庫を開ける

「わあ、コーヒー牛乳を置いてる。めずらしい。」

▽松村 冷蔵庫からコーヒー牛乳を取り出す

「高谷さんの分もあるから、シャワー浴びたら飲んだら」

「私は、そんな子供の飲みものなんていいわ」

「そっかな、コーヒー牛乳 美味しいのに」

松村

智美

松村

松村

智美

松村

智美

「じゃ、私も シャワーを浴びてくるから、待っててね」

松村

「うん。あ、シャワールームに服を置く場所ないから、ここで脱いでいった方がいいよ」

智美

「ここで」

松村

「そう。どうせ、裸になるんだから、何処で脱いでも一緒だよ」

智美

「そうね」

▽智美 少し躊躇してる

▽松村 立ち上がる

「ごめん。明るいと脱げないよね」

▽松村 照明のリモコンを使い、部屋をかなり暗くする

智美

「気が利くじゃない」

(智美)

▽智美 前にバスタオルを充てて、服を脱ぎ出す
脱ぎ終わると、シャワールームへ入っていった

○ラブホのシャワールーム

▽智美 シャワーを浴びている

(どうしよう。こんなことになるなんて。
でも、もう、もどれない。どうにでもなれよ)

(数分後)

○ラブホの部屋

照明を落としているので薄暗いが、見えないことはない明るさ

▽智美 全身にバスタオルを巻いて シャワールームから出てくる

松村

「高谷さんも、どうぞ」

▽松村 智美にコーヒー牛乳を渡し、ベッドの上に座る

▽智美 椅子に座って、コーヒー牛乳を飲む

智美

「おいしい」

松村

「ね。お風呂の後は、コーヒー牛乳だね」

智美

「とっても、懐かしい味がするわ」

松村

「僕は、小さい頃、お父さんが好きで、お風呂上がりにいつも飲んでたな」

智美

「そうなんだ」

松村

「で、次は どうするの」

智美

「どうするって」

松村

「こんな ところに来て、何もしないの」

智美

「も、もちろん するわよ」

松村

「じゃ、そんなところに座ってたら できないよ」

智美

「わかってるわよ。急かさないで」

智美

松村

智美

松村

智美

松村

智美

▽智美 立ち上がり、ベッドに座っている松村の横に座る

▽智美 コーヒーを飲みながら、部屋を見回す

「素敵な部屋ね」

「うんうん。わくわくするね」

▽智美 隣の松村の身体を見る

「え、えっと、松村君で、改めてみると、かっこいいよね」

「ありがとう」

「ちょっと、触ってもいい？」

「いいよ」

▽智美 松村の厚い胸に手を当てる

「固いのね」

松村

「そうだね」

智美

「お腹も触っていい？」

松村

▽松村 後ろに手をついて、身体を斜めうしろに傾け、腹筋部分を智美に見せる
「どうぞ」

▽智美 松村の腹筋と触る

智美

「夏休み、みんなで海に行ったときに、松村君にローションを塗ったの思い出すわ」

松村

「そうそう。あの時の高谷さんの手の柔らかい感触、今でも覚えてるよ」

智美

「そうなの」

松村

「そのあと、高谷さんがローションをこぼして 僕のこころがビショビショになっただんだよね」

▽松村 バスタオルの上から自分の股間を指差す

智美

「そうそう。私、ビックリして」

松村

「僕も、高谷さんに、競パンの上から触られてビックリしたよ」

智美

「そんなこと 合ったわね」

松村

「今日は、慌てなくていいからね」

▽智美 松村の腹筋を触っていた手を下げ、タオルの上から松村の陰茎をさわる

▽智美 松村の陰陰を優しく揉む

(智美)

(男の人のちゃんと触るの始めて。タオルの上からでも、堅さと温かさがわかるわ)

智美

「固くなってる」

松村

「そりゃ、高谷さんが前にいるんだもん。しょうがないよ」

智美

「男の人って不思議。どうして、大きくなるのかしら？」

松村

「ここにはね、海綿体ってのがあって、刺激を与えると、血液がたまり固くなるんだよ」

智美

「科学的な説明をありがとう。射精すると どうして精子が出るのかしら？」

松村

「さあ？ それは、神様のイタズラじゃない？」

智美

「急に、神頼みなのね？」

松村

「もっと触っていいよ」

智美

「ええ」

松村

「タオルの上からだど、わからないでしょ」

(智美)

(え、直接さわるの。大丈夫かしら)

▽松村 タオルの上の智美の手を掴み、タオルの中に入れる

▽智美 松村の毛の感触が指に伝わる

松村

「どっ」

▽智美 松村の陰茎を直に握る

「

智美

智美

松村

智美

▽松村 智美の顔をじっと見る

▽松村 目をつぶり 顔を近づける

▽智美 目を瞑る

▽松村 智美にキスをする キスをしながら、智美の全身を巻いている
バスタオルに掴み、バスタオルを取ろうとする

▽智美 急に立ち上がる

「待って、やっぱりダメ」

「ごめんなさい、やっぱり できないわ」

「どうしたの」

「ごめんなさい、私、ウソをついてたの。セックス、
いえ、男の人の体だって、この前、海で松村君を触ったのが初めてなの。
だけど、はずかしくて、みんなの前で、いいかつこ付けてただけなの。
中学校の時は、みんなに虐められていて、ブスで、バカで、クラスの

嫌われ者だったの」

「高谷さんは、決して、ブスじゃないよ。頭もいいし、クラスみんなは尊敬してるよ」

松村
智美

「慰めてくれて、ありがとう。」

松村君にも、悪いことしてたわ。最初は、根暗で気味が悪いなんて、思ってたりしたんだもんね。

根暗で気味が悪かったのは、私なのにね。

美優や、松子にバカにされないように、ネットでは、いっぱい調べて知識はあったんだけど、あの時は、本当は怖かったの」

松村

「無理することはないよ。高谷さんは、高谷さんらしく してればいいよ」

智美

「ああ、なんか、話したらスッキリした。明日、学校に行ったら、美優と松子に 正直に話すわ」

松村

「それは、必要ないんじゃないかな」

智美

「どうして？」

松村

「夢前さん、中川さんは、そんなこと聞いても聞かなくても、

これまでの友情は変わる事ないと思うよ」

「そうね。二人は、私がいままでいた 友だちで最高の友だちだって
言えるもの」

「うん。あの二人なら大丈夫」

「中学校で虐められていた事がばらないようにと、同級生が誰も志望しない
からってだけで、この学校を選んだの。でも、この高校を選んで本当によかった」

「僕だって同じさ。高谷さんたちに、出会えて 本当に良かったよ」

「なんか、今日の松村君、いつもと違って カッコいいわ」

「それって、いつもは、カッコ悪いみたいなんだけど」

「ふふふ。だって、学校の時の松村くんて、陰キヤなんだもの」

「陰キヤか。でも、それも悪くないかな。
だって、人に気にされずに 自由に生きていけるって、最高じゃない」

（数分後）

○（夜）繁華街の道

▽智美 松村 が歩いている

「私から誘っておいて、ごめんなさい」

「なんのこと」

「本当は、したかったんでしょ」

「いいや、一度、ラブホっての中を見たいと思ってたからさ。見れてよかったよ」

▽智美 クツスと笑う

「松村君たら」

（ひと呼吸）

「私決めた。最初に するのは、松村君って」

「え、僕」

智美 松村 智美 松村 智美 松村

智美

「そうよ。嫌」

松村

「僕なんかでいいの」

智美

「もちろんよ」

松村

「わかった。じゃ、僕も、初めては高谷さんとする。でも、下手くそって怒らないでよ」

智美

「それは、私の方よ」

松村

「そんなことないよ」

智美

「私、気持ちの整理ができれば、もう一回、松村君を誘うわ。それまで、待っていてね」

松村

「うん。わかった。でも、無理をしちゃだめだよ」

智美

「がんばるわ。それにしても、やっぱり、今日の松村君って、かっこいいわ。それに、ラブホって、本当にはじめてなの。なんか、知ってるみたいだったし」

松村

「そうだよ。そう思うよね」

▽智美　少し　悲しそうな顔

智美

「松村君って、実は、裏ではプレイボーイなの」

松村

「プレイボーイって。じゃ、正直に話すけど、みんなには黙っておいてくれる」

智美

「もちろんよ」

松村

「じつは、亡くなった父が、いくつものラブホを経営していたんだ」

智美

「え、ラブホって会社なの」

松村

「そうだよ。普通のホテルと一緒に、どこか会社がやってるんだよ」

智美

「そうなんだ」

松村

「おかげで、僕は小さいころから、ラブホ、ラブホって、虐められていたんだ」

智美

「そっか、松村君にも　そんな過去があるのね」

松村

「だから、高谷さんの気持ちが判るのかもしれないね」

智美

「そっか」

松村

「だからって、父を一度も恨んだことはないよ。むしろ尊敬してるし」

智美

「立派なお父さんだから、松村君も立派なのね」

松村

「そんなことないよ」

○商店街の中

（雪が降っている）

▽智美 手の平をあげる

手の平に雪が落ちる

智美

「あら、いつの間にか雪だわ」

松村

「どうりで、寒かったはずだよ」

智美

「クリスマスに降る雪って、ロマンチックね」

松村

「そうだね。そして、直ぐに消える。儚いよね」

智美

「今日は、素敵なクリスマスだったわ」

松村

「僕も 楽しかったよ」

智美

「松村君から、最高のクリスマスプレゼントもらったしね」

松村

「そんなの 上げたっけ？」

▽智美 唇に指を当てて

智美

「ここによ」

▽智美 松村の両手を握る

▽智美 松村 空を見上げながら、ゆっくりと回る

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

おわり

※クリスマス スペシャル編に続きます。乞うご期待